ビュ＝レメンの舞踏会　―星砂漠のスルタン―

滝沢美月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ビュ＝レメンの舞踏会　―星砂漠のスルタン―

【Ｎコード】
Ｎ４１０６Ｘ

【作者名】
滝沢美月

【あらすじ】
イーザ国の姫ティアナは隣国ドルデスハンテの首都ビュ＝レメンで行われた花嫁選びの舞踏会で、憧れのレオンハルト王子と踊ることが出来た。幸せで――だけどどんなに好きで想いが募っても報われない想いがあり、お互いに好きなのに気持ちを伝えられないまま別れの挨拶を済ませた。
見送ったレオンハルトは執務室に籠り、帰途のティアナは大雨で氾濫した川に流されてしまい――。二人の運命が大きく動くっ！　＜シリーズ第三弾＞

第1話　選ばれた花嫁

「王子は？」

ドルデスハンテ国王城、レオンハルトの執務室の扉から静かに出てきたアウトゥルは、控えの間で待機していたフェルディナントに尋ねられて首を横に振りふぅーっと心痛のため息を漏らす。

七日前、イーザ国に帰るティアナ達の馬車を見送ったレオンハルトはまっすぐに執務室に向かい、それからずっと執務をこなしている。執務室から出ることはなく、食事もほとんど取らず、睡眠はソファーで数時間のみ。まるで何かに取り憑かれたように執務をしている。

その様子を心配したアウトゥルとフェルディナントは代わるがわるにレオンハルトに寝室で休むように進言するが聞き入れてもらえなかった。

ガタガタ……と荒々しい風で窓ガラスが揺れる音がする。

外には暗雲が立ち込め風が吹き荒れ、まるで嵐が近付いているようだった。

ビュ＝レメンでは曇りの日が続いているが、国境付近では季節外れの雨が続いていると言う。

「まったくレオンハルト様はどうされたのだろうか……」

そう口にしながらも、レオンハルトが執務室に閉じこもっている理由に薄々気づいているアウトゥルとフェルディナントは顔を見合わせ、窓から暗雲の向こう――南の方角を見やる。

ティアナ様――今頃は王宮についた頃だろうか。

※

レオンハルトは自分のせいで何度もティアナを危険な目に合わせたことに胸を痛めていた。

本当はイーザ国になど戻らずに――ずっと一緒にいてほしい、愛している――と伝えたかったが、自分の想いばかりをぶつけてこれ以上ティアナに不運が訪れるのは嫌だった。だから。

「どうか――王子という肩書越しに私を見ないで下さい。王子を取り繕った私ではなく、本当の私をあなたには見てほしい。私はずっとあなたを待っていたのです。あなたを見つけるために私はこの世に生を受けたのです」

そう言うのが精一杯だった。

友人の関係でいい。異性として好きでいてくれなくてもいい。側にいてくれなくてもいい。だからせめて、澄んだ輝きのある瞳には本当の自分を映していて欲しい――今の願いはそれだけだった。

ティアナに本当の想いを伝えるのは、自分がもっと立派な王子になり国を支え民を愛し、ティアナを何者からも守れる強さを手に入れてからだと心に誓う。

今のままではティアナの側にいることは出来ない――

だから笑顔でティアナをイーザ国に見送り、約束をした。今度は私があなたに会いに行きます、と。

溢れる気持ちを胸に抱え、それを溢さない様に必死に取り繕う為には、執務に夢中になるのが一番楽だった。

仕事をしている間は他の事を考えずに済む――だからティアナを見送ってからずっと執務室に閉じこもっていた。

※

無茶をするレオンハルトの本心に気づいているアウトゥルは切なくて胸が締め付けられた。

今もレオンハルトが籠る執務室へと続く扉に視線を向け、ほぉーっと息を吐きだす。

「王族というものは、切ないですね。己の感情に突っ走ることも出来ず、好きな人に好きと言う事も出来ないなんて……」

眉尻を下げて泣きそうな声で呟くアウトゥルの肩を、フェルディナントはぽんっと優しく叩く。

「仕方ない、それが王族の定めなのだから。せめて我々は、ずっと王子の側にいよう」

「ええ……っ」

耐えられずに嗚咽を漏らして泣くアウトゥルだったが、続いて出てきたフェルディナントの言葉にきょとんとする。

「それにしても、結局、王子の花嫁選びの舞踏会はどう決着がついたんだ？」

「えっ――？」

「王妃様は舞踏会の日に花嫁を選ぶと言っていた。つまり、もう誰かが花嫁に選ばれているはずだろう？」

「ああ、そうだね。あんなに結婚結婚と騒いでいた王妃様の周りは舞踏会の翌日からは妙に静かで、こちらも時空の裂け目の問題でバ

タバタしていたからすっかり忘れていたけど……どうなったんだろう？　なんだか急に気になってきたっ」

気にし出したらどうしようもなく気になって、アウトゥルが落ち着きなく部屋を歩き回り始めたその時。

コンコンと、廊下から控えの間の扉が叩かれる音がして、アウトゥルが素早く扉に近づいて開けると、王妃付きの女官が立っていて王妃の訪問の先触れを告げた。

「具合が悪くて寝込んでいたそうだけど、体調はもういいのですか？　最近は天候も優れないし、気分がめいってしまうわね」

執務室の手前にあるサロンのソファーに優雅な腰掛けた王妃が、口元を扇で隠して目の前に座るレオンハルトに尋ねる。

向かい側の一人掛けのソファーに腰掛けたレオンハルトの顔色は青白く、目の下の隈は酷い。数日前と比べて明らかにやつれていて、とても元気とは言えない状態だったが、レオンハルトはあえて肯定する。その口調は素っ気なく、覇気がない。

「ええ、おかげ様ですっかり元気になりましたよ」

レオンハルトが時空石の裂け目に触れて猫に戻ってしまっている間、レオンハルトは具合が悪くて倒れたと言うことにして、人払いをしていた。

もちろん具合が悪かったというのは嘘で、レオンハルトがやつれているのは一週間の間、ほとんど食事も睡眠もとらずに執務室に籠っているせいだった。

「それよりも、ご用件は何ですか？　私は忙しいので手短にお願い

しますよ」

母が尋ねて来ると碌なことがないことを知っているレオンハルトは適当にあしらう様に言う。

ソファーの背もたれに寄りかかり、気だるげに手を振って追いだそうとする。憂鬱そうに陰った瞳はどこかぼぉーっとしている。

「あら、素っ気ないのね。あなたの未来に関わる大事な話で来たというのに」

気を引こうともったいぶって言う王妃に、レオンハルトははぁーっと小さくため息をつく。

相手にしないといつまでたってもサロンに居座りそうな王妃の態度に諦め、視線を正面に向ける。

「分かりました。どんな要件ですか、ちゃんと聞くので早く話して下さい」

「先日の舞踏会は素晴らしかったわね。あなたの花嫁を決める舞踏会だからとどこの娘達も気合い十分で、ほんとに素晴らしかったわ」

ふふふっと扇の裏で優美な笑い声を立てる。

「それで母は決めましたのよ」

え――……

含み笑いに嫌な予感がして、レオンハルトは片眉を上げる。

「あなたの花嫁は――イーザ国のティアナ姫に決定致しましたのよ」

第1話　選ばれた花嫁（後書き）

お待たせいたしました。えっ……誰も待っていませんか（^^；
ビュ＝レメンの舞踏会シリーズ第三弾です！
前シリーズはシリアスなカンジだったので、今回はあまあまなカンジでいきたいと思います。
最後までお付き合い頂けると嬉しいです＞m（__）m＜

第2話　嵐の前触れ

「なんですって……っ！」

それまでずっと、心ここにあらずといった様子で王妃の話を聞き流していたレオンハルトが、背もたれに預けていた背中をがばっと起こし、針のように鋭い視線で王妃を見据える。

レオンハルトから少し離れた後ろに立って話を聞いていたアウトゥルとフェルディナントは顔を見合わせる。

王妃の話をしている時にタイミング良く現れたのは、舞踏会のことで来たのではないかと予想を立てていたが、本当にその話で一瞬驚いた顔をしてすぐにその表情を隠す。

「ティアナ姫は小国といえども一国の姫君、しかも大姫らしいわね。薔薇の妖精のような清楚可憐な容姿、凛とした眼差し。身分にも容姿にも問題なく、これ以上の結婚相手がいるかしら？」

王妃に聞かれたレオンハルトは唇をかみしめ、後ろに立っていたアウトゥルが「そうですね」と頷く。そんなアウトゥルをちらっと睨み、反論する。

「しかし、母上。私とティアナ様の関係はよき友人であって――」

「それに――」

なんとかティアナを婚約者にするという考えを改めて貰おうと口を開いたが、レオンハルトの声に被さって王妃が強い口調で遮る。

「あなたはティアナ姫のことがお好きなのでしょう？」
「……っ」
レオンハルトは否定しようとして開いた口を、ぎゅっと噛みしめて横を向く。
「誤魔化しても母にはお見通しですよ、見ていて分かります。それに、あなたが母に初めて紹介した女性です。そのおつもりで紹介したのでしょ？」
問われて、レオンハルトは視線を伏せる。

王妃の言っていることに一つも間違いはない――
ティアナを紹介した時、レオンハルトは友人と言いながらもそこに自分が好意を寄せている大事な人だと言うことを含ませて紹介した。
彼女になりそうな人がいるということをアピールした。
それは、だれも王妃に紹介しなければ、自分の意思を無視して結婚相手を決められそうだったからだ。
レオンハルトが結婚したいと思っているのは――好きなのはティアナだ。ティアナ以外のだれかと自分が結婚するなんて考えられなくて、それを回避するための予防線だった。
だけど一方で――
レオンハルトは未だに自分の気持ちをティアナ本人に伝えることが出来ていなかった。
自分のせいでティアナを危険な目にあわせてしまった負い目から――とても気持ちを伝えることは出来なかった。
このままの状態では、ティアナと婚約することはできない。
いま婚約すれば、確かにレオンハルトが夢見たティアナとの未来

がある。でもそれは、国同士の政略結婚であり、愛のない形だけのものだった――

レオンハルトはなんとかティアナを花嫁候補から外したいと思っていた。欲を言えば、王妃が固執する結婚話さえ、一蹴してしまいたかったが――第一王子という立場上、いつまでも結婚しないでいられないことは分かっている。

結婚は王族にとって義務であり、果たすべき責任である。

「――っ」

どうにかティアナを婚約者にするのを諦めて貰おうと頭を高速回転で動かし、口を開いた時、せわしないノックの音が響く。

「フェルディナント隊長……っ」

レオンハルトがノックの音に答える前に扉が開き、武官の一人が駆けこんで来る。

「大変です……っ」

緊迫した空気でフェルディナントの側に駆けより、隊長であるフェルディナントの眉間に皺を刻んだきつい顔に、はっと我に帰る。

「ヴァルター、王妃様と王子の御前だぞ。申し訳ありません、王妃様、王子。少々席を外させて頂きます」

前半は返事も待たずに駆けこんできた部下を叱り、後半は王妃とレオンハルトに告げ、一礼して控えの間へと移動する。

フェルディナントとヴァルターの姿が消えた後、レオンハルトはアウトゥルと視線を見合わせて、顔を顰める。

普段、礼儀に厳しいフェルディナントを隊長に持つ武官たちは、こんな風に取り乱したりすることはない。非常事態でも起きたのかと眉をひそめ、闖入者で婚約の話がそれた事にほくそ笑み王妃に振り返る。
突然の出来事に呆気に取られていた王妃は誤魔化すようにこほんと咳払いする。

「いいですか、とにかくティアナ姫をですね……」

王妃の言葉を遮って、レオンハルトは余裕のある笑みで王妃に告げる。

「母上、大変申し上げにくいのですが……ティアナ様を婚約者に向かえるのは無理ですね」

全然残念そうじゃなく言ったレオンハルトに、きっと片眉を上げて王妃は睨んだ。

「ティアナ様はすでに自国イーザにお帰りになりました。そうですね、旅立たれてから七日は経ちますから――今頃は王城に着いた頃でしょうね」

王妃はティアナが帰ったと聞いて、扇の裏で唇をかみしめる。
ティアナを花嫁に選んだと伝えに来るのが今日になったのは、イーザ国の内情を調べさせたり、王や諸貴族達への根回しをしていたからこんなにも日にちがかかってしまったのだ。
何よりも先に、ティアナを引きとめることを優先するべきだったと後悔する。しかし、一度決めたことをどんな手を使ってもやり遂げようとするのが王妃という人だった。
おほん、と王妃は咳払いし。

「それならば、今すぐにイーザ国に使者を出します。あなたとティアナ姫の婚約を国として打診する使者を立てます――」

国として――それをされれば、イーザ国はまず断れないだろう。例えイーザの意見を聞くと言っても、南の小国の一つにすぎないイーザが大国ドルデスハンテ国を敵に回すことは出来ない。

国として婚約を求められれば、それを断ると言うことは国同士の和平を壊すことになってしまう――

「母上――っ」

どう足掻いてもこの婚約を進める気だという気迫に、レオンハルトは気圧される。

その時、控えの間からフェルディナントとヴァルターが出てくる。ヴァルターは先程の無礼を詫びると一礼してサロンを出て行った。

フェルディナントはレオンハルトの側に近寄る。

「レオンハルト王子、ご報告致したいことがございます」

フェルディナントの言葉にレオンハルトはこれで王妃を追い払うことが出来るとふぅーっとため息をつく。

「母上、申し訳ありませんが、この話はまた今度いたしましょう」

出来れば、その今度は永遠に来ないでくれたらいいと思う。

「わかりました――」

王妃は明らかに機嫌悪そうに言って口元にあてていた扇を閉じて

立ち上がろうとしたが、フェルディナントが遮る。

「王妃様もどうか、ご同席下さい」

そう言ったフェルディナントに、レオンハルトとアウトゥルは怪訝な視線を向ける。

フェルディナントは軽く頭を下げ、ソファーに座りなおした王妃を見て話しだす。

「ご報告申し上げたいことと言うのは――ティアナ姫様のことです」

ティアナの名前を聞き、レオンハルトは誰にもわからないくらい小さく肩を震わせた。

第2話　嵐の前触れ（後書き）

ランキングに参加しています。
「小説家になろう　勝手にランキング」ぽちっと押して頂けると嬉しいです（＾＾）

第3話　悲報と吉報

王子の執務室のサロンに無作法に現れた部下のヴァルターを一睨みし、レオンハルトと王妃に詫びたフェルディナントは控えの間へと移動した。

フェルディナントに続いて控えの間に入ったヴォルターは失態に落ち込みながらも、自分がなぜ駆けつけて来たかを思い出してはっと顔を上げる。

フェルディナントも、信頼している部下の一人であるヴァルターが取り乱すくらいだから、余程のことがあったのだろうと察して、表情を引き締めてヴォルターを見据える。

「フェルディナント隊長、報告致します」

ぴんっと背筋を伸ばし姿勢を正したヴァルターはきびきびとした、だけど押さえた声で話しだす。

「先程、イーザ国に向かう馬車の護衛をしていたロルフから早馬の知らせが届きました」

イーザ国に向かう馬車――というのはレオンハルトがティアナの為に用意した帰国のための馬車で、馬車を守る護衛武官を四名つけていた。ロルフはそのうちの一人――

フェルディナントは眉間のしわを深くし、無言で話の先を促す。

「報告によれば、ティアナ姫様は行方不明と――」

沈痛な面持ちで言ったヴァルターは、ロルフからの手紙をフェルディナントに差し出す。
手紙にさっと目を通したフェルディナントの表情が曇った。

※

控えの間からサロンに戻ったフェルディナントは報告することがあると言って、レオンハルトだけではなく、王妃の同席も願い出た。
テーブルを挟んで座るレオンハルトと王妃の間、テーブルの横に立ったフェルディナントは、眉間に皺を刻みながら話しだす。

「ティアナ姫様帰国の護衛についた者から早馬の知らせが届きました」

早馬――の単語に、何かよからぬことがあったのだと察して、レオンハルトが表情を引き締める。背もたれに預けていた背を起こし、膝の上で手を組んでフェルディナントを見据える。
レオンハルトからの視線を受け、フェルディナントは続きを話す。

「三日前、国境付近の街道を進んでいたようです。しかし国境を越える手前の街道が数日間の豪雨による土砂崩れで塞がれ、隣国のフルス国の国境を越えオーテル川沿いの街道へと迂回したらしいのですが……その途中、氾濫した川にティアナ姫様が流されてしまったそうです……」
「……っ」
「まぁ……」

レオンハルトの息をのむ音と、王妃の不安に揺れた声が重なる。

ヴァルターが駆けこんできた時から、なんだか胸騒ぎがしていた。何かよくないことが起きたのではと考え、頭の片隅に浮かんだ不安をまさかと追い出していたのに――

「ティアナ様が……」

驚愕の出来事に言葉を失っているレオンハルトに、ロルフからの手紙を差し出す。

「ジークベルト殿と侍女殿はユンゲンが王宮まで送り、ロルフは早馬を出した後、国境の兵士を集めティアナ様捜索部隊を編成し捜索中です。しかし、国境付近は連日の豪雨で街や村の被害も酷く捜索隊に避ける人員も限られているとか……」

手紙に素早く目を通し、驚いた感情を落ち着かせて今やるべきことを瞬時に考える。

「至急武官を召集し、国境に向かわせる――三分の一を国境の街道整備に回し、三分の一を国境の街や村の復興に、残りをティアナ様の捜索隊に派遣する。王の許可は後だ、今すぐ伝令をまわせ」

威厳に満ちた鋭い瞳で言ったレオンハルトに、フェルディナントは頷き返す。

「すでにヴァルターに武官の招集に走らせました。半時後には国境に向けて出発できるでしょう」

「しかし……」

それまで黙っていたアウトゥルが、懸念の声を上げる。

「国境付近の豪雨はまだ続いているそうじゃありませんか。悪天候で視界も優れず、捜索は難航しそうですね……」

誰もがティアナの行方に思いをはせ――沈黙に包まれる。しばらくの間を挟んで、王妃のぱちんっと扇を閉じる音で、思考から現実に戻される。

「私達には……ティアナ姫の安否を、ただ願うことしかできないわね。ひとまず婚約の話はティアナ姫の行方が分かるまで先延ばしにします」

優雅に立ち上がった王妃は伴ってきた女官を引きつれてサロンを退室した。

やっと王妃が退室し、レオンハルトは肩の力を緩めるが、複雑な気持ちに顔を顰める。

立ち去り際に言った王妃の言葉が胸に突き刺さって抜けない――ティアナが行方不明と聞いていてもたってもいられなかった。出来ることならば今すぐ国境に向かい捜索隊の陣頭指揮をとりたかった――でも。王城を離れるわけにはいかない。

執務室から部下に指示を出した後は報告が来るのを待つだけ。ただ願うだけしか出来ない自分に――王子という肩書に嫌気がさしてくる。

沈黙しているレオンハルトを気遣わしげに見るアウトゥルと何か言いたそうにしているフェルディナントの視線に気づいて、レオンハルトは苦笑いを浮かべる。。

「さて、執務室に戻るか……」

言いながら立ち上がったレオンハルトを見つめる二人を安心させるように、わざとらしく肩をすくめる。

「心配するな……城を抜け出してティアナ様を探しに行こうだなんて考えていない。私が国境に行っても出来ることはほとんどない。それよりも……ここでやらなければいけないことをする――」

精悍な顔つきで、レオンハルトは窓の外のうねる黒い雨雲に向けた。

※

ティアナを見送ってからずっと執務室に籠っていたレオンハルトの元には、各地からの異常気象の報告が上がってきていた。

いや――それ以前、レオンハルトが最初に猫にされて王城に戻ってきた時には、僅かだが異常気象についての報告を受けていた。

その処理のため――各地に武官を送り、対策会議への立案などで舞踏会前から忙しかった。

初めこそ報告の数は少なかったが、南での集中豪雨、東での地震、北――王都での風害は目に見えて酷くなっている。

時空の裂け目の出現報告についても、日に日に件数が増え続ける――

その対応に明け暮れる中、国境からの定期報告を待ち望み――報告の度に、未だ消息がつかめないことに落胆する。

ちょうど、ティアナ行方不明の報を受けてから十二日が経った頃。

仕事の書類と一緒にレオンハルト宛の手紙を携えてアウトゥルが

執務室にやってきた。

「レオンハルト様、しばらく手紙類には目を通されていないようですね」

そう言ってアウトゥルは片手では抱えられない量の手紙をレオンハルトの執務机の端に置く。

「大半は貴族からのくだらない手紙だ。今は目を通している時間はない」

くだらない手紙というのは――私の娘を婚約者にどうか、とか。王位継承に有利になる財力を持っているから昇格させてくれ、だの。自分の欲望のためにレオンハルトに取り入ろうとする下心を持った貴族からの手紙だった。

一時もおしいこの状況で、そんなものを読んでいる無駄な時間はなかった。

アウトゥルははじめから素直にレオンハルトが手紙を読むとは思っていなかったようで肩を落とす。

「分かっています。ですが、大事な手紙もあるかもしれませんよ？休憩がてら、手紙に目を通してみてはいかがですか？」

そう言って、さっき置いた手紙の山とは別に持っていた数枚の手紙を差し出す。

面倒くさそうに手紙に視線を向けたレオンハルトは、手紙の差出人の中にエリク王子の名前と、もう一人の名前を見つけて――

衝動的に手紙に手を伸ばして受け取り、手紙を読むために執務机から移動して部屋の中央のソファーへと座る。側の小卓の上に数枚の手紙を置き、その中から一つの手紙を取り出す。

差出人の名前はジークベルト――レオンハルトが森の魔法使いにかけられた魔法を解いてもらうために見つけた実力の計りしれない魔導師であり、ティアナと共に馬車で帰った人物である。

ティアナが行方不明になった時すぐ側にいたジークベルトなら、行方不明になった時の状況についてより詳細な情報を得ることが出来るかもしれないと思ったが。

ペーパーナイフで封を切り取りだした手紙を読み進めるうちに、レオンハルトの顔色はどんどんと青白くなっていった――

第4話　手のひらのブルー

時は遡って、ドルデスハンテ国の王城を出発しイーザ国に向かう馬車の中。簡素な衣装に身を包んだティアナは窓の外に目を向けて、眉を曇らせる。

「すごい雨ね……」

馬車は四日前に王都ビュ＝レメンを出発し、バノーファ、チェ、ザッハサムの街と順調に街道を南下してきたが、チェの街を過ぎたあたりから馬車の外は土砂降りが続いていた。

ザッハサムの街に寄った時、行きに売ったイザベルの服が売れたのかどうかイザベルが気にしていたので古着屋に行ってみることにした。

店主の話では売れ行きは好調で、ぜひまた売って欲しいと乞われる。今あるのは旅行用と舞踏会用の衣装だけだからと断ったがどうしてもと頼まれて、イザベルの作った服が評価された事がすごくうれしくて、国に帰るのに必要な服だけを残し舞踏会用の衣装と旅行中に来ていた服を数着売ることにした。

だからティアナが今着ている服はイザベルの侍女用の服を借りていて、丸襟がついた膨らみの少ない裾のセピア色のワンピースを着ている。

古着屋の帰り、店主にこの辺りでは雨が多いのかと聞くと、雨の少ない地域だがここ数日ずっと降り続けていると浮かない顔をしていた。

ティアナ自身、バノーファの街を過ぎた時に南の空を覆う雷雲を確認していたけれど、まさかここまですごい大雨だとは予想してい

なくて怪訝に眉を顰める。
ティアナが暮らすイーザ国は南の温暖で気候に恵まれた土地だった。雨は春と夏の間に集中的に降ることもあるが、季節はすでに夏を終わろうとしている。
国境を隔てて隣接するザッハサムとイーザ国ではそれほど気候は変わらないはずで、現に店主もこんな雨は初めてだと言っていた……
嫌な予感が胸に渦巻き、落ち着かなくて小さなため息をつく。

「そうですね。せっかくのドルデスハンテの街の見納めだといのに、こうも雨が強く降っていては素晴らしい景観も眺められなくて残念ですね」

左隣に座ったイザベルはふんわりと柔らかい笑みを浮かべる。
きっとティアナが雨をうっとうしがっていると思ったのだろう。ティアナはイザベルに心配をかけないように不安を隠して頷き返した。

レオンハルトが用意してくれたのは四頭仕立ての四輪箱型馬車。長距離に適した揺れを伝わりにくくするばねがついていて乗り心地が良く、客室は箱型で二人ずつが向かい合わせで座る四人乗り、サイドと前面がガラス張りで道中景色を楽しめる造りになっている。軽量化のため客室は少し狭いけれど、快速を誇る。
人の足ではイーザ国からドルデスハンテ国の首都までは二十日かかる道のりも、この馬車でなら六日着くという。
ふっと正面――進行方向側の座席の中央に一人で座るジークベルトに視線を向けると、室内が狭いからか、足を汲んで右隅に斜めに寄りかかり、羽織った漆黒のマントの裾を座席の上に乗せていた。
水面の様な透き通った水色の双眸は今は閉じられ、寝ているのか考え事をしているのだろう。
なんとなくジークベルトを見つめていたティアナに、イザベルが

あらっと首をかしげる。

「ティアナ様、大切そうに握っているその箱はなんですか？　ずっと持っていますよね？」

イザベルに尋ねられ、ティアナは手のひらに握る白い小さな箱に視線を落とす。

それは帰国の日、見送りに来たレオンハルトが出発直前にティアナに渡したものだった。

『友人の印に……約束の果たされる日を願って――』

そう言ってレオンハルトは、馬車に乗り込んだティアナを一瞬切ない瞳でみつめ、薫るような甘い頬笑みを浮かべた。

約束というのは――今度は私があなたに会いに行きますと言ってくれた言葉のこと。

ティアナはその約束が嬉しくて、その日を支えに日々を過ごして行こうと思っていた。だからこの箱はとても大事な証――ティアナがただ一つ確かに手にしている約束の証で、それと同時に友人の証でもあった……

あくまでレオンハルトと自分の関係は友人だと一線を引かれたようで、胸が締め付けられるように痛んだ。

嬉しいけど、寂しい。開けたいけど、開けたくない――

そんな複雑な心情で、王都を出てからずっと開けられずにいた。

「えっと、レオンハルト様にいただいたのよ」

愛おしそうに小箱を見つめて言うティアナに、イザベルは優しく促す。

「まぁ、それは素敵ですね。中はなんなのでしょうか？」

開けられずにいるとは言えず、ティアナは苦笑して首をかしげる。

「それが、まだ開けていないのよ……イーザに帰ってから開けようと思っていて……」

開けていない理由を誤魔化す。きっとイーザについても開けられないだろうと思って、苦笑する。

「まぁ、それはダメですよ。贈り物はすぐに開けてみなければ失礼になっちゃいます」

切羽詰まったような口調のイザベルに急かされて、そういうものかな――？　と首を傾げながらもティアナは手を胸の位置に持ち上げて小箱をまじまじと見つめる。

「んー……そうね……」

迫力に押され、好奇に瞳を輝かせるイザベルを横目で見ながら、白い小箱に結ばれた淡い桜色のリボンの端を指で掴み、ゆっくりと引っ張る。

結び目がほどけ、はらりとリボンが床に垂れさがる。解いたリボンを膝の上に置き、左の手のひらの上に小箱を置き、蓋に右手をかける。

「じゃあ、あけるわよ」

誰に言うでもなくティアナは呟き、えいっと勢いよく蓋を持ち上げると、中には輝く大粒のラピスラズリのネックレスが入っていた。

「まぁ……ネックレスですか。素敵ですね」

箱の中に恭謹に収まる涙型のラピスラズリはブルー、中に混ざった金色の鉱物がまるで星の様で、宇宙を丸めたような輝きのネックレスだった。

パイライトの鎖の先についたラピスラズリを持ち上げて、右腕にはめたラピスラズリのブレスレットと交互に見比べる。

胸に熱い想いがわぁーっと押し寄せて、泣きそうになる。ティアナはネックレスを掴んだ手で顔を隠すようにして俯き、イザベルに頷き返す。

「ええ、そうね……」

レオンハルトがくれた贈り物はラピスラズリのネックレスだった。数年前、初めて貰った贈り物もブレスレットと同じ――ラピスラズリ。

ブレスレットを貰ったお礼を言ったから思い出してくれたのかもしれない。ラピスラズリはドルデスハンテ国で採れる鉱石の代表格であるから、偶然だったのかもしれない。

不安に揺れながらも、ブレスレットと揃いでくれたのだと確信する心があって、胸が熱くなる。

隣に座るイザベルに気づかれないように目元を拭い、ネックレスを首にかける。

胸元で揺れるブルーが切なげに瞬いて、ティアナは遠い北方――ビュ＝レメンの方向を見やった。

第5話　運命の峡路（かいじ）

もうすぐドレデスハンテを出る馬車の中、ティアナは国に帰ってからのことを考えていた。

まずは心配かけたみんなに謝って。お父様は怒っているかしら……怒っていたら、仕方ないけれどちゃんとお説教を受けるわ。

もうすぐ秋の収穫の時期だから、数ヵ月手伝えなかった分を取り戻すくらい準備や収穫をいっぱい手伝って。

そうだ、久しぶりにエリクお兄様に手紙を書こう。今はどのあたりを遊学中なのかしら――

あとマグダレーナのお墓に行ってみよう。建国の間にも。なにかティルラに関することが分かるかもしれない。

それから――

ルードウィヒについて……

考え込んでいたティアナは、馬車がゆっくりと停止して顔を上げる。

どうしたのだろうと物見窓から外の様子を伺うと、馬車を取り囲むように馬で並走していた護衛武官と御者が話していた。

護衛武官の一人が騎乗したままティアナが座る右側の窓に近づき、ティアナが窓を開ける。

「申し訳ありません、ティアナ姫様。もう少しで国境を越えるところまで来たのですが、この先の道が土砂崩れで通れなくなってしまっていて……少し遠回りになりますが、隣国フルスの国境を越えてオーテル川沿いの街道に進路を変更させていただきます」

「土砂崩れで塞がれてしまったのでは仕方ありませんね。迂回路でお願い致します」

ティアナはふわりと笑顔を浮かべて、武官に任せた。

国境を越えフルス国に入ってからは道幅が狭く馬車の前後を二頭ずつ護衛武官が走り、うねる山間の道を進む。

雨は一向にやむ気配はなく、昼間だというのに馬車の物見窓から見る外の景色は夜のように薄暗かった。

ザァーっと降りつける雨の音は激しく、時々、馬のいななきとガタガタと車輪の軋む音が聞こえる。

話そうにも雨音にかき消されてしまい、国境を越えたあたりからは会話が途切れ、ティアナもイザベルもうとうとと瞼をとじ、ジークベルトも目を閉じていた。

ガコンッ――という軋む嫌な音と同時に車内が大きく揺れる。

激しい震動にティアナとイザベルの体は大きく左右に揺さぶられ、ジークベルトは足で突っ張って体を支えていた。それは一瞬の出来事で。

ガタタンッ――

次の瞬間、再び大きな音がし、ひと際大きな馬のいななきが聞こえて馬車が大きく左側に傾く。

「きゃっ――」

傾いた勢いで左側の扉が開いてしまい、近くに座っていたイザベルが馬車の外へと投げ出される。

「イザベル――っ！」

悲鳴をあげ夢中で手を伸ばしたティアナはイザベルの右腕をぎりぎりで掴んだ。しかし――傾く馬車の中、体勢を崩してしまう。

斜めになった床に足を取られ、イザベルの左手を掴んでいたジークベルトが引き上げた反動で、ティアナは雷雨で黒く覆われた空から降りしきる大粒の雨の中に放り出されてしまった――

※

一度目の軋む音で、瞼を閉じていたジークベルトは瞳を開け、素早く足に力を込めて揺れる体を支えた。

何が起きたのかと窓の外に視線を向けた次の瞬間、馬車が大きく右――進行方向むかって左に傾く。

「きゃっ――」

轟音を立てる雨音の中に馬のいななきとイザベルの悲鳴が交じる。見やると、傾いた弾みで左扉が開き、イザベルが外へと投げ出されそうになっていた。

ジークベルトは咄嗟に自分の体を支えるために前方の窓枠に右手をかけ、左手でイザベルの腕を掴む。傾いたままの馬車、イザベルの体重に引きずられそうになって、窓枠を掴んだ手にぐっと力を込め、思い切りイザベルを引きあげた。

その瞬間――

イザベルのもう片方の腕を掴んでいたティアナが反動で馬車の中から滑り落ちて行く。その様子がスローモーションでジークベルトの視界をかすめ、はっと気がついた時には馬車の中にジークベルトと引き上げられて床に突っ伏すイザベルしかいなかった――

「――っ！？　ティア――……？」

呆然と発したジークベルトの声は雨音にかき消される。
状況が理解できずに呆然とするジークベルト。そこに馬を降りた護衛武官の一人が近づいてくる。
「大丈夫ですか、お怪我はありませんか？　連日の雨でぬかるんだ場所に車輪がとられて馬車が街道からそれて川岸との段差に傾いてしまったようです……」
安否を問い、今置かれている状況を冷静に説明する護衛武官の言葉に、凍りついたように目を大きく見開いていたジークベルトは数回瞬きし、掠れた声を出す。
「ティアナが……落ちた……――ティアっ！？」
はっと我に返る。雨の降りしきる馬車の外にかけだしてティアナが落ちた辺りの場所に近づこうとしたジークベルトは、後ろから腕を引かれ制止させられる。
「いけません、ジークベルト殿っ！　この先はオーテル川です。雨で氾濫してすぐそばまで河川が迫っています……っ」
薄暗く激しい雨のせいでよく見えていなかったが、ジークベルトの足の二歩先には荒れ狂った河川の水がすごい勢いで流れていた。護衛武官が止めてくれなかったら、ジークベルトは今頃、激流の川に流されていただろう……
オーテル川は国守の森の湖と海を繋ぎフルス国を縦断する細く長い河川である。川幅は狭く、穏やかな清流である。
しかし今は、連日続く大雨で河川の水嵩が増し川岸まで溢れかえっている。流れる勢いは増し、荒々しく渦巻きあらゆるものを飲みこんで押し流していく。

目の前の光景に――馬車から落ちたティアナの姿がどこにもないことを認め、思考がはっきりとしていく。

ジークベルトは落ち着いた声で護衛武官に告げる。

「ティアが……ティアナが川に落ちて流されてしまった――」

その声は雨音にかき消されない様な意思の強い声音で、その瞳は悲愴に揺れていた。

第5話　運命の峡路（かいじ）（後書き）

ランキングに参加しています。
「小説家になろう　勝手にランキング」ぽちっと押して頂けると嬉しいです（＾＾）

第6話　渡りに船

ザァーという静寂を破る音。川面に跳ねる水音を響かせ、視界が暗闇に飲みこまれた。夜空の様な漆黒に、口から漏れた泡沫（うたかた）が星のように白く輝く。

いつか大事な人と見た星空に似ている――と思い、ふっと息が切れて意識が途切れる。

それが最後の光景だった――

※

ザザーンッ――という水しぶきの音に、ティアナは床に横たえていた体をゆっくりと起こす。

周りを見渡すと木張りの壁と床の小さな部屋のような場所で、体の下には藁が敷かれていた。

見覚えのない場所にいることにしばし瞠目し、直前の記憶を思いだそうとして、ズキズキと頭に痛みが走った。

ティアナは額に手を当てて顔を顰める。

いったいここはどこなのだろうか――、それに――

「あら、あんた起きたね、体調はどう？」

痛む頭に手を当てたまま声のした方を振り仰ぐと、ティアナより二つ三つ年上の女性が膝をついて心配そうな顔をしている。

「……だいじょうぶ、です……」

不安げな顔で頷くティアナに、強い意思を宿した黒い瞳を和ませて女性が快活に笑いかける。

「それは良かった」

そう言ったにもかかわらず、僅かに陰りを帯びた顔で肩をすくめる。

女性がなぜそんな顔をしたのか分からなかったが、知らない場所で親しげに声をかけてくれた女性に警戒心を緩めて問いかける。

「あの……ここはどこなのですか？」

よく見ると、部屋の中にはティアナと話しかけてきた女性以外にもたくさんの女性がいた。ある者は横になり、ある者は壁際にうずくまって座っている。会話しているものはほとんどおらず、その静けさにいままで他に人がいることに気づいていなかった。およそ……八十人くらいだった。

女性はティアナの質問に眉根を寄せて驚き。

「覚えてない……？　あんた、海で遭難しているとこをこの船――“アスワド号”に拾われたんよ」

尻すぼみに言葉を濁し、視線をそらしてしまう。

「アスワド号……？」

聞き慣れない単語に首をかしげると、困ったように肩をすくめ、女性は周囲に視線を泳がせてからティアナに近づく。

「あんた……アスワドの名前を知らないなんてやっぱりポラリスの

人じゃないね？」

やっぱりという言葉に首をかしげるティアナに、女性は苦笑して横に座った。

「あたしの名前はレナーテ、よろしく。この船アスワド号はポラリス島とロ国を結ぶ労働船。あたしもそうだしここにいる人はみんな出稼ぎでロ国へ行くんよ……」

レナーテと言った女性は、明るい笑顔の双眸を郷愁に揺らした。

ロ国というのは東の大国、国土の六割を砂漠が占め、街にはいく筋の運河が廻る水の国。海路を有する貿易に盛んな国で、民芸品などの売買が主な産業である。

ポラリスは北のドルデスハンテ国よりもさらに北――北西に位置する一体の名称で、独立した国家は存在せず数多の部族が集落を形成している。多くは移牧民で、夏は山に、冬は低地に移動している。

労働船というものを聞いたことがなかったが、出稼ぎと聞きなんとなく意味を理解して頷いたティアナに「でもね……」とレナーテが言葉を濁す。

「労働船って言うのは名ばかり……実際は奴隷船とほとんど変わらないけど」

奴隷船――その単語にティアナはドキンっと胸が跳ねる。

人間でありながら自由や権利が認められず所有物とされる。所有者の絶対的な支配の下に労働を強要され譲渡・売買の対象とされる――奴隷。その奴隷をポラリスからロ国に運ぶのが奴隷船。

ロ国の豪商によって拡大された組織で、未だに奴隷を売買する奴隷市が存在すると聞いたことがある。

この船がその奴隷船だと聞いて、恐怖に背中が震えだす。

不安そうに隣に座るレナーテを見たティアナ。
胸の前で膝を抱え足元に視線を下としていたレナーテは顔を上げて話を続ける。

「ううん、もともとは奴隷船だった――と言うのが正しいね」
「えっ……？」
「奴隷制度は一年前にロ国に新しく即位されたスルタンによって即刻廃止されたんよ。代わりに出来たのがこの労働船と労働組合――通称ギルド。あたし達はこの船でロ国の北の玄関口シュチェンのギルドで職を斡旋してもらう。と言っても、この船は奴隷船廃止後初めての労働船というわけさ」
「そうなのですか……」

奴隷船ではないと聞き、ほっと安堵する。
そういえば確かに一年前、ロ国に新しいスルタンが即位したという知らせを受けた。ロ国は数年間内乱が続き国内情勢は悪化し、元々国交もなく、スルタン即位以外の情報は入ってきていなかった。
即位後は内政の安定や国交に忙しいんだろうに、それでも即位一年で忌まわしき歴史である奴隷制度を廃止するなんて、傑物なスルタンなのだろうと想像する。
想像して――なんで自分は国政に詳しいのだろうと頭の片隅で首をかしげる。

「だけど正直、みんな不安なんよ。奴隷制度が廃止され労働船が出ると聞いてほとんどの者が安堵した、これで奴隷制度に苦しむ事も、奴隷として誰か連れさられることもない――ってね」
ティアナには想像も出来ない苦境に生きてきたレナーテのそれを思わせない気丈な態度に尊敬の念を抱く。

「労働船の説明を受けて、ギルドに行けばお金を貰って働けるって聞いて誰もが家族のため愛する人のために志願した。例えそのお金が微々たるものでも労働がきつくても、奴隷よりはなしだって思って。だけどね……この船は奴隷船を塗り替えただけ。商人のあたし達に対する態度だって酷いもんさ。こんな狭い部屋に閉じ込めて、食事もろくに出さず、何十日間もこんなとこにいれば頭がおかしくなりそうさっ……」

憤った声でレナーテは言い、苛立ちを追いだすように頭を振って苦笑する。

「アスワド号のことを何も知らないあんたにこんな話して不安にさせてごめんよ」

「いえ……親切にいろいろ教えて下さってありがとうございます」

礼儀正しく言って頭を下げたティアナを、目を丸くしてレナーテが見つめ、ふわりと笑う。

「あんた、どこぞの令嬢かなんかなの？　その銀髪といい、ポラリスでは見かけない珍しい色だし……」

そう言って優しくティアナの銀髪を手で梳く。

レナーテが言うにはポラリスの人々は赤毛や栗毛がほとんどらしい。言われてみれば部屋の中にいる女性はみんな赤毛か栗毛のどちらかで、レナーテも栗毛だった。

「あの、私はこれからどうなるのでしょうか……？」

ここがどこでどこに向かっているのかを聞いて、少しは自分の置かれている状況を理解したティアナは一番の問題を問いかける。

尋ねられたレナーテは少し困った顔をして視線を伏せる。

「さあ……あたしには分からないけど、たぶんあんたもギルドに連れて行かれると思うよ」

ギルドに――

どんな場所かも想像つかないギルドに、不安が胸に渦巻く。

黙り込んでしまったティアナに、レナーテが「そういえば……」と顔を上げる。

「あんたの名前をまだ聞いていなかったね」

ティアナははっとして自分の名前を言おうとして、ズキンッと頭を割られるような酷い痛みが走って顔を顰める。

「私……私の名前は……」

私の名前はいったいなんだった――!?

第7話　銀翼の乙女　1

「私の名前は……」

口ごもってしまったティアナの肩を優しく叩いたレナーテは苦笑する。

「まっ、名前なんてどうでもいいさね。あんた海に落ちたんだ、きっとまだ頭が混乱してるんだろうさ。また何か聞きたいことがあったら、いつでも声かけてよ」

気にしないでいいと慰めて、レナーテはティアナの側を離れて壁際の藁が敷かれた場所にいってしまった。

ティアナはレナーテが座るのを見てから、額に手を当てて考える。動悸の激しい胸、混乱する頭を整理するように一つ一つ考えていく。

私の名前は――分からない。

どうして名前を思い出せないのかしら――分からない。

私はどこから来たの――レナーテの話ではポラリスの人間ではなくて、海で遭難しているところをこの労働船アスワド号に拾われたという。

自分の体を見下ろせば、セピア色のワンピースの裾は破れ、あちこちに泥や汚れがついている。袖から伸びる腕には切り傷があり、海に落ちたことを如実に物語っている。

では、どうして海に落ちたの――

その前の記憶は――？

どこで何をしていた――？
考えようとした瞬間、激しい頭痛にティアナは顔を顰める。
分からない――なにも分からない……
私はだれで、名前はなんと言って、どこから来たのか、なにをしていたのか――何一つ自分の記憶が思い出せなかった。
国の名前や日常生活に使うものの名前などは普通に分かるのに、自分のことに関してだけが何も分からなくて、思い出そうとすると酷い頭痛に襲われてた。
私、記憶喪失になっちゃったの――！？
ティアナは愕然として部屋を見回すけれど、ティアナが探し求めた愛しい面影はどこにもなかった――
そもそも、ティアナの想い描いた愛しい面影というのが誰の事かすらも分からなかった――

※

その日、ティアナは何度も自分のことを思い出そうと考えた。そのたび頭痛に顔を顰めて手で頭を押さえて痛みが引くのを待って、また繰り返した。
夜になって部屋が薄暗くなると、頭痛のする頭を抱えてうとうとしはじめた瞼に従って、藁の中にうずくまって眠りについた。
翌朝、ざわめく部屋の中、ティアナは目覚めた。
傷だらけの重たい体を藁から起こし、部屋を見回してレナーテを見つけて側に行く。
「レナーテさん……」
「ああ、あんたか。おはよう」
「おはようございます。あの、なんだか皆さんそわそわしてますけ

ど、どうしたんですか？」
「ああ……」
言ってレナーテは視線を室内に巡らせ、快活な笑顔を浮かべる。
「もうすぐ港につくんよ、シュチェン港に――」
言われて納得する。数十日にも渡る公開が終わり、新生ギルド、希望に満ちた港に早く降りたくて落ち着かないのだ。
ティアナは他の人と違って特に持ち物もなく、港に着くまでの数十分を邪魔にならない様な部屋の隅で座って待っていた。

ガッシャン――という接岸の音が響き、しばらくして商人らしい風体の二人――三十後半の背が低く肥満体形の男とひょろりとした体形に顎髭を生やし目が座っている三十半ばの男――が部屋の鍵を開けて中に入ってきた。
「これからギルドに案内する。順番についてくるんだ」
その場に緊張感が走り、誰かの唾を飲む音が聞こえる。
肥満体形の男が先導し、その後を部屋の女性達が二列になって続き、最後に顎髭の男がついてくる。
船から港へと延びる桟橋を降りると、目の前に広がるのはオレンジを基調とした屋根や柱の華やかな街並み。
港からいく筋もの水路が街を廻り、水上に浮かぶ楽園のような印象を受ける。
ティアナ以外にもシュチェンの街並みに見とれたり、感嘆のため息を漏らす声が聞こえる。
しかしティアナの胸には街の素晴らしさに感心する一方で、不安

が押し寄せてくる。
自分がだれで、どうしてここにいるのか分からないティアナは、ただ言われるままについて来てしまったが、このままこの人達について行き、労働者の一人とされていいのだろうか――
なにかが違うと、頭に警鐘が響く。
しなければならないことがあって、どこかに向かう途中だった――そのことは分かるのに、なにをして、どこに向かうのかが思い出せない。でも。
ギルドではない――と、それだけははっきりと分かっていた。

「私は――」

小さな声で呟いて立ち止まったティアナを、一緒に歩いていた労働娘たちはちらちらと横目で見ながら追い越して商人について歩き続ける。
レナーテも心配そうにティアナを振り返りながらも、止まることはせずに歩いて行く。
ティアナの後ろを歩いていた労働娘達がすべて通り過ぎ、最後尾を歩いていた顎髭の商人がティアナを追い越そうとして、「ん？」と顔を顰める。

「おい、お前！　なんで止まってるんだ！　列を乱すな、さっさっと歩けっ！」

語尾を荒く捲し立てる商人に、ティアナは決然とした態度で言う。

「私は労働娘じゃありません。ですから、あなた達に従う理由も、ギルドに向かう理由もないのです」

すっと背筋を伸ばし、腹の前で両手を汲んだティアナはぼろぼろ

の服を着ていて見てくれが悪くても威厳のある口調と威圧的な瞳で商人に言い放つ。
顎髭の商人は気圧されつつも、すぐに食ってかかる。
「でたらめを言うな！　アスワドに乗ってたんだからお前は労働娘だ、違うとは言わせねーっ！！」
叫んだ声に、先頭を歩いていた肥満体形の商人が騒ぎに気づき、ティアナ達のところまで戻って来る。
「おい、何やってんだ！？」
「それが、こいつが自分は労働娘じゃねーとかってぬかして……」
「あん？」
片眉を顰め、首を斜めにしてティアナを見上げた肥満体形の商人は「ああ……」と適当な相づちを打つ。
「こいつは漂流もんだ。確かにお前はポラリスから連れてきた労働娘じゃない。だがな、アスワドがお前を拾った瞬間から、お前の所有者はギルドだ。つまりお前さんはりっぱな労働娘ってことだ」
くつくつと意地の悪い笑みを浮かべる商人に、ティアナはくっと唇をかみしめる。
確かにアスワドに拾われ、一日分の食事を世話になった。その部分は否定は出来ない。しかし――
者扱いされたことが癪に障る。
労働船とは名ばかりで実情は奴隷船と変わらないと言っていたレナーテの話を思い出し、ふつふつと怒りが込み上げてくる。
同じ人間なのに、商人たちは自分や他の労働娘を物としか見ていない。こんなことがまかり通っていいはずがない――

ティアナの中に言い知れない怒りが渦巻き、きっと商人たちを見据える。

「私は物ではありません。私にもし所有者がいるならば、私以外の何者でもありません。一宿の恩があるとしても、あなた達が蹂躙しようとしても、私は決して従わない――」

怯えたりもせず決然と言い放つティアナに、肥満体形の商人が顔を真っ赤にして憤慨しる。

「お前は……口で言ってダメなら、体で分からせてやる――っ」

言うなり商人は腰にさしていた鞭の柄を手にとり、身長の数倍の長さのある鞭を震わせて、ティアナめがけて振り下ろした――

第8話　銀翼の乙女　2

「キャー……っ！」

先頭を歩く商人がティアナの元に行ったことで、振り返って後方のティアナ達の様子をうかがっていたレナーテや他の労働娘達が鞭を振り下ろされるティアナを見て悲鳴を上げた。

ティアナはまさか鞭を持っているとは思わず、咄嗟に身動きが取れなくなる。

このままでは鞭で打たれてしまう――

だけど、暴力に怯え弱気になるティアナではなかった。例え鞭で打たれようと、商人達に従う気はなかった。

唸りを上げて目前に迫った鞭に、痛みに備えて目をつぶった。その時。

ドスッ、ドスンッ――っ！

鈍い音が走って、自分の体に痛みを感じない事に内心で首を傾げて、ティアナはゆっくりと瞼を開く。

目の前にはなぜかティアナを鞭で打とうとした肥満体形の商人が昏倒していた。

一体なにが起きたのだろうと視線を足元からあげると、そこには肩よりも長い蜂蜜色の髪を無造作に背中に流し、宵闇のような紺のマントを羽織った身なりのいい長身の男が立っていて、手にはさやに履いたままの黒い長剣が握られていた。顔は無表情で鼻筋が高く整った顔立ち、氷の様な冴えた瞳が一層美しさを際立たせていた。

その横には影のように細身のシーグリーンの服を着た栗毛の男性がつき従っている。

この人が助けてくれた――？

そんなことを考えていると、ティアナ同様、突然現れた蜂蜜髪の男に動揺していた顎髭の商人が食ってかかる。

「おっ……お前、なにするんだ！？　俺達が誰か分かってるのか？　ギルドの商人だぞ、邪魔する……なっ……」

商人の言葉が最後まで言い終わる前に。

「知っている、まるで奴隷商人のようだがなっ」

蜂蜜髪の男は蔑んだ声で言い、冴えた氷の様な冷たい視線を商人に向ける。途端、商人は顔を強張らせ、後ずさる。

「ギルドの商人なら、なぜ鞭を持っている？　労働娘達を従わせるためか――？」

あまりに威圧的な男に、強気だった商人は下手に出て媚びへつらう。

「いえ……ですね、この娘が自分は労働娘じゃないとか抜かしまして……」

手でゴマをすりながらぺこぺこ頭を下げる商人から、ティアナに視線を向けた男は、一瞬、くっと片眉を上げすぐに無表情に戻る。

「お前は――？」

男に尋ねられてティアナは困ってしまう。

名乗る名前も分からず、自分の身を証明するすべも分からない……

黙り込んでしまったティアナになにか言おうとした男の足元に、

レナーテが駆けつける。

「あの……この子は海を遭難していたところをアスワドに拾われたんです。だから正確には労働娘ではなくて、それを商人がギルドに無理やり連れて行こうとしていたんです……」

身なりがよく身分が高い貴族と思われる男に、膝を追って最高級の拝礼を取る。

「そうか、もめている様子は見ていた。ポラリスからの労働娘でないなら、ギルドに向かう必要はない。お前は行きたい所へ行くがいい」

事情を説明したレナーテに頷き、後半はティアナに言う。

当然、自由を言い渡され呆然としていると。

「困るな……勝手な事をされちゃ……」

剣で打たれ床に倒れていた肥満体形の商人が意識を取り戻したのか、頭をさすりながら上体を起こし、側にあったティアナの足首をぐいっと引き寄せる。

「きゃっ――」

突然、足を引かれことでバランスを崩したティアナは床に倒れてしまう。

商人は立ち上がると、倒れたティアナを見て意地の悪い笑みを浮かべてる。

「こいつは労働娘だ。漂流してるとこを助けて拾った瞬間からこい

つはギルドの所有物なんだよ。あんたがどこの貴族か知らないが、ギルドに口出しされちゃ困るな」

そう言って、立ち上がろうとしたティアナの腕を引く。再びバランスを崩してくずおれたティアナの腕を引き引きずって行こうとする。

「さあさ、歩け歩け！　ギルドまで歩けっ！」

こちらの様子を見ていた他の労働娘に肥満体形の男が怒鳴る。

蜂蜜髪の男が動こうとして、今までずっと黙って横に立っていたシーグリーンの服の男に小声で何か囁かれ、動きを止める。

くっと奥歯を噛みしめ、冴えた氷の瞳を一瞬揺るがせ、冷徹な声で告げる。

「――待て。分かった、その娘は私が貰おう」

男の言葉に足を止め振り返った商人は、にぃーっと目を細め下卑た笑みを浮かべる。

「ははは っ。なんだ、いちゃもんつけてきたのは結局はこいつを自分の物にしたかったからか――確かに、こいつは珍しい銀髪で欲しくなる気持ちは分からないでもねーが。まぁ、そういう話はギルドで聞こうじゃねーか」

商人はにんまりと気持ち悪い笑みを浮かべる。

ティアナは親切に助けてくれたと思っていた蜂蜜髪の男が、結局は自分を物と見ていたのかと愕然とする。

もしこの男に引き取られても、結局は自分の意思を無視され自由を奪われるのだと思うと、絶望感に襲われた。

しかし――

「エマ――」

蜂蜜髪の男は連れの男に声をかけると男の手元から何かを素早く奪い、それを肥満体形の商人にだけ見えるように掲げる。

「――っ！？」

瞬間、商人の顔から下卑た笑みが消え、さぁーっと血の気が引く。

「どうしたんだ？」

「あっ……ハ……お――」

離れたところにいた顎髭の商人が近づいて怪訝そうに首を傾げるが、肥満体形の商人はがくがくと口を震わせ目は泳ぎ、何を言っているかわからなかった。

「連れて行っていいな？」

威圧的に蜂蜜髪の男が告げると、こくこくと頭を縦に振る。

「ギルドは新体制の雇用機関だ、くれぐれも労働娘達に無体を強いるなよ」

にぃっと笑った男の瞳は氷のように光り全く笑っていなかった。

「ひぃ――っ」

肥満体形の男は悲鳴を上げて、腰を抜かせて床に尻もちをつく。

「おい、いいのかよ？」

顎髭の商人が、ティアナを連れていく男ともう一人の商人を見比べて怪訝に尋ねる。

「……いいんだ、やめろ……あの男に逆らっちゃいけない……」

ティアナ達が遠くへ行ったのを確認してから、ため息のように小さな声で囁いた。

第9話　悪しき因習の地

黄金の都と称されるロ国、北の玄関口のシュチェン。オレンジ色の瓦屋根や柱の色鮮やかな色彩の港街の大通りを蜂蜜色の髪の長身の男が紺色のマントをはためかせて早足に歩いていく。

「……っ、……お待ちくださいっ」

「エマ、遅いぞ」

ちらりと視線だけで後ろを振り返った男は、数歩後ろを走って追いかける男をエマと呼ぶ。エマはシーグリーンのロ国のでは庶民が着る代表的な衣装に身を包んでいる。

蜂蜜髪の男よりも背が低く足のコンパスが違うため、息を切らして走りながら呼ぶ。

「ダリオ様ぁ……っ」

大通りを抜けるとそこは一面のブルー。大型の船舶が何艘も停泊し、活気で溢れている。

通りよりも大勢の人が行き交う港をダリオと呼ばれた――蜂蜜髪の男は何かを探すように港に止まる船舶に視線を向け、目的の物を見つけて迷いなく人込みをかき分けて進んでいく。

人ごみで歩く速度が落ちたダリオにやっと追いついたエマは、肩で呼吸を整えながら言う。

「ダリオ様、勝手な行動はお控えください」

諌めるように言ったエマに、ダリオは氷の瞳で一瞥し不敵に微笑む。

「今日は特別な日だ。私がどこでなにをしようと咎められるものはいなかろう？　それよりも……お前がぐだぐだ言っている間に、アレは到着してしまったようだ」

誰もが恐れる冴え凍るダリオに、エマは眉尻を下げて礼儀正しく頭を下げる。

「申し訳ありません……しかし、わざわざあなた様自ら足を運ばずとも、監視役の貴族が派遣されているはずでしょう？」

止めても聞いてもらえないと分かっていながらも言わずには言われなくて、肩を落として愚痴る。

「あんなもの――当てになどならん。所詮は悪しき因習にどっぷり浸かっていた奴らだ、正直に報告などすると思うか？」

「それは――」

エマが渋る声を出した時、前方に目的の行列を発見したダリオが片眉を上げる。

「わっ……」

急に足を止めたダリオの背中にしたたかに鼻をぶつけ、赤くなった鼻をさすりながらエマはダリオの顔を見て前方に視線を向けた。

人混みの少し先――強張った顔の女性達が二列になって歩き、そこから放たれる奇妙な緊張感に周囲の人は遠巻きに通り過ぎながらちらちらと視線を向けている。

二列の女性達の中、一人の少女にダリオの視線が向けられている事に気づいたエマは首をかしげる。
その少女は薄汚れたセピア色のワンピースを着ている。他の女性達よりもみすぼらしい格好をしているが、そんなことよりも泥にまみれながらも銀色の輝きを放つ珍しい髪色に目がいく。
しばらく見とれていると、少女は列の中で立ち止まり、最後尾についていた細身に顎髭を生やした商人体の男ともめ始めた。
言い争う二人のとこにもう一人の商人――罷免体形の男が現れ、ところどころ男の声が聞こえた。

「……から、お前の所有者はギルドだ。つまりお前さんは……てことだ」

くつくつと下卑た笑いが聞こえ、咄嗟に間に割って入ろうとしたエマをダリオが腕で制止する。

「しかし――」

こんなこと見て見ぬふりをするのですか？　そう抗議しようとし、ダリオの嫌悪に満ちた鋭い瞳を見て言葉を飲みこむ。
この人は憤っている――
ダリオを包む空気さえ刺々しく殺気立ち、顔は無表情だがその瞳には怒りが宿っている。
一年かけてやっと忌まわしい因習を終わりにしたと思ったのに、何も変わっていなかったことに愕然とし、自分の力不足に嫌悪している。
言葉にしなくてもダリオの怒りが伝わってきて、エマはごくりと唾を飲みこむ。

「口で言ってダメなら、体で分からせてやる――っ」

ダリオの気迫に圧倒されていたエマは、商人の憤慨した叫び声にぱっと顔を上げる。
商人は腰にさしていた鞭の柄を手にとり、身長の数倍の長さのある鞭を震わせて、銀髪の少女めがけて振り下ろしていた。

「あっ――――……」

今度こそ止めに行こうと思ったが、エマが動くよりも早く、横に立つ紺色のマントが風のように飛び出す。
鞭が少女の元に振り下ろされる前に、飛び出したダリオが鞘に入ったままの長剣で商人の脇腹に一撃を加え、商人は悲痛な悲鳴を上げて意識を飛ばして床に倒れ込んだ。

※

ダリオは商人が少女のことを物扱いしている事に憤っていた。
憎むべき奴隷制度――
その悪しき因習を断ち切ったと思っていたのに、目の前で変わらぬ現状を見てしまい、胸が疼く。
商人に連れられて歩く労働娘達の顔は希望に満ちあふれるどころが緊張と疲労が見てとれ、数十日に渡る船旅が良いものではなかったことを物語っていて――
銀髪の少女が鞭で打たれそうになった時は、考えるよりも先に体が動いていた。鞭を持った商人を懇親の一撃で昏倒させ、侮蔑の瞳で睨んだ。
かつての奴隷商人が奴隷に言うことを聞かせる為に使っていた鞭――それさえも禁止したはずだったが、何一つ自分の願いが叶って

いないことに愕然とした。

「こいつは労働娘だ。漂流してるとこを助けて拾った瞬間からこいつはギルドの所有物なんだよ。あんたがどこの貴族か知らないが、ギルドに口出しされちゃ困るな」

少女の足を引っ張り床に倒し、そのまま足を引きずっていく商人。自分の言っていることは絶対で、ギルドの掟は絶対だという様に奢り高ぶった商人を怒りのまま切ってしまいそうになる衝動を、横に立つエマに制止されてしまう。

「ダリオ様……お怒りはごもっともですが、これ以上ここで騒ぎを起こして目立つの得策ではありません」

小声で囁かれたエマの言葉に、ぐっと奥歯をかみしめて長剣の柄にかけていた手を下ろす。

「――待て。分かった、その娘は私が貰おう」

冴えた氷の瞳を一瞬揺るがせ、冷徹な声で告げたダリオの言葉に足を止め振り返った商人は、にぃーっと目を細め下卑た笑みを浮かべる。

「ははは っ。なんだ、いちゃもんつけてきたのは結局はこいつを自分の物にしたかったからか――確かに、こいつは珍しい銀髪で欲しくなる気持ちは分からないでもねーが。まぁ、そういう話はギルドで聞こうじゃねーか」

にんまりと気持ち悪い笑みを浮かべる商人を侮蔑で細めた視線で

見て。

「エマ――」

呼ぶと同時にエマの手元から手のひら大の木札を素早く奪い取り、近寄って来た肥満体形の商人にだけ見えるようする。

「――っ！？」

瞬間、商人の顔から下卑た笑みが消え、さぁーっと血の気が引く。

離れたところにいた顎髭の商人が近づいて怪訝そうに首を傾げるが、肥満体形の商人はがくがくと口を震わせ目は泳ぎ、何を言っているかわからなかった。

「連れて行っていいな？　ギルドは新体制の雇用機関だ、くれぐれも労働娘達に無体を強いるなよ」

問いかけながらも否の返事は受け入れない様な威圧的に言ったダリオは冴え凍る笑顔で商人を一瞥する。

その様子を見たエマはため息をつき、腰を抜かした商人の横にいまだに座り込んだままの銀髪の少女に近づき、手を貸して立たせてあげる。

「大丈夫ですか？」

少女はエマに問われ、ぎこちなく頷く。

「はい……あの……」

不安げに瞳を揺らし、何か言おうとしている少女の言葉を遮り、

エマは優しく笑いかける。

「お話は後ほど伺いましょう。とにかくあちらへ」

そう言ってすでに歩きだしたダリオの後に続き、エマと少女は港を離れていった。

第１０話　愛しき面影

港を離れ、大通りの一角にある広場にやってきたダリオは、エマと一緒についてくる銀髪の少女――ティアナを振り返る。
栗毛や赤毛が一般的なロ国では滅多にみることのない銀髪の髪は泥ですすけながらも鮮やかな輝きを帯び、目を奪われる。
袖から伸びる腕や肌にはいくつもの切り傷が見てとれたがその色は雪のように白く、唇は薔薇のように鮮やか。
港でティアナに声をかけた時に懐かしい人の面影に重なった少女の顔にしばし見とれ、ダリオは無表情のまま冷たい口調で告げた。
「お前はもう自由の身だ。今後は海で遭難してアスワドに拾われたりしないように気をつけて、さっさと家に帰れ」

※

ダリオのことも商人と同じように自分を物扱いする人間だと思っていたティアナは、予想外の言葉に大きく目を見開く。
自由――それは嬉しかったが、それに続く言葉には棘があり、なんだか素直にお礼を言えなくなってしまう。視線をダリオからそらし。
「好きで遭難してアスワドに拾われたわけじゃありません……」
本当にごく小さな声でひとりごちたのに――聞こえてしまったの

か、ダリオの周りの空気が一瞬で殺気だったのにびくりと肩を震わす。

「ほう……？」

そう言ったダリオの顔は笑顔なのに瞳は笑っていなくて、ティアナはぞわりと寒気を感じる。

なに、この人――すごく威圧的というか嫌味な人というか……でも――

胸に広がる恐怖の中に、わずかに燻ぶる小さな気持ちにティアナはドキドキとする。

「まあ、そんなことは私には関係ないが。せいぜい助けた命、無駄してくれるなよ」

考え込んで黙ってしまったティアナを残し、ダリオは早くも話を完結してその場を立ち去ろうとしたから、ティアナは慌ててダリオを追いかけ袖を引っ張ってしまう。

「なんだ――？」

上質な絹で出来た手触りのよいマントを掴んだティアナを肩越しに振り返ったダリオは素っ気なく言う。

はっ――と自分の行動に驚いて、ティアナはマントを離し俯く。

「あの……」

なんで引き止めてしまったのか――

ティアナは黙り込み、しばしの間を挟んで顔を上げてダリオを見る。

「助けて頂いてありがとうございました。まだお礼を言っていなかったので――」

そう言ったティアナの翠の瞳は複雑な感情に揺れ、ダリオは思わず聞いてしまった。

「名はなんという――？　この辺りでは見かけない髪色だが、どこの出身だ？」

ティアナを見ていると思い出す面影に、彼女自身のことを知りたいとダリオは心の奥で望んでしまう。

尋ねられたティアナは瞳を切なく揺らし苦笑する。その表情が儚げで思わず見とれてしまう。

「申し訳ありません。お答えできません……」

記憶がないと言っても信じてもらえるかどうか分からない。不審な人と思われないように誤魔化したのだが逆に怪しかったかな――

恐る恐る見上げたティアナに、ダリオは特に気にした様子も無く冷めた口調で質問を続ける。

「シュチェンには何の目的で来た――いや、海で遭難したと言っていたな。体は大丈夫なのか？」

安否の確認を、相変わらずの冷たい声と眉根を顰めた強面で尋ねられ、心配されているとはとても思えない雰囲気にティアナは僅かに肩を震わせる。

「はい……体はなんともありません」

「アスワドの対応はそれほど良いものではなかっただろう……傷の手当てもろくにしていないようだ。早く家に帰って、手当てをするんだな」

ティアナの頬や腕に刻まれた無数の擦り傷に視線を向け、眉間のしわを深く刻み嫌悪の籠る声で言う。ため息をつき、呆けた顔でダリオを見つめるティアナに片眉をあげてダリオは尋ねる。

「どうした？」

「いえ……その……」

こんなことをこの人に言っても仕方がないのに――そう思いながらもティアナは掠れる声で言っていた。

「帰る場所がないのです……」

正確には分からない――のだが。

ダリオはティアナをしばらく見つめ、ふっと皮肉気な笑みを口元に浮かべる。

「それならば、私のところに来るか――？」

ずっと無表情か威圧的だったダリオが見せた初めての笑みにティアナは見とれてしまい――気付いた時には頷いていた。

「はい――」

※

馬をつないでいたシュチェンの一角の大衆食堂の表でティアナを待たせ、エマとダリオは厩にいた。

「ダリオ様、本気で仰っているのですか！？」

「ああ」

「あの娘をあなた様が引き取る！？　ハレムにですか――！？」

非難がましくエマがダリオにつっかかり、ダリオはうんざりしたようにエマを一瞥し、白い美しい毛並みの愛馬の鼻先を撫でて背中に蔵を乗せる。

「ああ、そうだ。行くあてがないと言った娘を放っておく訳にはいくまい。ハレムにはたくさん部屋が余っている、一人くらい増えてもさして問題はなかろう？」

「それはそうですが……、身元も分からず名を明かせない様な娘をハレムに入れるなど……もしかしたら、初めからあなた様のことを知っていて取り入るためのお芝居かもしれませんよ？　とにかく怪しすぎます……」

「別にハセキにすると言っているわけじゃない。それに身元が分からない者などハレムには大勢いるだろう？　それにあの娘……嘘をついているようには見えなかった。まして私の正体に気づいているというのは論外だな」

嘲るように目を細めるダリオ。

「確かに、あの状況であなた様の素性に気づいていたというのは考えにくいですが……」

エマも馬に蔵を取りつけながら、破れた服と泥だらけの体のみす

ぼらしい身なりの少女の姿を思い出して、渋々頷く。
心配症のエマに、ふんっとダリオは鼻を鳴らし。
「まさかお前に心配されるとはな、これでも私は誰よりも疑り深い人間だと自負してるんだが。そう簡単に人を信用したりしないから安心しろ」
そう言って氷の瞳をわずかに和ませる。
笑っていても威圧感のある雰囲気に、長年側仕えをしているエマでも慣れるものではなかった。
「はあ、それは分かりましたが……私はダリオ様がそこまであの娘に執着している事の方が心配です……」
頭を掻きながら言ったエマに、ダリオは「ん？」と眉根を寄せる。
「私があの娘に執着している――？　冗談はよせ、そんなことあるはずが――」
「だって、ダリオ様から『私のところに来るか？』なんて言ったのは初めてのことでしょう？　それに汚れていても輝きを失わない珍しい銀髪、側に置いてみたくなる気持ちも分からないでも――」
「黙れ――っ！」
笑いながら言ったエマの言葉を、ダリオは気迫に満ちた声で一括する。
エマははっとし、自分がいらぬことを言ってしまったと気づいて、深く頭を下げる。
「申し訳ありません。言葉が過ぎました――」
「この話はこれで終わりだ。以後、一切抗議は聞かぬ」

ぴしゃりと威圧的に言い放つと、ダリオは愛馬の手綱を引いて大衆食堂の表――ティアナの待つ元へと向かった。

※

ティアナは「ここで待つように」と言われて、大衆食堂の前に置かれた椅子に座って待っていた。

『それならば、私のところに来るか――？』

そう聞かれて、ティアナは思わず頷いていた。

さっき会ったばかりの人で、名前も身分も分からないのに、彼のところに行くと言ってしまって、今更ながら少し後悔していた。

一体、どこに連れて行かれるのかしら……

港でティアナを物扱いする商人が頭をよぎり、大きく左右に頭をふる。

違うわ、あの人は商人のように私を物扱いしたりはしない。だって、一度は自由の身だ、家に帰れと言ってくれた人よ。

鮮やかな輝きを放つ肩より少し長い蜂蜜色の髪、鼻筋が高く整った顔立ちは氷の様な鋭い美しさを秘めている。

表情は冷酷で、瞳は冴え凍る氷のように鋭く見た者の背筋を震わせる。威圧的な物言いは非情で――だけど、彼の言う言葉には嘘がないことをティアナは感じていた。

冷酷な表情と声だけど、ティアナの身を案じる言葉。大丈夫かと傷を案じ、傷の手当てをするように言ってくれた。

冷たく物言いだけれども心は温かい人なんだと感じて、ついていってもいいと、信頼しても大丈夫な人だと思えた。

だけどまさか、連れて行かれた場所がハレムだとは――ティアナは想像もしていなかった。

第１１話　月宮殿の主

「ここが共同トイレ、こちらが共同浴場でこちらが共同食堂――」

一つ一つの場所を丁寧に案内してくれるエマの後ろを歩くティアナの顔色はだんだんと蒼白になっていく……

「と言っても、これから案内するあなた様の部屋にはすべて揃っていますがね」

呆れというよりも諦めに近いため息をついたエマは通路を奥へと進んで行く。

「あの……」

ティアナはエマの様子を伺いながら声をかける。

「ここってまさか……ハレ……ム……」

自分の予想が当てっていてほしくなくて、ティアナの言葉は尻すぼみに消えていく。

エマはちらっと半歩後ろをついてくるティアナを振り返り、ため息をつく。

「そうです、ここはハレム――リヒャルト・ダリオ・ロルツィング・スルタンがお納めするロ国首都ワール・パラストにある月宮殿（がっくうでん）のハレムです」

ティアナの顔からは完全に血の気が引き、ごくりと唾を飲みこむ。
身なりの良い格好をしていたが、まさかダリオが一国の王――スルタンだとは思ってもいなかった。
シュチェンの港街から数時間馬で走り、連れて来られた場所は運河と砂漠に挟まれた壮麗な都。その中央に神々しくそびえ立つ黄金色の宮殿に向かって真っすぐ馬が走っている事に気づいた時は、ティアナの頭は真っ白になった。
えっ、えっ……この人って身分の高い貴族とかじゃなくて……もしかして……
頭の中に浮かび上がる考えを必死で否定してきたのに、馬は迷いなく王宮に入っていってしまった。
裏門のような場所から中に入り、厩で馬から降りたティアナ達は側の小部屋へ行く。そこでダリオと少し話した後、「エマが部屋に案内する」と言われてついてきたら――このハレムだった。
ティアナは愕然として、唇をわなわなとふるわせる。
ハレムがどういう場所かは知っているが、まさか自分がハレムに連れて行かれるとは思ってもいなくて完全に思考が停止してしまっていた。
通路の真ん中に立ち止まり、顔面蒼白で黙り込んだティアナを見てエマは小さなため息をつき、辺りに人がいないことを確認してティアナの前まで引き返す。
「あなた様は海賊からスルタンに献上された娘――ということになっています」
「海賊……ですか？」
唐突に話しかけられて、ティアナはオウム返しにする。
「そうです、海賊です。海に面したロ国は海賊と協定を結んでいま

す。港や輸送船を襲撃しない代わりに、こちらも海賊船を追わないことを約束しています。治安維持のためにこの協定は絶対で海賊は協定の証にハレムに娘を献上するのです。他にも地方領主から献上された娘達も大勢いますが……」

海賊など名前を聞いたことはあるが、本当に存在しているとは思わなくてティアナは瞳を瞬く。

海賊と聞いてあまり実感がわかないようでティアナが不安そうな顔をしているから、エマは補足説明をする。

「ロ国には山賊はいませんが、海賊の他に砂賊もいます。もし砂漠に行かれる時はお気を付け下さいよ、現砂賊の頭首は海賊と違って協定を結んではいませんからね。まあ、ここを出ることは滅多にないでしょうが――」

そう言ってエマは話を本筋に戻す。

「つまり、あなたは海賊から献上された娘――スルタンと港では会っていません」

港でダリオと会ったことは忘れろ――暗にそう言われていることに気づいて、ティアナはこくこくと無言のまま首を縦に動かす。エマの迫力に押されて――っといってもダリオに比べたらぜんぜん怖くはないけれど、ここで頷かなければ助けてもらったダリオに迷惑がかかるように感じて、素直に頷いた。

エマが歩きだし、ティアナはその後をついて行く。廊下の突き当たりにある大きな扉を開き、先にティアナを室内へと促す。

「ここがあなた様に与えられる部屋です。部屋から出ることは自由ですが……初めのうちは一人で出歩かない方が身のためだと思います」

ティアナが部屋の中に足を踏み入れると、石造りの壁の広い室内は隅々まで掃除が行き届き、生活するのに必要な調度品もすべて揃っている。華美ではないが、ティアナはこの部屋の趣味を好ましく思った。

室内では二人の女官がティアナとエマを出迎え、頭を下げる。

「今日からあなた様のお世話をする者です。何かあればこの者達に言って下さい」

女官達にティアナを託したエマは、深々と頭を下げて告げた。

「それではアデライーデ様――このハレムにお迎え致しましたことに慶賀申し上げます」

そう言ってエマは、部屋を出て行った。

「アデライーデ様」

慣れない名前で呼ばれて、ティアナはぎこちなく返事をする。

「……っ、はいっ」

「わたくしは女官長を務めるマティルデと申します。こちらは女官のフィネ」

「フィネと申します。今日よりアデライーデ様付きの侍女として精一杯勤めさせて頂きます」

二人は挨拶を述べ、最高礼の姿勢を取る。
マティルデと名乗った女性は三十代半ば頃、女性にしては背が高く細身で、後頭部で綺麗にお団子に整えられて髪は亜麻色。眼鏡をかけて、いかにも規律に厳しい女官長といった貫禄を醸し出している。
対するフィネは年と身長はティアナと同じくらい、緩やかなカーブを描く赤毛は肩までの長さで、野に咲く花のようにふわりとした優しい雰囲気の少女。

「わたくしは普段はハレムを取り仕切る女官長として特定の女性にお仕えすることはありませんが、スルタン自らのご指名――立派に務めあげさせて頂きます。ここハレムはしきたりや制約が多くございます。初めは慣れず戸惑うことも多いでしょうが、アデライーデ様が立派なハレムの一員となられるようお仕えさせて頂きます。昼間はお側にいることは出来ませんが、なにかあればわたくしかフィネにお申し付け下さいませ」
「よろしくお願いします……っ」

エマにも一人では出歩かない方がいいとか言われ――マティルデにもなんだか脅されるようなことを言われて、ティアナは動揺する心を押さえて頭を下げた。

※

厩の側の小部屋でダリオと話した時――

「ここが私の住居で、これからはお前の住居でもある。どうだ、気

に入ったか？」

氷の瞳をわずかに細めたダリオに尋ねられ、ティアナはゴクリと唾を飲みこんで頷く。

「はい……」

この場合、頷く以外の返答のしようがなかった。

「私はこの後、執務に戻らなければならない。お前を部屋まで送ることは出来ない、すまない」

ティアナは顔をわずかに顰めたのだが、決して不安だったからではない。ダリオがあまりに鋭い氷の瞳のままで「すまない」と言っているとはとてもじゃないけど思えない雰囲気を纏っていて気圧されたのだ。

もちろんダリオはそうとは知らず、ははっと笑って言う。

「心配するな、部屋まではエマに案内させよう。こいつは私の有能な右腕だ。お前の……」

そこまで言って言葉を切り、しばしの間を挟んで口を開いたダリオは眉間に皺を刻む。

「名前がないというのは意外と不便だな……」

「申し訳ありません……」

ダリオは同意を求めていた訳ではないが、威圧感にティアナは思わず謝ってしまう。

「名前がなくては他の者も呼ぶ時に困るだろう――よし、私が仮の名前をつけるとしよう」
「えっ――」
ティアナとエマの驚きの声が重なって二人は顔を見合わせ、ダリオに視線を向ける。ダリオは氷の瞳でしばしティアナを見つめ、愛おしげに瞳を細める。
「――アデライーデ。お前はここではアデライーデの名を名乗るがよい」

第１１話　月宮殿の主（後書き）

ランキングに参加しています。
「小説家になろう　勝手にランキング」ぽちっと押して頂けると嬉しいです（＾＾）

第１２話　秘めし想い

「ダリオ様――どうしてあのような事を……！？」

ティアナをハレムの部屋まで案内したエマは、まっすぐにダリオの執務室へと向かい、開口一番に詰る。

「何か問題があるか――？」

執務机に座ったダリオは、手元の書類から顔を上げてエマを冴え凍る瞳で見据える。

誰もがこの瞳で見つめられれば、恐れおののく氷より冷たい瞳――

エマはゆっくりと目を瞑り、それから開けた黄褐色の瞳をダリオに向ける。

長年ダリオの側に仕え、他の者のように彼の瞳で見られるだけで恐ろしいということはないが、意見をする時にはやはり緊張感に胸がぞわりと震える。

「アデライーデ様のお名前は特別なものです。なにかあるのでは――と勘繰る者もおるでしょう……」

「はっ――そんなこと知るか。勝手に疑わせておけばいい」

意地の悪い笑みを浮かべるダリオに、エマは何か言おうとしてやめて頭を下げた。

※

ティアナはマティルデとフィネの挨拶を受けた後、すぐに部屋の浴場へと連れて行かれる。

「まあまあ、長旅でお疲れとは思いますが、アジェミといえどスルタンをお迎えするハレムのお一人――そのような泥だらけと破れた服をいつまでもお召しいただくわけにはいきません」

きびきびとした仕草で言い放ったマティルデは、ティアナが有無を言う前に手早く服を脱ぐのを手伝い、すでに湯が張られた浴場へと案内した。

マティルデとフィネに体や髪についた泥を丁寧に落としてもらい、体の隅々までを磨き上げる。湯につかり、綺麗になったティアナは淡いイエローの一枚布のドレスに身を包む。頬や腕に無数に追った切り傷に薬を塗ってもらい、濡れた髪を丁寧にふきあげ梳いていく。

自分のことはなんでも自分でやっていたはずで、こんな風に他人に世話してもらうのには慣れていない――と思っていたティアナだったが、不快に感じることはなかった。

もちろん、実際イーザ国で自分のことはなんでもやっていたティアナだが、王族として尽くされることに、記憶はなくとも体が慣れていたのかもしれない。

ハレムに来た時とは見違えるほど綺麗になったティアナは、その後簡単に昼食を済ませ、ハレムのしきたりについて女官長のマティルデから説明を受ける。

朝の礼拝、週に一度あるハレムに住まう女性達の集会――それが明日あり、ティアナはハレムの新入りとして挨拶をすること。

基本、食事は部屋で食べ、しばらくは部屋から出ないこと。なにか用事があればマティルデかフィネに言えばいいこと。

なんだか自由を奪われたような気もするが、ティアナに与えられ

た部屋は、サロン、浴場、トイレ、寝室、その他に二部屋あり、専用の庭までついている。外に出ることは出来なくてもこの部屋だけで十分な広さがあり閉塞感はなかった。

その日、夜も更けてからダリオが部屋を訪れた――

※

数年間に渡る内乱を治め、スルタンに即位して一年――

即位後すぐに奴隷制度廃止に動いたが、昔から根付く制度に改革を進めるのは困難を極めた。内政の安定や国交に走り回り、それと並行して空いた時間に新しい労働制度を作りあげた。本来ならばもっと早くに廃止し新制度を確立したったが、内政安定に思いの他時間がかかり労働制度開始までこんなに時間がかかってしまった……

主だった重要役職を入れ替え内政も落ち着いき始めていたが、まだまだ忙しいことに変わりはなかった。それでも、改革後はじめて運行される労働船をこの目で見ておきたくてお忍びでシュチェンの港に行ったのだが――そこで、思いがけない拾い物をしてしまった。

この辺りでは珍しい銀髪の少女。海で遭難しているところを労働船アスワドに拾われ、労働娘ではないのに労働娘にさせられそうになっていた。

商人の少女に対する態度は目に余り――奴隷に対するような酷い扱いに、ダリオは黙っていられなくて、侍従のエマが持つ通称“後宮女官指導手形”の木札を奪い取り、商人に見せていた。

この木札は奴隷市場が行われていた頃、そこでハレムに住まわせる女を買うために役人が見せていたもの。忌まわしき因習の名残の木札だが、元奴隷商人ならばこの木札がなにを意味するかをすぐに理解する――ハレムに引き取る、ということを。

案の定、木札を見た瞬間、商人は顔色を変え、すぐさま銀髪の少

女を手放した。
もちろん、本当にハレムに引き取るつもりはなかった。
ハレムにはすでにたくさんの女達がいて、スルタンの寵愛を得るためにし烈な争いが水面下で繰り広げられている。女性達は美しく着飾っているが、その内面は恐ろしいほど醜く野心に満ちあふれている。
出来る事ならばハレムも廃止してしまいたいと心の奥で思っているダリオは、少女に家に帰るように言ったのだが……
名乗れず帰る場所もないと言った少女の瞳が陰りを帯び、何か訳ありだと知った上でハレムに引き取ることにした。
結局、自由を奪うことになってしまっただろうか――
お忍びで出来なかった執務分をこなし、日付が変わった頃にダリオはハレムへと向かいながら、そんなことを考えていた。
ハレムなどなくなればいいと思っていたがさすがに奴隷制度とは比べ物にならないくらい廃止するのは難しいと判断したダリオは、口には出さない代わりに月に一度ある集会以外は滅多にハレムには近づかないようにしていた。今ハレムにいくのも前月の集会以来だから約一月ぶりになる。
そんなダリオがアデライーデの様子を気にしてハレムに向かっていた。

アデライーデに与えた部屋をノックすると、女官長のマティルデが顔を出す。
こんな時間にもう起きてはいないと思っていたが、昼間の様子などマティルデから少しでも聞ければいいと思っていた。
しかし、アデライーデは起きていると聞き、部屋に通される。
懐かしい室内に僅かに顔を顰め、それから窓辺に座ったアデライーデに近づき、内心大きく動揺する。

「あっ――……スルタン、ようこそお越し下さいました」

そう言って床に膝をつけ最高礼の姿勢を取ったアデライーデは、昼間の泥だらけでみすぼらしい格好からは見違えるほど綺麗になっていて、氷の瞳をわずかに見開く。

カナリア色の薄手のドレスを着たアデライーデの袖から覗く手足は雪よりも白く、こぼれ落ちる銀髪は月の光を反射してキラキラと輝きを放っている。

港で言葉を交わした時に間近で見た顔が愛しき面影と重なって、気になったのは確かだったが――

いま目の前にいるアデライーデは記憶の中のあの人よりも、見る者の目を奪う優美な輝きをまとっている。

あまりにも昼間の少女とは違いすぎ、驚きと胸に湧きおこる甘い感覚にダリオは自分でも気付かずに目元に優しく和ませ、一瞬後にはすぐにいつもの冴え凍る表情に戻る。

たった数時間会わなかった間にアデライーデがハレムの礼儀作法をほぼ完璧に身につけていたから、後ろで扉のすぐ側に控えるマティルデに視線を向ける。

一日でよくもここまで宮廷作法を身につけさせたな、さすがは女官長――そう思い。否、これはもともと身についているものかもしれない――と片眉を上げる。

※

なんだか眠れなくて、サロンの窓辺に座って空を見上げていたティアナは、マティルダが開けた扉からダリオが部屋に入ってきたのに気づき、椅子から立ちあげる。

「あっ――」

ダリオは昼間着ていた宵闇のマントは着ておらず、胸元のひらけた白いシャツとゆったりとした藍色のズボン、ワインレッドの腰紐を結んでいる。

ティアナはダリオの側に近寄り、床に膝をついて昼間マティルデから教えられたロ国での最高礼の姿勢をとる。

「スルタン、ようこそお越し下さいました」

このセリフもマティルデから教えられたこと。顔を伏せ、胸の前で腕を床と水平に汲みティアナはスルタンが部屋を訪れた時の形式をなぞる。

ダリオは一瞬瞳を揺らし、それからため息をついて抑揚のない冷たい声で言う。

「よい、アデライーデ。お前はそのようなことをしなくてよい、顔を上げて立て」

「はい」

顔を伏せていたティアナはダリオの一瞬の表情の変化には気づかず、冷たい声に小さく肩を震わせてから立ち上がる。

ダリオは命の恩人で、怖いわけではない。ただ、威圧的な声、雰囲気にどうしても気圧されてしまう。

「どうだ？　不自由はないか？」

「はい、よくして頂いていています」

ティアナは伏し目がちに無難なセリフで答える。

ダリオはサロンの中央のソファーへと腰掛け、その向かいのソファ

ーに座るようにティアナに座るように促した。

第１３話　星の欠片

ティアナがハレムに住むようになってから七日が経った。
ハレムに来た翌日、大広間での集会で他のハレムに住む女性達に挨拶を済ませた。その時と朝の礼拝以外は部屋からは出ず、言われた通り与えられた部屋で大人しく過ごしていた。自分の忘れてしまった記憶について考えずにはいられなくて、外に出られないことへの不自由さは感じなかった。
もっともティアナの部屋にはトイレも浴場もついていて充分な広さを備え、誰か知り合いがいるわけでもなく部屋からでる必要がなかったのだが……
若い女官のフィネが言うには――普通ハレムに入ったばかりの女性はアジェミ――新参者と言って、まず数年の間はスルタンを間近で見る事も叶わない。ハレムの中ではすべては階級次第、階級ではっきりと分けられているという。
週に一度ある大広間での集会の並び方すら階級順。前からカドウン・エファンデ――スルタンの子を身籠った女性、イクバル――スルタンが頻繁に部屋を訪れる女性、ウクス――お手つきの女性、ジャーリエ、アジェミの順番。そして、その集会には月に一度スルタンが顔を出すという。
イクバルやカドウン・エファンデになれば個室と専用の女官が与えられるが、それ以外の女性達は大部屋、共同トイレや共同浴場を使用しなくてはならない。
その点、ティアナは――
「アデライーデ様の階級はアジェミではありますが個室と女官を与えられ、おまけにスルタンが毎夜お通いになられているのですから

……」

椅子に座ってティータイムをしていたティアナに女性の階級について尋ねられたフィネは頬を染めてそこで言葉を止める。

「スルタンはアデライーデ様のことを格別にお目にかけて下さっているというのは周知の事実です」

にこりと可憐な笑みを浮かべたて言ったフィネが、ティーセットのワゴンを女官部屋に下げに行ったのを見てティアナは小さなため息をついた。

そうなのだ……ダリオはティアナがハレムに来てから一日と日を空けず部屋に訪れていた。

ティアナがハレムで退屈しないようにと本や珍しいお菓子を持ってきたり、何か困ったことはないかと聞かれたり。一時間ほど一緒に時を過ごして、ダリオは自分の王宮内にある寝室へと帰っていく。それが毎夜のことだった。

はじめは慣れないハレムに連れて来られた自分のことを心配して見に来てくれるのかと思っていたが、同情だけじゃないダリオの優しさ気づいていた。

私はこれからどうなるのかしら――

いつか記憶を取り戻すことができるのだろうか――

ハレムに来てから自分の記憶について考えないことは一度もなかった。

自分のことを思い出そうとするたびに見舞われる頭痛。それでもどうにか思い出そうと記憶の欠片を探すが見つからず……疲労ばかりが溜まっていく。

慣れない風習、慣れない食事、慣れないハレムの生活――ただ分

かったことは、自分がロ国の人間ではないということだけ。
ティアナが記憶喪失ということについて知っているのは、ダリオと侍従のエマのごく一部の人間のみ。
記憶を思い出せずに日に日に衰弱していくティアナを、マティルデとフィネは慣れない生活に戸惑っているのだと勘違いし、心配して声をかけてくれる。

「ハレムには他国出身の方はたくさんいらっしゃいます。その方達も初めは慣れぬ生活に戸惑っていましたが、徐々に慣れていけばよろしいのですよ」
「アデライーデ様はどこのご出身でいらっしゃいますか？　故国のお食事など教えていただければ、料理長に作って頂けるようお願いしてきますよ」

マティルデは気を強く持って頑張るように言い、フィネは故郷の味を再現しようと頑張ってくれた。
しかし、ティアナにはその故郷の記憶すら思い出せず、フィネには曖昧にごまかして答えることしか出来なくて、心配してくれるフィネに申し訳なかった。
ずっと考えていた。このまま記憶が戻らなかったらどうしようか――と。
自分のことが思い出せない不安よりも、もった何か大事な事を忘れている気がして、切なくて胸が苦しかった。
そう、私は何かやらなければならないことがあって、それで――……
そこまでは思い出せるのに、それがなんなのかは思い出せなかった。
このまま記憶を取り戻せず、私はアデライーデとしてハレムで暮らして――いつかはここにいるのが当たり前になる――？
毎夜訪れるダリオ。初めて見た時から印象的だった冴え凍る瞳。

鼻筋が高く、美しく整った顔には笑みを浮かべることはない。長いさらさらの蜂蜜色の髪を無造作に背中に流し、ゆったりとした上質な衣服を身につけている。特別華美ではないのに放つオーラに忠誠を誓いたくなるような絶対の王者の気品、冷酷非情のスルタン。

言葉は威圧的で、だけどティアナはダリオを冷たい人だとは思わなかった。彼の言葉はまっすぐで、まっすぐすぎるから冷酷な印象を受けるだけ。遭難したティアナを心配し、体についた傷を気遣ってくれた。素性を知らぬまま、受け入れてくれた。

シュチェンの港で会った時からすでに、ダリオはティアナの恩人で特別な存在だった。

毎夜尋ねてくるダリオ。優しくしてくれる彼に惹かれ始めていて、ティアナは少し戸惑っていた。

これが好きという気持ち――？

こんな気持ちを以前にも感じたような気がして、脳裏にゆらっと人影が思い浮かぶ。

その顔を鮮明に思い出そうとして、ズキンと頭に酷い痛みが走って額に手を当てる。

愛しい面影――自分の記憶を思い出そうとする時、必ずその面影を思い出す。だけど靄がかかっていてそれがどんな顔なのか、誰なのかは分からなかった。

額に当てた手の反対の手で、無意識に何かを握っていたことに気がついたティアナはふっと視線を胸元に落とす。

今日来ている服はローズピンクのさらっとしたドレス。ティアナの着ていた服は腰から膨らんだ作りの服だったが、ロ国の女性が着ているのは膨らみのないスカートで体のラインの出るような細身の服だった。

その服の下につけているペンダントを無意識に握りしめていた。

首にかかる金属の紐をたぐりよせて、襟からペンダントを取り出す。スカイブルーの大粒のラピスラズリのネックレス。

ちらっと右腕に視線を向ければ、そこにも同じ輝きのブレスレッ

トがついている。
海を遭難したティアナが衣服以外に身につけていた物――
着ていた衣服は簡素で、ティアナの知っている侍女が着ている様な白いエプロンのついたもので、そこからは自分が侍女だったのかを想像してみるが、あまりぴんとこなかったが。
揃いのラピスラズリのブレスレットとネックレスは見るだけできゅうっと切なく胸が締め付けられる。
自分にとって大切なものだということだけは分かった。
ラピスラズリは――北の大国ドルデスハンテ国で特に取れる鉱石の一つ。ロ国とは陸地で面していないが海を隔ててほぼ隣に位置する。
自分の記憶の手がかりになりそうなネックレスを愛おしげに握りしめ、ティアナは睫毛を伏せて小さなため息をついた。

第１３話　星の欠片（後書き）

ランキングに参加しています。
「小説家になろう　勝手にランキング」ぽちっと押して頂くだけです。

第１４話　タクティクスの華

ハレム、アデライーデの部屋――

サロンの中央のソファーにゆったりと腰掛けたダリオは、向かいのソファーに座るアデライーデを頭の先からつま先まで見、そしてまた顔を見て氷の瞳を僅かに和ませる。

部屋の隅には付き添いできた侍従のエマが立ち、マティルデとフィネはお茶の準備をしている。

今日のアデライーデの装いはローズピンクのドレス。ゆったりとした襟、幾重にもなる透けた素材の裾からは雪のように白い腕が覗いている。この辺りではめずらしい豊かな銀髪は複雑に編みこまれ背中に流している。

息を飲むほど美しいアデライーデは伏し目がちに姿勢よく座り、生まれ持っての気品なのか動き一つ一つがとても優美だった。

ダリオがアデライーデの部屋を訪れたきっかけは、自分が安易に少女をハレムに入れてしまったことに少し後悔していたからだ。

瞳を陰らせ、帰る場所がないといった少女を放っておけなくて引き取ったが、ハレムに連れて行ったのは自由を奪ったことにならないだろうか――と。

しかしそんな後悔など吹き飛ぶくらい、泥だらけの少女の正体が美しくて、執務を終えると毎夜ハレムへと足を向けていた。

出会った時、最初に目がいったのはめずらしい銀髪だったが、今は意思の強い新緑を映す翠の瞳が気に入っていた。

アデライーデの瞳は、誰もが恐れてまっすぐに自分を見つめてこないダリオを映していて、それが小気味よかった。

ダリオはふっと口元に微笑を浮かべ、手に持っていた本を二冊机の上に置く。

その表情に、アデライーデは気づかれないほど小さく瞳を動かし、離れたところに立っていたエマは眉をわずかに動かしたが、ダリオは二人の表情の変化には気づいていなかった。

「昨日、ロ国の歴史に興味があると言っていたからな、私が読んでいた本だ、参考になるだろう」

ダリオとアデライーデの間の机に置かれた分厚い本と薄い本に、アデライーデは手を伸ばして受け取ると、ふわりと薫るような笑みを浮かべて頭を下げる。

「ダリオ様、ありがとうございます。毎日、私の為にいろいろな物を持ってきてくださり、感謝しております」

ダリオ――というのは彼の幼名で、本名はリヒャルト・ダリオ・ロルツィング。ほとんどの者は彼をスルタンと呼び、幼名で呼ぶのはごく限られた人物だけだった。

アデライーデも初めはマティルデに教わったようにスルタンと呼ぼうとしていたが、すぐにダリオ本人から名前で呼ぶように言われて、今はダリオ様と呼んでいる。

花の様な笑みを浮かべたアデライーデに、冷酷非情のスルタンと言われるダリオはふっと皮肉気な笑みを口元に浮かべる。

アデライーデはその表情にドキンッとし、慌てて視線をそらすように本を持って書棚にいく。

氷の瞳が愛おしげにアデライーデに向けられていることに唯一気づいていたエマはダリオを見つめ、ダリオ自身すら気づいていない気持ちの変化に気づき、懸念に眉根を寄せた。

※

「ダリオ様、なぜ毎日アデライーデ様のお部屋に通われるのですか？」

足早に執務室に向かうダリオの後を小走りに追うエマが小声で不満を滲ませて言う。それに対してダリオは、冷たく言い返す。

「その質問は聞き飽きた」

「アデライーデ様がハレムに馴染まれるまで――はじめはその理由で納得できましたが、すでに七日。連続でこれほどハレムにお通いになられるのは初めてのこと、しかもお一人の元へ毎日です。臣下達の中にはよからぬ噂を立てる者も――」

ダリオの纏う空気がひやりと険しくなったのに感じて、本当はもっと文句を言いたかったがエマは渋々言葉を切った。

不満顔のエマを視線だけで振り返って見たダリオは、大きなため息をついて執務室に入り、端に置かれた一人掛けのソファーに座りこむ。腰を深くかけ、開いた足の上に肘を置き頬杖をつく。

「本当に聞き飽きたな。そんなに私がハレムに通うのがいけないか？　私のハレムだぞ、以前はもっと足繁く通えだ、早く世継の顔が見たいだ、古狸達はうるさかったが、今度は通うなと言うつもりか――」

もう一つ大きなため息をついて背もたれに寄りかかり天井を仰ぎ見る。

エマの言う通り、ダリオのハレム通いについては様々な噂が飛び交っている。

ハレム嫌いのスルタンがやっとハレムに通うようになった。世継

の顔を見られるのも近いかもしれない――楽観的な者たちはそう言って喜んだ。現在、ハレムにはイクバルやカドウン・エファンデはおらず、ウクスが数人いるのみ。だが、どのウクスも二度以上スルタンが部屋を訪れたことはない。寵妃はおろか、子すらいない。王位継承権二位にあたるのはダリオの遠縁の叔父が一人のみで、血を受け継ぐ世継を望む臣下達は多かった。

しかし、妃が誰でもいいと思っていない一部の人間がいる。ダリオいわく古狸――古くから王宮に仕える大貴族の大臣達は、自分の娘をハレムに入れ自分の血縁なる後継者が生まれることを願っている。

大臣達の下ごころに気づいているダリオはそれをよしとは思わず、建前上一度は部屋を訪れるもののそれきり貴族の娘達に目を向けることはなかった。

そんなダリオが連日通いつめ執心のアデライーデを、快く思っていない臣下も一部。

アデライーデをハレムに迎えて数日後、宮廷中に噂は広がっていった。スルタンが寵愛する女性がハレムに現れた――と。

ダリオは天井から視線を戻し、側に姿勢よく立ち控えるエマを見て、意地悪く口元を歪める。

「ふっ、古狸達の期待に答えてやろうではないか――」

悪だくみを思いついたようにくつくつと笑うダリオをエマは不安そうに見つめ、だけれど口に出して言うのをやめる。

どうせ止めても無駄だから――この時そう思ったことを、エマは後で激しく後悔することになる。

二日後。月に一度、義務としてハレムに顔を出す日。

ダリオは執務室で夜を明かし、朝、部屋に入ってきたエマに嫌な

顔をされる。

「ダリオ様……寝室でお休みになられなかったのですか……？」

「ああ……」

長椅子にもたれかかり片膝を立て、肩から上着を羽織ったくつろいだ格好で書簡に目を通していたダリオは、書簡に視線を落したまま頷く。最後まで目を通し終えると、その書簡をエマに放り投げる。

不意に投げられ、エマはあたふたと放物線を描いて飛んできた書簡を受け取る。

「それに目を通しておけ。これからハレムの集会に顔を出して、午後から会議をするからそれまでに大臣達を会議室に集めておけ」

言われて書簡を見たエマは目をくっと見開く。

「ダリオ様っ……これっ……」

ぱくぱくと口を開け言葉を失ったエマを、ダリオは意地の悪い笑みを浮かべながら立ち上がると、着乱れた服を簡単に直して執務室を出てハレムの方向に歩きだした。その後ろで、エマの動揺の声が響いた。

「これっ、アデライーデ様をハセキになさるって……本気で仰ってるんですか――！？」

第１５話　朝露の秘め事

その日はハレムの集会のある日で、少し早めに起きて寝室で支度をしていた。

コンコンっと短い扉を叩く音に、ティアナの今日着る衣装を出していたマティルデが素早く寝室を出て、扉を開けにサロンへ行く。

こんな朝早くに誰が尋ねてきたのだろうと、ティアナとフィネは鏡越しに顔を見合わせる。ティアナはこの部屋に尋ねてくるただ一人の顔を思い浮かべ――違うと頭を振る。ダリオが来るのは必ず夜で、ダリオではないだろうと来客から興味がそがれ、フィネと一緒に身支度を再開する。

卓に置かれたお湯で顔を洗い、夜着を脱いで着替えようとした時、サロンから続く扉を開けて入ってきた人物に悲鳴を上げる。

「きゃっ――」

脱ぎかけの服を慌てて掻き合わせ、その場にしゃがみこんだティアナを見てダリオは僅かに眉を顰め、こほんとわざとらしい咳払いをする。

「すまない、着替え中だったか。マティルデ、さっき言ったようにアデライーデの支度を頼む」

そう言ってサロンへと出て行った。

ぱたんっと扉の閉まる音で、膝の間に埋めていた顔を上げてサロンへ続く扉を見つめるティアナの顔は真っ赤に染まっている。

「スルタンがこんな朝早くにおいでになるなんて驚きましたね」
フィネに小声で言われ、ティアナは苦笑して頷く。
「ええ……」
「アデライーデ様、さあ、お召し替えの続きをなさいましょう」
マティルデはダリオが寝室に入ってきた事を特に気にした様子もなく言い、衣装棚からドレスを引きだしてティアナの元に戻って来る。
「本日のお召物です」
そう言って持ってきたのは真新しいドレス。この部屋の衣装棚には初めからたくさんの衣装があり、前の部屋の主の持ち物のようだった。普段はそのお古を着ているのだが、その中に何着か新しいドレスが混ざっていた。
今ティアナが着せられているのもその一つで、白地に淡いブルーの布が合わせられた普段着ているのよりも少し華やかなドレスだった。
「あの……」
ティアナが何か問いかけようとしたのを、マティルデは有無を言わせぬ迫力で鏡の前に座らせ、髪を結いはじめる。
自分の身支度をして貰っているティアナは話しかけていいものか躊躇い、結局質問を飲みこんだしまった。
いつもより華美なドレスを着せられ、髪にも生花や宝飾を飾られ、手足と首に環の装身具を無駄に多くつけられて、動くたびにしゃらしゃらと金属の音が響く。

「さあさ、ダリオ様がお待ちです。アデライーデ様こちらに」

マティルデに促されてサロンではなく、普段は使っていない他の一部屋に案内される。そこには大きな楕円の机が置かれ、部屋の奥側の席にダリオが座っていた。

ティアナの与えられた部屋にはサロンと寝室以外に二部屋付いているが、ティアナはその部屋をほとんど使うことはなく、食事も普段は庭に続く日当たりのいいサロンで食べていた。

ティアナはダリオの向かいの席に座り、フィネが運んできたお茶を貰って、カップに口をつける。お茶を飲みながら視線だけでダリオを盗み見ようとして、視線があってしまいドキンッと大きく胸が跳ねる。

「ダリオ様、おはようございます。この時間にお会いするのは初めてですね……」

何か話さなければ居心地が悪くて、ティアナはぎこちない笑みを浮かべて言ったのだが、ダリオは気に入ったように不敵な笑みを浮かべる。

「ああ、今朝は執務がないからアデライーデと朝食を食べようと思ってな」

氷の瞳に甘い輝きを宿し妖艶な笑みを浮かべて言ったダリオに、ティアナは鼓動がどんどん早くなって戸惑う。

やっ、やだな……ダリオ様ったら普段はあまり笑われないのに時々こうやって笑みを向けられると、どうしていいか分からなくなってしまう――

「お待たせいたしました。朝食でございます」

居心地悪く身じろいだティアナは、タイミング良く朝食を運んできたマティルデに心から感謝した。

ワゴンに乗せられたパンとスープ、色とりどりのフルーツの盛られたお椀をテーブルに置き終わるのを見て、ダリオは静かな声で告げる。

「朝食はアデライーデと二人でとる。お前達は下がれ」

言われてマティルデは綺麗なお辞儀をし、フィネはダリオの威圧的な雰囲気にびくっと肩を震わせてぎこちないお辞儀をしてから慌ててマティルデに続いて退室していった。

ふぅーっと大きく肩でため息をついたダリオは、パンの皿を引き寄せてかじりつく。

「女官にはすっかり怯えられているな」

いつもの冷静な声だったが、その言葉からティアナはダリオの気持ちを正確に計りとり苦笑する。

「フィネですか？　ダリオ様のお側でお仕えするのは初めてで少し緊張しているだけです、すぐに慣れますわ」

冷酷非情のスルタンとして恐れられるダリオ、名前の通り冴え凍る瞳と威圧的な物言いで人々を震え上がらせるが、怖がられることに慣れているわけではないし、それに対して傷ついていないわけではない。何も感じない心の冷たい人間ではないことを、数日共に過ごしてティアナは気づいている。

「どうだ、アデライーデ。ハレムの生活には少しは慣れたか？」
「はい、皆様にはよくしていただいて……」
この質問に毎回同じようにしか答えないティアナに、ダリオは顔をしかめ言葉を遮って質問を続ける。
「何か記憶は思い出したか？」
「いえ、何も……」
翠の瞳を悲しげに陰らせティアナは眉毛を落とす。

※

あの日、ハレムに連れて来られた日の夜も、部屋に尋ねてきたダリオは人払いしてティアナと二人きりで話をした――
「アデライーデ、ここハレムは氏素性を問わない。身元を証明できない女は山のようにいる。だから尋ねるのは今一度きり、答えるも答えないもお前の自由だ」
氷の瞳がキラッと反射してティアナをまっすぐに見据える。
「お前の名はなんという。出身地はどこだ。私に何か言うことはあるか――？」
初めの二つは港でも聞かれていたことで、ティアナはダリオが自分が記憶喪失だと薄々気づいていて、最後の質問をしたのだと感じ

た。
ぎゅっと瞳を瞑り、大きく深呼吸してからティアナはダリオをまっすぐと見つめる。
「――名は分かりません、どこの生まれかも。自分の記憶に関することはすべて分からないのです。おそらく海で遭難した衝撃で記憶を失ったのだと思います、それを証明することは出来ませんが……」
そこで言葉を切り、ティアナは躊躇いながら言葉を続ける。
「私は記憶を取り戻さなければならない、そんな気がするのです。私には私の記憶が必要なんです……」
だんだん自分でも何を言いたいのか分からなくなってきてティアナは苦笑する。
だが、ダリオは氷の瞳をふっと和らげてティアナを見つめた。
「お前の事情は分かった。こちらでも何かお前の記憶の手がかりを見つけられるよう協力しよう。それまでここで自由に過ごすがよい。アデライーデ、お前はハレムの女ではない、私の客人としてここハレムに向かえよう」
「ありがとうございます、スルタンっ」
ぱっと顔を輝かせたティアナに、ダリオは僅かに眉根を寄せる。
「それから、私のことはダリオと呼べ」
「えっ――」
スルタンを名前で呼ぶのはごく親しい人間だけだとマティルデから教えられたばかりのティアナは戸惑ったが、一瞬、ダリオの瞳が

寂しげに揺れたのに気がついて、ティアナはソファーから立ち上がりダリオの側まで近づくと、床に膝をつきダリオに視線を向けたまま最高礼の姿勢を取る。

「ダリオ様――私を受け入れて下さったこと、感謝申し上げます」

※

カタリっと響いた食器の音に、フルーツを食べていたティアナは顔を上げる。

すでに食事を食べ終えたダリオが立ち上がりティアナの方へと近づいてくるから、ティアナの鼓動が大きく跳ねる。

「今日の衣装もよく似合っている――」

言いながら背中に流れたティアナの銀色の髪を一房掴み、梳きながら髪に口づけを落とすから、ティアナはびくっと肩を震わせる。

ダリオがティアナに触れるのはめずらしい事で、こんなに側で甘い言葉を囁かれてドギマギせずにはいられなかった。

「この髪飾りも装飾品もお前の美しさには劣るがよく似合っている、綺麗だ――」

髪から髪にさした生花、首筋、首の装飾品に手を滑らせていき、ダリオは片眉を上げる。首の装飾品の下にかけられた金属の鎖に気づき、人差し指ですくい上げる。その仕草にびっくりして、ティアナは手に持っていたフルーツを落としてしまう。

「きゃっ――あっ……」

朝マティルデがつけた装飾品と衣装の下から出てきたのはスカイブルーの鉱石のついたネックレス。

「このネックレスはどうした――？」

衣装のブルーと合っているが、他の装飾品とは不釣り合いで衣装の下に隠すようにつけられていたことにダリオは訝しむ。

出された拍子に首から外れたラピスラズリのネックレスに、ティアナは瞳を切なく揺らして苦笑する。

「私が唯一身につけていた持ち物です。なにかそれで記憶を思い出しそうという訳ではないのですが、どうしても肌身離せず……」

ティアナの憂いを帯びた表情を見て、ダリオは苦虫を噛み潰したように顔を歪める。

「そうか……」

それだけ言ってダリオはティアナの手のひらにネックレスを戻し、ティアナは服の下に隠れるようにつけ直した。

その様子を横目で見ていたダリオは何か言おうと口を開いたが、コンコンっと扉の叩かれる音に奥歯をぎゅっと噛みしめる。

「失礼致します。アデライーデ様、そろそろ集会のお時間でございます」

マティルデに呼ばれサロンに出るとエマが立っていて挨拶をする。集会の開かれる大広間へとダリオよりも先に向かわなければならな

いティアナはフィネとマティルデに促されて部屋を後にした。

第１５話　朝露の秘め事（後書き）

冷酷非情のダリオはティアナにメロメロです！

ワタシ的あまあま展開、こんなカンジでいかがでしょうか？

ご期待に添えてるといいですが（＾＾；

第１６話　偽りの花嫁

今日が月に一度スルタンが集会に顔を出す日だとフィネに教えられて、ダリオがめずらしく朝から部屋に尋ねてきた理由を察したのだが――

周りから集まる視線にティアナは居心地悪く体を縮める。

「あの、マティルデさん……本当に私はここでいいのかしら？」

ティアナは横に控えるマティルデに戸惑いがちに尋ねる。

「はい、アデライーデ様はこの場所でよろしいのです」

この場所というのは大広間の前方。前回参加した時には誰もいなかったイクバルやカドウン・エファンデの場所で、ウクスよりも前――つまりティアナは一人一番前方に立たされていた。

前回はアジェミということで一番後ろのさらに端で話を聞き、自己紹介の時少し前に出ただけだった。

まるで自分は特別――というように孤立して立っているティアナは、針の筵にいるように大広間中から女性の鋭い視線が突き刺さる。

スルタンを呼びに行くと言って大広間を出て行ったマティルデを見送り、本当に一人ぼっちになってしまったティアナは、ますます心細くなる。

始まってもいないのに早く集会が終わってほしいと考えていた時、鈴を転がしたような声音が響く。

「ごきげんよう」

自分に話しかけられたと気づいて振り向くと、そこには深紅のドレスを着た小柄な可愛らしい栗毛の少女が立っていて、ティアナは会釈で返す。
確か彼女はウクスの一人の――
ハレムの女性の中でウクス数人の名前はマティルデから教わっていたが、顔と名前はいまいち一致していなかった。

「わたくしはパルラ・フィンク。古くから王宮にお仕えするフィンク家の二の姫ですわ」

ドレスの裾をつまみ上げ優雅に名乗る少女に、ティアナはしばし見とれてしまう。
愛らしい顔にひかれた深紅の紅が印象的で勝気な雰囲気を醸し出し、美しいけれども棘を持つ薔薇のような少女だった。

「パルラ・ウクス様、お初にお目にかかります。アデライーデと申します」

ハレムでは階級が上の女性に自分から声をかけてはいけない決まりになっていて、声をかけられて初めて言葉を交わすことを許されたことになる。この場合も、パルラから話しかけティアナに話す事を許したことになる。

「アデライーデ様はどちらの出身ですの？」

パルラの見下すような声音に、周りで二人の話を伺っていた女達のくすくすと忍び笑う声が聞こえる。
公にはしていないが、ティアナが海賊からスルタンに献上されたという噂はハレム内には広まっているようで、パルラの質問にティ

アナが答えられないと思って蔑む笑いが広間に充満する。

「ランゴバルト公国ですわ」

しかし、ティアナは迷いのない声で即答する。

「ランゴバルト――というと南の連合国の一つのですか？」

「ええ」

ティアナがふわりと笑みを浮かべると、ひそひそと囁き合う声が広がる。

もちろんランゴバルト出身だというのは嘘。ハレムで誰かに尋ねられたらそう答えるように、あらかじめダリオから言われていた設定。海賊から献上されたということ自体も嘘で、なぜ見下すような視線で見られるのかは理解できなかったが、敵意のような視線の正体には気づいていた。

ハレム嫌いで一夜を共にした女性の元には二度と訪れないスルタンが、連日ハレム通い、しかも同じ女性の元に――ついにスルタンの寵愛を勝ち取った女性がいる、と王宮でも城下町でももっぱらの噂だとフィネから聞いていた。

もちろん、ティアナ自身はそんな噂など嘘で、ダリオの寵愛など受けていないし、毎夜通ってきてはいるがただ話をしているだけで他の者が想像している様な事は何もない。

それでも、ハレムの女性がすがれるのはスルタンの愛だけ――

新参者のティアナにスルタンの愛が一心に注がれていると思えば、憎く思うのだろう。

だからティアナは、自分を落としウクスであるパルラを褒めることにした。

「スルタンは私が故国から遠く離れた慣れぬ場所で心細いと言った

のを聞き咎め、毎日慰めに来て下さいます。スルタンは本当にお優しい方ですわ」

暗にダリオが自分の元に来ているのは同情だと含ませる――

「そんなの長く続くわけないわ……」

「ちょっと髪色がめずらしいからって少し構って下さってるだけよ……」

パルラの側にいた女性がそう蔑み、ティアナは二人に視線を向けてふわりと薫るような上品な笑みを浮かべる。

「そうですわ、今日の集会できっとスルタンもそう思われるでしょう。私なんかよりもすばらしい女性がこんなにいらっしゃるんですもの」

次はあなたの番かも――

ティアナの思わぬ反応に、なじった二人はうっと言葉を詰まらせる。

「そうね、今日はっきりとスルタンのお気持ちを聞かせていただくわ」

ぷいっと顔をそむけて行ってしまったパルラを見てティアナは胸をなでおろし、ぽんっと背中を叩かれて驚いて振り向く。

「気にすることないわ。スルタンが集会においでになる日の夜は必ず誰かの部屋に行く決まりだから、彼女ピリピリしているのよ」

そう言ったのは、ティアナよりも少し背の高いスタイル抜群の黒

髪の女性。

「えっと、あなたは……」

「ニコラ・ロベルティーニ・シュターデン。ウクスの一人よ」

「あっ、申し訳ありません……」

ウクスと聞いて慌てて頭を下げたティアナにくすりと皮肉気な笑みを浮かべる。

「いいのよ、私はパルラ様と違って没落貴族だし寵愛とか興味ないからね。まあ、彼女は家の期待もあるし気負っているのよ」

「大変ですね……」

思わず漏れてしまった声に慌てて口元に手を当てたティアナを見て、ニコラは笑みを浮かべる。

「あなたもそう思う？　なんだかあなたとは仲良くやれそうな気がするわ。これからよろしくね」

手を差し出されて、ティアナは戸惑いながらその手を握り、口元が自然とほころんでしまう。

「あ……じゃあ、いつでも声かけてね」

前方右側の扉が開きスルタンとマティルデが入ってきたのを見て、ニコラは素早く手を引っ込め、小声で言って立ち去っていった。

※

「静粛に。この一月での報告を申し上げます」

大広間の前方に置かれた豪奢な椅子に腰かけたダリオの横に侍従のエマが立ち、そこから少し離れたところに立った女官長のマティルデが一ヵ月間のハレムの事柄を簡潔にダリオに説明し、最後に女性達に注意事項を述べる。

「――、共同浴場でのマナーが悪くなっているようです、各自時間とルールを守って使用して下さい。何か伝えておきたいことがある方はいらっしゃいますか？」

女性達はスルタンがいる緊張感に包まれ、姿勢正しく立ち並び、口を開く者はいなかった。

マティルデは小さなため息をつき、女性達からダリオに視線を向け、また女性達に視線を戻す。

「それから、最後にスルタンよりお話があります」

ダリオは汲んでいた足をくみ替え、冴え凍る瞳を細めて女性達に視線を向ける。

「こたび、ハレムにおける人員移動を行う」

一瞬のざわつき後、大広間はしーんと静まりかえる。

ティアナはダリオの言葉の意味が分からず首を傾げ、他の女性達はダリオの次の言葉を待ち望んで、ごくりと唾を飲みこむ。

「アジェミ・アデライーデをハセキにする――」

一瞬前のざわめきが大きくなり、ティアナに女性達の悲鳴と鋭い視線が突き刺さって、一人状況を理解できないティアナは困惑顔でダリオに視線を向ける。

えっ、えっ？　私がなに？　ハセキってなに――？

ティアナの視線を受けたダリオは氷の瞳に不敵な笑みを浮かべ、立ち上がる。

「話は以上だ」

そのままエマを連れて大広間を出て行こうとしたダリオに、悲痛な叫びが呼び止める。

「お待ちください、スルタン――」

叫びながら前に出たのは、鈴の音のパルラだった。

「アジェミをいきなりハセキにするなど、前例がありません――っ」

瞳を潤ませて訴えるパルラを、ダリオは氷の眼差しで一睨みする。パルラはその威圧感に肩を大きく震わせる。

「私に意見するとはな――」

そこで言葉を切り、冴え凍る瞳を広間中に向け、威圧的に言い放つ。

「ここは私のハレムだ、前例がないのならこれを前例とする」

パルラは顔を青ざめ床にひれ伏し、他の女性達もひれ伏して退室するダリオを見送った。

第17話　警告の銀器

大広間を出たティアナは急ぎ足で自室へと戻る。
もしかしたらダリオが部屋にいるかもしれないと思ったが、部屋にいたのはマティルデとフィネだけだった。
「ダリオ様はこちらにいらっしゃいませんでしたか？」
息を切らせて尋ねたティアナに、フィネは顔を綻ばせて首を横に振る。
「いらっしゃいましたけど、すぐに執務があるからと王宮に戻られました。でも、安心してくださいな、アデライーデ様。夜にはおいでになるとのご伝言を承っております」
誇らしげなフィネの顔にどんな顔をしたらいいのか分からなくて、側で昼食の準備をしているマティルデに視線を向ける。普段はあまり感情を顔に出さないマティルデが少し複雑そうに微笑んで、準備の手を止める。
「ようございましたね、アデライーデ様。初めダリオ様からこの件をお伺いした時は、突拍子もない事と驚きましたが、宣言してしまえばこちらのもの。アデライーデ様は名実ともにスルタンの寵愛を受けたたった一人のお方ということです。これからはお部屋からも時々出てもよろしいでしょう」
マティルデの言葉に頭の中にどんどん疑問符が溜まっていく。

困ってフィネに視線を向けると、きらきらとつぶらな瞳を輝かせて見られていて、一歩後ずさる。

「私もお聞きしました、アデライーデ様はスルタンのハセキになられたのですね。お喜び申し上げますっ」

両手を握りしめて見つめてくるフィネに、その視線に耐えられなくてティアナは尋ねずにはいられなかった。

「えっと……ハセキってなんのことか私、分からなくて……」

首を傾げたティアナに、フィネが大きく目を見開く。

「まあ。アデライーデ様、ハセキをご存じでなかったのですか！？」

フィネがおおげさに驚いて、ティアナに近寄る。

「ハセキというのはスルタンの寵愛を一番受けるお方のことです。イクバルやカドウン・エファンデよりも上の階級で、もちろん今ハレムで最高権力とされる数人のウクスよりも上――つまり、今日からアデライーデ様がハレムの最高位ですよ」

思ってもいなかった衝撃の事実に、ティアナは目眩がして顔に手をかざし、ふらふらと側のソファーに腰掛ける。

そんな……自分に寵愛が向けられているという誤解を、さっきといたばかりなのに、と落胆する。

「そういえば――確かスルタンのご生母様もハセキ様でいらっしゃったはずですよ。ハセキ様というのはその時によっていたりいなかったりする特別の地位で、ハレムの女性なら誰もが憧れるものです

わ」

ハセキについて話しているフィネを、サロンの円卓に昼食の準備をしていたマティルデは静かに聞いていた。

「アデライーデ様、昼食の準備が整いました。アデライーデ様がハセキ様になられたのは、ダリオ様になにかお考えがあってのことだと思いますわ。今はゆっくりと昼食をとられて、なにか不安に思うことがおありでしたら、夜ダリオ様がいらした時に直接お聞きになるのがよろしいのではないでしょうか？」

昼食の用意を終えマティルデとフィネは退室し、サロンの窓際に置かれた円卓に向かってティアナは一人座っていた。

私がハセキ――？

寵愛を受けている――？

マティルデに分からないことはダリオに直接尋ねるように言われたものの、頭からそのことが離れない。

円卓の上、銀器に美しく並べられた昼食に視線を向けて、悩ましいため息を一つついた。

一人で悩んでいてもティアナの疑問が解消されることはなく、今はとにかく昼食を済ませてしまおうと銀器のティーカップを手にとり、動きを止めた。

ティアナの手の触れた部分が黒く変色し始める。取っ手からからすっと手を離し、手のひらをしばし見つめたティアナは、ティーカップのお茶を捨て水差しから水を注ぎ入れる。その水の中に指を数本沈め、翠の瞳をわずかに揺らす。

水の入ったティーカップの銀器はくすみ、水は怪しげに煌いている。

ティアナは静かに立ち上がると、まっすぐに洗面台に向かい念入

りに両手と円卓の上から持ってきたティーカップを洗い、清潔な布を拭う。
銀器と布を手に持ったまま呆然と立ちすくんでいると、洗面所にマティルデが入ってきた。
「まあ、アデライーデ様。サロンにいらっしゃらないと思ったら、こちらにおいでだったのですね。どうかされました？」
問いかけに反応を示さないティアナの前に回り込んで、マティルデは首をかしげる。
「アデライーデ様……？」
「あっ、えっ……マティルデさん……」
「ご気分がすぐれないのですか？」
心配そうに尋ねてくるマティルデに、ティアナは精一杯平静を装う。
「いいえ、なんでもないです。あまり……お腹が空いていなくて、少し庭を散歩してから昼食にします」
言いながら手に持っていた銀器を素早く布で包んで隠し、サロンから続く中庭の扉へと歩き始める。
「散策でしたらフィネをお連れ下さい。あっ、アデライーデ様！」
「一人で大丈夫ですよ……」
ティアナはマティルデの制止を聞かず、中庭へと足早に消えて行った。

第１８話　銀木犀の星

あてもなく中庭をさまよい、ティアナは大きなため息をつく。
私ったら何やっているのかしら――
隠すように持ちだした銀器を見て、きゅっと奥歯をかみしめる。
銀器は毒に反応する――
触れたティーカップが黒く変色した瞬間、脳裏に浮かんだのがそのことだった。どこから得た知識かは分からないのにそれが確かなことだけは分かって、注意深く行動したつもりだった。自分の手のひらに毒がついていると判断して、それを確かめる為に水に指を浸して銀器の反応を確認した。
毒のついた銀器をそのまま放っておいて誤って誰かが触れてしまわないように、毒のついた手と一緒に銀器も洗った。水洗いで毒が落ちるかは分からないけど、そのまま放置しておく訳にはいかなくて持ちだしてしまったのだ。
マティルデに毒のことを伝えるか迷っていた。
ハレムに来てダリオが毎夜ティアナの元に通うようになって、ハレムの女性から明らかな敵視を向けられている。その理由も分かっていたし、仕方ないと思っていたのに――まさか毒を盛られるとは思わなくて、嫉妬と憎悪に胸を押しつぶされそうで苦しかった。
マティルデに伝えれば、犯人を探したり何か対処を取ってくれるだろうけれど、それで今回の様なことが全くなくなるという保証はない。知らせて、事をあらだててしまう方がティアナには恐ろしかった。
はぁー……
情けない自分に嫌気がさして――
みんなが思っているような寵愛を自分は受けてなくて、みんなが

見ている虚像に押しつぶされそうで、どうしようもない恐怖心が襲ってくる。
そろそろ戻らないと、マティルデさんが心配するかしら――
部屋には帰りたくないけれど心配させるのが申し訳なくて、部屋に戻ろうかと俯いていた顔を上げた時。
ふわりと甘い香りが鼻先に漂い、ティアナは香りに誘われるように歩きだす。しばらく歩いた先――他の木から外れたところに立っている一本の木を見つける。無数の小さな白い花をつけた木に歩み寄り、その根元に生える細長い草に気づいてしゃがみ込む。

「この草は確か――」

見覚えのある草に手を伸ばした時、透き通るような声が木の裏側から聞こえてティアナは顔を上げた。

「銀輪草（ぎんりんそう）ですね――」

突然声をかけられて驚き、ティアナはしゃがんだ姿勢のまま顔を上げて銀木犀の裏から近づいてくる人物に視線を向けた。
シルバーグレイのゆったりとした裾の長い服を着た中性的な顔立ちの美しい女性が、儚い笑みを浮かべて言う。その背中には豊かな黒髪が流れ、紫の瞳が光彩を放ち、なんとも言えない美しさを持つ。
近くに人がいるとは思っていなかったティアナはすぐに声が出なぜ、女性はふわりと笑みを浮かべてティアナの側にしゃがむ。

「銀輪草は銀木犀の側に生える小さな花をつける草、だけれど――解毒作用があることはあまり知られていない」

その言葉に、ティアナはぴくりと肩を震わせて女性を凝視する。
どうしてこの人はそのことをしっているのかしら――

銀輪草が解毒作用のある草だとティアナは知っている。それがあまり一般的に知られていないことも。ではなぜこの人はそのことを知っていて――自分に教えるのかと、疑念が胸に渦巻く。
視界に霞む黒髪が、ある人を思い出して頭痛がしてくる。

「どうして、そのことを私に――？」

痛む頭を押さえながら、ティアナはそう言うのがやっとだった。
女性は人好きのする優しい笑みを浮かべると、銀輪草を摘み取ってティアナの手に握らせる。

「ここでは必要になるでしょう――」

意味深な言葉を投げかけられて、ティアナは眉根を顰めて女性をしかと見つめる。
ハレムには大勢の女性がいるし、黒髪の女性も多い。だけど、こんなに目を惹く美しい紫瞳の女性はいただろうか――
ティアナは集会で目にする女性を思い浮かべて、記憶の中に紫瞳の女性を見つけられなくて顔を歪める。

「あなたはここにいるべき人ではありません、ここに長くいることはないでしょう――」
「あの、それはどういう意味ですか――？」

ティアナが困惑して尋ねた時、遠くでマティルデとフィネの呼ぶ声が聞こえる。
女性は儚げな笑みを浮かべて、ティアナの手を握りしめる。

「さあ、呼んでいます。おいきなさい」
「でも――」

「今はここがあなたの居場所です。だけれどお気をつけなさい、守りの壁を掻い潜って悪しき者が近づいてくるでしょう――」

そう言ってきゅっとティアナの手をにぎると、紫瞳の女性はシルバーグレイの裳裾を翻して、銀木犀の向こうへ消えていってしまった。

「アデライーデ様！　お探ししましたよ、いくら中庭といえど、あまり一人で歩かれては不用心です」

眉根をきつくよせたマティルデに怒られて、ティアナは素直に謝った。

「ごめんなさい……」

「今回は何事もなかったからよろしいですが、あなた様はハセキ様になられたのですよ。自分のことにはもっと責任をお持ちになられて――」

まだまだ続きそうなマティルデのお説教は、ティアナの耳を通り過ぎていく。

ティアナは紫瞳の女性が消えた向こうを見つめ、夢か幻を見たのかと首をかしげる。

「アデライーデ様、聞いていらっしゃいますか！？」

めずらしく声を荒げるマティルデに、フィネが仲裁に入ってくれる。

「マティルデさん、とにかくアデライーデ様をお部屋にお連れいた

しましょう」
「……、わかりました。まずはお部屋へ」
まだ言い足りないという様に顔を顰めたマティルデは、しぶしぶ言葉を切る。
「さあ、アデライーデ様、お部屋に戻りましょう」
フィネに促されて、銀木蓮の方を振り返って見続けながら歩きだしたティアナの服の裾を見て、マティルデがヒステリックな声を上げる。
「まあまあ、せっかくの衣装が……っ」
だけど、ティアナはマティルデの声は耳に入らず、銀木犀から手のひらに視線を移す。そこには銀色の華の形を施された飾りが一つ
――

第１９話　走り出した鼓動

その日の夜、ティアナはいつものようにサロンのソファーに座って読書をしていたが、その頁は数時間前からまったく捲られていなかった。

ティアナは本から顔を上げ、壁に置かれた書棚に視線を向ける。本が置かれている棚の隣に、小さな白い箱が置かれている。その中には、昼間出会った黒髪紫瞳の女性から手渡された銀細工の華飾り――

結局、彼女が誰なのか分からずあれは夢か幻だったのかとも思うけれど、手のひらに握らされた銀細工が、彼女の存在が幻ではないことを語っていた。

しかし、投げかけられた意味深な言葉と銀細工がなにを意味するのかは分からなくて、本棚にしまってからも銀細工が気になって仕方なかった。

扉を叩く音がサロンに響き、隣の侍女部屋に待機していたマティルデが出てきて扉を開けダリオが室内に入ってきた。

ティアナは読みかけの本にしおりを挟んで閉じると机に置き、立ちあがってダリオの側まで進む。

「ダリオ様、ようこそお越し下さいました」

はじめてダリオが部屋を訪れた時と言葉は同じだが、あの時のように膝をつき顔を伏せてではなく、立ったまま前で腕を組みまっすぐとダリオの顔を見て言う。

「ああ、遅くなってすまない」

ダリオはティアナに近づき、その氷の瞳に優しい光を宿しティアナの頬に愛おしげに触れる。

ハレムで毎日会うようになって、ダリオは時々ティアナの前で笑顔を見せてくれる。港での冷酷で威圧的な印象が強く、滅多に笑わない人なのかと思っていたが、そうではなくよく笑う人だとティアナは思っていた。

実際はティアナにだけ見せる笑顔で、エマやマティルデは滅多に見ることのないダリオの笑顔に密かに衝撃を受けていた。

ティアナは触れられる頬が熱くなるのを感じて、ぱっと視線をそらす。ドキドキと高鳴る胸を悟られないように笑顔でダリオを見上げて。

「いいえ、ダリオ様は執務がおありなのですから、お忙しいのでしたら無理をしてハレムにお越しにならなくても……私のことなど気にされなくてもよろしいのですよ？」

「そう言うな、アデライーデ」

ティアナの言葉にダリオは切なく瞳を細め囁くと、ティアナを胸に抱きしめる。

「私はお前の顔を一日と見ないでいることはできない」

ダリオの甘い囁きに胸がきゅっと締め付けられて、ティアナはそれを誤魔化すように顔を上げて言う。

「そんな……今朝はお会いしたではありませんか」

「そうだな。しかし、私はお前の顔が見たかったのだ」

「はあ……そうですか……」

ダリオはティアナの皮肉を気にした様子もなく、不敵に微笑んでソファーへと移動する。

「今日はアデライーデに話すことがあってどうしても来る予定だった。思ったより会議が長引いて終わった後も大臣達に足止めをされてこちらに来るのが遅くなってしまった」

はぁーっと会議のことを思い出したのか煩わしそうにため息をつき、長い足を汲んでソファーにゆったりと腰掛ける。

向かいのソファーに座ったティアナは、ダリオが自分の前で王宮の出来事を話すのが初めてだと気づいて、わずかに顔を顰める。

「会議……ですか？」

「ああ、アデライーデをハセキにする――その決定を会議に通した」

言われた言葉にドキンっと大きく胸が跳ねる。

「あの……本当に私がハセキ……になるのですか？」

「ああ――」

「ですが、お聞きしたところハセキとはスルタンの寵愛を一身に受けた方のことで、私は――」

私は違いますよね――そう言おうとしてティアナは言葉の続きを飲みこむ。

すっと表情を引き締めた氷の瞳で見つめられて、ティアナはドキドキと胸が早鐘を打つ。

「私のハセキになるのは嫌か――？」

真剣な光を帯びた瞳で見つめられて、ティアナは言葉に詰まる。しばしの沈黙を挟んで。

「私は……」

勇気を振り絞って口を開いたティアナだったが、そこにちょうどティーワゴンを押したマティルデが現れて、ティアナは唇をきゅっと引き結ぶ。

沈黙の中、カチャ、カチャと銀器の並べられる音がやけに大きく響き、テーブルにカップとお菓子の乗ったお皿が並べられ、ティータイムの準備が整えられる。完璧に準備を終え、マティルデはポットからお茶を注ぐと一礼をして、ワゴンを押して壁際へと移動する。

ティアナは横目でマティルデが部屋にいることを確認して安堵のため息をつき、ダリオは片眉を上げてふっと肩で息をつく。

「今のハレムにウスク以上の階級の女がいないことは知っているな？」

突然話を振られて、ティアナは驚きのあまり大きく肩を震わせてお茶をこぼしてしまいそうになる。

「大丈夫か？」

「はいっ、大丈夫です。ええ……存じております」

ティアナは布巾で僅かにこぼれたお茶をぬぐい、ダリオをまっすぐに見つめて頷く。

「王位継承権を持つ者が私以外に一人しかいないことも知っているな？」

ティアナは答える代わりに頷き、ダリオはそれを見て予想通りの返事をもらって嬉しそうに薄く微笑む。

「臣下達、特に年頃の娘を持つ者らはハレムに自分の娘を入れたがり、世継を望む声が多い。不満を解消するために、長年王宮に仕え歴史ある臣下や政治の中心を担う大臣の娘をハレムに入れウスクにしたが、それ以上の位を与えるつもりはない。だが私は今すぐに妃を持ち子を作るつもりはない。私がスルタンに即位して一年――内政が安定したとはいえ、まだまだやらなければならない事は山積みにある。そんな中、ハレムに通っている時間が惜しい。だが、後継者を望む声を無視することも出来ない――」

王族として自分の血縁を残すのも仕事――ダリオはそのことを理解した上で、今はその時じゃないと判断している。

ティアナは静かに頷き、ダリオは言葉を続ける。

「そんな時、お前と出会ってハレムに連れてきて――ハレム嫌いの私が毎夜通う寵妃が出来たと臣下達は噂している。この噂を、私は利用してやろうと思う。スルタンより寵愛を受けるただ一人のハセキがいれば、世継を望む臣下は安心するだろう。ハセキを前に、自分の娘をイクバルへと望むことは出来ないだろう――」

不敵な笑みを浮かべ、氷の瞳を鋭く光らせたダリオに、ティアナは久しぶりに背筋の凍るような威圧感を感じた。

だけれども、それを恐ろしいとは感じなかった。国を治める者として、臣下の頂点に立つ者として、立派な考えを持っての行動だと理解して、敬意を強くした。

「わかりました、ダリオ様のお役に立てるのでしたら、私はハセキ

にでもなんにでもなります。ダリオ様は私の――恩人ですから」

※

古狸達の期待に答えてやろうではないか――

はじめはそんな思いつきで、アデライーデをハセキにすることを思いついた。一番の寵愛を受けるハセキを設ければ、世継を望む声と自分の娘の寵愛を望む声をいっぺんに押さえることが出来るという奇策。

だけれども、ハレムの集会と同じように会議でもアジェミをいきなりハセキにするのは前例がないと言われた時、ダリオは理屈抜きで押し切った。

その様子をエマが何か言いたそうな顔で見ていたことに気づいて、ダリオは心の中で言い訳をする。

煩わしいハレムに通うつもりはないし、執務が忙しいことは事実で、縁談避け目くらましのハセキだ――

そう考えて矛盾点に気づく。

煩わしいと思っているのに、なで私は毎夜ハレムに通っているのか――

アデライーデが心配だというのは建前で、本当は私がただアデライーデに会いたいから――

目くらましのためとはいえ、自分が好きでもない女をハセキに仕立てようなどと考える人間ではないことを、ダリオ自身が一番よく知っている。

いい訳をして――それが本当にただのいい訳だということに気づいてしまって、ダリオは眉間に皺を刻む。

私はアデライーデに惹かれているのか――？

ハレムに連れて来た日、彼女を見て瞳を奪われたのは確かだ。港

で見た泥だらけの姿とはあまりに違いすぎて驚いたんだ――いや、それだけじゃない。初めから美しい銀髪が気に入っていた。自分が気づいていない時にそれをエマに指摘されて、怒りが湧いたくらい。それから強い意思を宿す翠の瞳、誰もが恐れてまっすぐに見ようとしない自分の瞳を初めからまっすぐに見つめてきたあの瞳が気に入っていた。

彼女に会うためならば、いつもは馬鹿にしているハレム通いも苦ではない。彼女の顔を見るだけでその日の疲れが吹き飛ぶ。彼女の柔らかい肌に触れれば、もっと触れたいと思ってしまう――

だからあの時――アデライーデに本当に自分がハセキになるのかと尋ねられた時。

「私のハセキになるのは嫌か――？」

彼女の本心が知りたくて、ただそれだけで問うていた。彼女の答えが『いいえ』ならば、本気でハセキにするつもりだった。

だけどアデライーデは――

「わかりました、ダリオ様のお役に立てるのでしたら、私はハセキにでもなんにでもなります。ダリオ様は私の――恩人ですから」

自分のことをそういう対象としてしか見ていないことに、心が切なく締め付けられた。

それでも、走り出した鼓動はダリオ自身にも止められなかった――

第１９話　走り出した鼓動（後書き）

ダリオは自分の気持ちに気づいてしまいました。
次話はいよいよあの人登場です！

第２０話　烈火の痛み

ダリオが部屋を去った後、明かりの灯る寝室の窓辺に腰かけて空を見上げていた。
ハセキになるのが嫌かと聞かれて、嫌だと思っていない自分がいて戸惑っていた。
事実としてダリオとティアナの間に愛なんてないし、同情や責任感から毎夜ハレムに通ってくれていることを知っている。
顔が見たかったというダリオの甘い囁きも、冗談だと分かっている。
それでも、自分のことを気遣って毎日会いに来てくれるダリオの優しさに、ティアナはいつも胸に温かい気持ちで満たされていた。
これが恋なのかしら――
胸に手を当ててそんなことを考えて、ティアナはため息をつく。
たとえそうだったとしても、関係ないわね。
ダリオがティアナをハセキにしたのは政略として、事実として二人の間に寵愛があるわけではない。
ダリオの役に立てるのならばと引き受けたが、少しだけ悲しい気持ちになってティアナは苦笑した。

なんだか眠れなくて窓辺に座っていたが、そろそろベッドに横になろうと窓辺から降りた時、側の灯りがゆらりとうごめいたのに気づき足を止める。
次第に炎の揺れが大きくなり膨らんだと思った次の瞬間、そこに漆黒に輝く美しい黒髪の青年が立っていた。すらりと背が高く時代錯誤の黒いマントを羽織った青年の年は二十五、六。長い黒髪を無

造作に後ろに流し腰のあたりで束ね、筋の通った高い鼻と不敵な笑みを浮かべる口元、翠がかった黒い瞳は陰り陰鬱な印象を与える。威圧的な空気をまとう青年を見て、ティアナは胸に熱い痛みを感じて胸を押さえ顔を顰めて尋ねる。

「あなたは――？」

突然現れた青年に驚きはしたものの、声を上げて人を呼ぼうという考えにはならなかった。

今日はよく人と会う日なのかしら――そんなこととをぼんやりと考えていた。

黒髪の青年はくつくつと皮肉気な笑いを漏らし、壁に寄りかかって足を汲んでティアナを目踏みするような嫌な視線で見つめ、瞳に面白がるような光を煌かす。

「私のことをお忘れか――私の姫君」

ハレムにいるのだから姫と呼ばれても間違いではないが、青年の言葉には違う意味が含まれているように感じてティアナは胸がざわざわとする。

威圧的な雰囲気はダリオと同じだが、触れた者近づく者を片っ端から切り裂いていくような闇を宿し、それでいて何かに強く焦がれるような炎を宿した瞳。触れた瞬間、すべてを飲みこまれそうな恐怖感に、ティアナは慎重に言葉を選んで問いかける。

「私のことをご存じなのですか――？」

何がおかしかったのか、青年はくつくつと非情な笑みを浮かべる。

「ふむ、相変わらず面白いことを問う娘だ。ああそうだ、君のこと

は――ずっとずーっと昔から知っているよ」

一瞬、鋭利な瞳に哀愁が滲み、ティアナは胸がちくりと痛む。

なぜだか青年が悲しんでいるように見えて、ティアナは一歩一歩と近寄り、青年を慰めるように頬に手を伸ばす。

頬に触れる直前、びくりと肩を震わせて青年は後ずさる。

「……っ」

「――？」

ティアナは怯えるように自分との距離をとった青年に首を傾げ、一歩二歩と距離をあける。

「あの――」

言いかけた時、コンコンと扉を叩かれる音がする。振り返るとマティルデが扉から顔をのぞかせた。

「アデライーデ様、話声が聞こえましたが誰かいらっしゃるのですか？」

その言葉にティアナは心臓がぞわりと冷え、ぱっと後ろに立つ青年を振り返ったのだが、そこに誰もいなくて目を瞬かせる。

「いえ……もう寝るところです……」

掠れた声で答えたティアナに、マティルデは頭を下げて退室していった。

ここはハレムで――当然、ダリオ以外の男性が入っていい場所ではない。青年が誰なのかも分からず話しこんでいたが、二人でいる

ところを見られるのは良い事ではない。青年が姿を消していて、ほっと胸をなでおろす。

「それにしてもあの方はどこに行ってしまわれたのかしら……」

「私はここだが？」

独り言で呟いた声にベッドの側から声が聞こえて、ぱっとそちらに振り向く。

一瞬にして姿を消した青年が今度はベッドに腰掛けて座っていて、ティアナは魔法でも見ている様な気分になる。

「あなたは魔法使いなのですか――？」

なんとなく思いついたまま口にしたのだが、青年は嬉しそうに口元を綻ばせる。

「魔法使い――というのは正確ではないが、当たらずしも遠からず、というところかな。少しは私のことを思い出してくれたかい？　それにしても、アデライーデとは――いつからそんな上品な名前に改名したのだい、私の姫君」

意味深に言ってくつくつ笑う鋭利な瞳の青年をティアナはまっすぐに見つめる。

この青年が誰なのかは分からないが、自分のこと知っている人間で失くした自分の記憶を持っていることだけは確かだった。

青年と自分がどんな関係でどうして目の前に現れたのかは分からないし、向けられる鋭利な瞳を信用していいか計りかねたが、どうしても記憶を取り戻す手がかりを掴みたくて、海で遭難し記憶を失ったことを打ち明けた――

第２０話　烈火の痛み（後書き）

ランキングに参加しています。
「小説家になろう　勝手にランキング」ぽちっと押して頂くだけです。

第２１話　魔法使いの誘惑

「ここがロ国のハレム？　はっ――つくづく悪運なのは血筋なのかい？　いや――私が言える義理じゃないがね、それで君はそんな異国の衣装をまとっているというわけだ」

皮肉気な笑いを漏らし、黒髪の青年はつと翠がかった瞳を煌かせる。

ティアナは彼の言葉の所々に疑問を感じたが、青年はふっと鼻で笑っただけで疑問を解消してはくれなかった。

「で――君は何を迷っているのかね？」

いきなり核心に触れられて、ティアナはずきんと痛む頭と胸に眉根を寄せる。

「それは……」

「記憶？　それってそんなに大事かい？　失くしてしまったということは、君にとってその記憶はたいして価値のある物じゃなかったのだろう？　ここで人生一からやり直して愛する男と幸せに過ごす――結構じゃないか。君はそれを望んでいるのだろう？」

優しいダリオに惹かれ始めているのは確かで、ティアナの心が大きく揺さぶられる。

このまま、ここで、ダリオ様と一緒に――？

想い描いていなかったといえば嘘になる。どんなに記憶を思い出そうとしても頭痛がひどくなるばかりで、何一つ自分のことを思い

出せない。いっそこのまま過去の記憶など忘れて、そんな未来もいいかと思ったこともある。
それでも、失くした記憶を必死に取り戻そうとした――なんのために？
その記憶は本当に必要なの？
記憶をとりも出す――そのことだけを考えて過ごしてきた日々が、ティアナの真実が、青年の一言で粉々に砕け散ってしまう。
私はこのまま記憶など取り戻さずにハレムでダリオ様と幸せになることを望んでいるの――
頭が混乱し、久しぶりの激しい頭痛にティアナはその場にしゃがみこんで頭を抱える。

「ちが、う……」

翠の瞳に涙をいっぱいに溜め、青年を仰ぎみて切ない声をあげる。
確かにダリオのことは好きだ。だけどそれは胸をほんわりと温かくさせる気持ちで、恋ではない――ティアナの知っている愛ではなかった。
ティアナは黒髪の青年を、意思の強い瞳でまっすぐに見つめ立ち上がる。

「私は私自身の記憶を取り戻さなければならないわ――価値のないものなんかじゃない、大事な記憶よ――」

胸元に手を合わせ、夜着の下に身につけたラピスラズリのネックレスを握りしめる。そこから見えない力が湧きおこるようにティアナは失いかけていた自信に満ちあふれ、輝く顔を上げる。

「あなたのことも――思い出してみせる」

なぜかティアナはそう言っていた。
青年は一瞬、目を見開き、それから満足したように目を細めて口元に皮肉な笑みを浮かべる。
「ふふ、それでこそ私の姫君だ――私のことを思い出してくれる日を心待ちにするとしよう」
そう言って、炎のはぜる音と共に青年は姿を消していた。
ティアナは突然現れ、自分の心を揺さぶって消えていった青年を思い浮かべて、きゅっと唇を強く引き結んだ。
私の記憶を知る魔法使い――せめて名前だけでも尋ねておけばよかったかしら。
ベッドに入りながら考えていたが、そんな懸念はすぐに吹き飛ぶことになる。

※

それからというもの、黒髪の青年はティアナが一人の時間を見計らったようにどこからともなく現れるようになった。
青年はティアナの失くした記憶を持っていて、だけど教えるつもりがない事は初めて会った時に感じていた。それなのにほぼ毎日姿を現す青年に、警戒心を持つよりも、なんとか情報を引き出そうと思って話し相手になるのだが、今のところ有力な情報は何も得られなくて、青年に対する態度はぞんざいになりはじめていた。
「私の姫君、今日は何をしているのだい？」
「編み物です、女官のフィネに教えてもらったのでやっているのです」

ティアナは青年に視線を向けず、手元の糸と鉤形の編み棒を握った手元に集中して答える。

「ふむ、して何を作っているのかね？」

「テーブルクロスですよ、実用的でいいでしょう」

実用的――なんて素敵な響きかしら。

そんなことを考えた瞬間、糸をかけ間違えて模様がぐちゃぐちゃになり糸が絡まる。一瞬の油断で駄目にしてしまった模様を勢いよく解き、ティアナは落胆して肩を落とす。

ティアナは国では畑仕事ばかりを手伝い、女性らしい裁縫や編み物の経験はほとんどない。料理は得意だし、薬草の調合など細かい作業は得意なはずなのに、編み物という初めて経験するものは見ているよりも実際にやって見ると大変難しくて――難しいからこそ、今度はもっと上手にやってみせると思ってどんどん編み物にのめり込んでしまった。が、いかんせん苦手なものは苦手なのだ――

集中力が完全に切れてしまって、気分を紛らわすようにティアナは編み物の道具をテーブルに置き、黒髪の青年に視線を向ける。

「あの、ずっと気になっているのですが、その“私の姫君”という言い方はやめてもらいたいのですが……」

僅かに頬を染めて言ったティアナを、青年は嘲笑うような表情を浮かべて見る。

「なぜだい？　君は私のものだ、何も間違った呼び方はしてはいないだろう。それともアデライーデと呼ぶ方がいいかな？」

「アデライーデは……私の本当に名前じゃないと知っているのでしょう？　どうして本当の名前を教えてくれないのですか？」

「私と君は名前で呼び合うほど親しい関係ではなかったからね」
青年は不敵に笑い、ティアナは青年の矛盾した言葉に眉を顰める。
「親しい仲ではなかったのに、私はあなたのものなのですか――？」
「ああ、そうだとも」

くすりと意味深な視線を投げかけられて、胸に熱い痛みが走る。
青年と初めて会った時も、こうして話す時も、時々胸ににぶい痛みが走る。何が原因なのかは分からなかったが、青年と何か関係があることだけは分かる。
「では、あなたの名前だけでも教えて下さい。いつまでもあなたと呼ぶわけにはいかないでしょう？」
嫌味のつもりで言ったのだが、一瞬、青年の瞳がふっと和らいだように見える。
「私の名はセブラン・ルードウィヒ・メレディス・ファル・ホードランド――ルードウィヒと呼んで頂きたい」
「セブラン・ルードウィヒ……素敵な名前ね、ルード」
口に馴染む名前に、ティアナは思わず笑みを漏らしていた。
その表情を見て、黒髪の青年――ルードウィヒが瞳を切なげに揺らしていたことには気づかなかった。

「ルード、あなたは本当に不思議な人ね。何もないところから突然姿を現したり消したりできる魔法使いで、そんなあなたがどうして私の所に来るのか、不思議だわ」

相変わらず、苦戦しながらも編み物に挑戦し続けているティアナは、ずっと疑問だったことの一つをルードウィヒに投げかける。

「私がここに来るのに理由が必要かね――」

「必要というか――私が知りたいだけです。だってあなたは私のことをよく知っているみたいなのに、私はあなたのことを何も知らないわ。それって不公平じゃない？」

ティアナは唇を尖らせてすねるように言う。こんな風に言っても教えてもらえないことは予想していたけれど、知りたいという気持ちを押さえられなかった。

「不公平――か。ふふっ、君は本当に面白い事を言う。いいだろう、教えて差し上げよう。私の過去を――」

第２２話　純愛恋歌

「――というわけで、私は恋人の形見を探しているのだよ」

月の光が差し込む窓際の壁に寄りかかったまま、ルードウィヒは“彼の過去”というものをティアナに語って聞かせた。曰く――

彼には永遠の愛を誓い合った女性がいた。しかし敵国との戦争の最中、離れ離れにならなくてはならず、誓いの徴に自分が身につけていたルビーのピアスの片方を女性に送ったという。恋人との約束を果たすために――そのピアスを探していると言い、ティアナが持っているというのだ。

「私――ルビーのピアスなんて持っていないわ」

両手で耳に触れ、ピアスをしていないことを確認する。

もしかして、海で遭難した時に失くしてしまったのかしら――思い当たる不安に翠の瞳を曇らせると、ルードウィヒはくすりと意地の悪い笑みを浮かべる。

「ああ、そうだな。君はピアスを身につけていない、が――確かにピアスは君の持ち物だ」

意味深なその言葉に、ティアナは言われている意味が分からなくて首をかしげると、ルードウィヒはくつくつと不敵な笑みを浮かべる。

結局、教えてくれるといいながらもはぐらされたように感じて、ティアナはこれ以上追及することをやめて、編み物に集中し始める。

しばらく、ティアナが編み物をやっているのを黙って見ていたルードウィヒは、窓の外に視線を向け、夜空に浮かぶ黄金に輝く月を悲しげに見つめる。

「君と分かれたあの夜も――こんな風に月が綺麗だったな……」

ルードウィヒの独り言はティアナには聞こえていなかったが、ふと視線を上げた先、窓の外を見つめるルードウィヒの後ろ姿を見て編み鉤をにぎった手を止める。

「その……あなたの恋人の形見が無事に見つかるといいわね」

ティアナが知る限り戦争はこの数十年起っていないはずだが、ロ国では去年まで内乱が続き、海には海賊、砂漠には砂賊が出ると聞く。ティアナが知らないだけで、いまもなお世界のどこかでは戦争が起こっているのかもしれない。

ルードウィヒの語った“過去”が七十七年前のことだと、記憶を失くしてそのことすら気づいていないティアナは、ルードウィヒと恋人が分かれたのはつい最近の出来事だと思っていた。

ルードウィヒの翠がかった瞳。すべてを切り裂くような鋭利なその瞳に宿す慕情の炎の正体が、恋人に対する愛情からなのだと悟る。

彼が恋人を思って必死になるように、その形見を探すように――ティアナにも大事な人達がいて、失くしてしまった記憶を取り戻すことに必死になっていた。

ルードウィヒと自分の状況を重ねて身につまされて、ティアナはただ心からルードウィヒと恋人の幸せを願って言った。

予想もしていなかったティアナの言葉に、ルードウィヒは片眉を上げ、それからふっとその瞳を翠に揺らす。

「ああ――必ず……」

ティアナの顔に愛しいティルラの面影が重なり、ルードウィヒはきゅっと奥歯を噛みしめる。
雪のように白い肌、優しい翠の瞳、月の光よりも鮮やかに輝く銀の髪――そのどれもがティルラにそっくりで、あの日、砦の森で出会った時のことを思い出す。

※

ティルラが自分以外の男と結婚し、子を産んだ――そのことは知っていた。一度だけ、イーザ国に会いに行ったこともあったが、その時にはティルラは……
恨みつらみすべての感情がティルラに向かい、ティルラが亡くなったと知って、今度はドルデスハンテの王族へと向けられる。
ライナルト王子との約束を果たした後、王宮から砦の森に移り、一人で――たった一人で幾年が過ぎ、何度も季節を廻っる。ティルラの子が娘を産み、またその子が娘を産み、そのまた娘が生まれ――
ティアナの存在は知っていたが、会おうとは思わなかった。愛した人の血を受け継ぎし子――だけれどもその血には自分以外の男の血が混ざっていることが、許せなかった。
ただなんとなく年を重ね、ドルデスハンテ国の王宮でいたずらを仕掛け――そして、出会ってしまった。
砦の森で会った時、すぐにティルラの子孫だと分かったがそれだけ。ティアナはティルラではないし、あの時は魔法をかけて猫にしたドルデスハンテ国のレオンハルト王子以上に興味を持っていなかった。だが。
王子の魔法を解いてほしいと言った時の強い意志を宿した瞳――
ひたむきさ、誰かのために動く強さ――

それがどうしようもなくティルラを思い起こさせて、憎むべきドルデスハンテの王族よりも、ティアナに興味が移ったのだったが。もう一つ、ティアナに興味を惹かれたことがあって――

※

突然黙り込んでしまったルードウィヒに、ティアナは何度か呼びかけたが返事は帰ってこなくて困ってしまう。

「ルード……？」

何度目かの呼びかけで揺れていた漆黒の瞳がティアナを映し、ティアナは安堵の息を漏らす。

「急に黙り込んでしまうから、どこか具合が悪いのかと心配したわ」

不安げに瞳を揺らして微笑むティアナを見て、ルードは皮肉気な笑みを浮かべて前髪を掻きあげる。

「少し……恋人のことを思い出していただけだ」

「そう、それならいいのだけど」

ルードウィヒが髪をかき上げた時、左耳に光るルビーのピアスを見つけて、ティアナは思わず手を伸ばしていた。

「これが、あなたの大事なピアスの片方ね？」

なんとはなしに触れたのだが、その瞬間。

脳裏が焼けつくように痛み、いくつもの光景が頭を駆け抜けていく。

真っ白な森と雪の降りしきる連峰――
紅蓮の炎に包まれる漆黒の森――
寂しげな光を放つ黄金の月――
二十代の男女と小さな男の子――
爽やかな風の吹き抜ける緑の森――
新緑の森。そこにいる黒髪ウォーターブルーの瞳の青年と茶毛の少女と銀色の毛並みの猫と、それから――

いろいろな場面の断片が浮かんでは消える。ティアナは慌ててピアスから手を離すと、混乱する頭を押さえてその場にしゃがみ込む。
ルードウィヒは突然うずくまったティアナの異変に眉根を顰める。

「どうしたのだ――？」
「あ……っ」

顔を青ざめさせ、体を小さく震わせたティアナは瞳を不安に大きく揺らす。
今の光景は――？
あの人達は――
思い出しかけた記憶についていけずに、酷い頭痛が襲って顔を顰める。
あまりにも痛ましげな様子のティアナが気がかりで、ルードウィヒは落ち着かなく問いかける。

「おい、大丈夫か――」
「あ……っ」

顔を上げたティアナの瞳が切なく揺らぐ。

「森の、魔法使い……ルード、ウィヒ……？」

ティアナのとぎれとぎれの言葉に、ルードウィヒはずんっと胸に重い痛みが走った。

第２３話　修惑の赤い棘

「森の魔法使い、ルードウィヒ……？」

掠れる声で呟いたティアナの言葉に、ルードウィヒは目を見開く。

「思い出したのか……！？」

「あぁ――っ……」

ティアナは小さな悲鳴を上げて頭を押さえて、その場にくずおれる。

頭が割れてしまうような激しい頭痛に襲われて、悲痛な声を漏らし、瞳には涙が浮かぶ。動悸が激しくなり、自分が自分ではなくなってしまうような体を突き抜ける痛みに必死に耐えながら、涙でかすむ視界をルードウィヒに向ける。

「見えたの……あなたのピアスに触れた瞬間、私の失くした記憶が……。そうなのね、あなたは森の魔法使いで、私は――」

痛みに耐え、必死に記憶をすくい上げようとする。だけど――

いくつも頭によぎる記憶の中から、自分の記憶を思い出そうとした瞬間、今までにない激しい痛みが襲い、ティアナはその場に倒れてしまった――

翌朝、ティアナが目を覚ましたのはふかふかのベッドの中だった。

鳥のさえずり、窓から差し込む太陽の光に、ぼぉーっとする頭で

上体を起こし、寝る直前のことを思い出す。
確か私はルードと話していて――……
彼のピアスに触れて忘れていた記憶が脳裏によみがえって、だけど自分の記憶の断片を掴んだと思った瞬間、激しい頭痛で意識を失っていた。結局、思い出せたことは少ない。
ティアナの前に現れる黒髪の青年が、ドルデスハンテ国バノーファのそばにある砦の森の魔法使いで――なにか彼に用事があって会いに行ったこと。その時一緒にいた青年と少女と銀髪の猫――彼らが自分の知り合いだろうことは思い出せたのに、誰なのか、自分とどんな関係なのかは思い出せなかった。
あと少しで思い出せそうなのに……
自分の名前すら思い出せなくて、ティアナはベッドの中で小さなため息をついた。

※

いつものようにマティルデとフィネに手伝われて朝の支度を終え、礼拝に出席してから朝食を済ませる。
「アデライーデ様、今日も編み物をなさいますか？」
聞きながらも、すでに編み物の道具を用意して笑顔で尋ねるフィネに、ティアナは申し訳なさそうに首をかしげる。
「ごめんなさい、フィネ。今日は編み物ではなくて、少しやりたいことがあるの」
「やりたいこと、でございますか？」
「ええ、普段使ってないあそこの部屋を使いたいのだけれど、いい

かしら？」

ティアナは、先日ダリオと二人で朝食を食べた部屋を指さす。

「よろしいですよ、ここはすべてアデライーデ様のお部屋ですから、お好きなようにお使い下さいませ」

昼食を下げて終えて戻ってきたマティルデが涼しげな目元を和ませて言う。

「ありがとございます」

無邪気な笑顔で言われて、マティルデはわずかに目を見張る。お礼を言われるようなことはなにもしていないのに、ティアナの天真爛漫さに時々困ってしまう。

「少し一人で作業をしたいので、二人は休んでいてください。あと、用意して欲しい物があるのだけど――」

大きな楕円の机のある部屋。ティアナは口元の布きんを巻きつけ、肌の露出の少ない服をまとい、フィネから借りたエプロンをつけている。机の上には天秤、ナイフ、手燭、水差し、さまざまな大きさの器と得体のしれない葉や木の実や草の根っこが置かれている。

ティアナは手際よくその中から目的のものを取り出し作業を進める。細長い葉は細かく刻んで煎じ、清潔な布きんで包んでゆで汁を絞り採る。木の実は日にあぶり、実を取り出してすりつぶす。根は細かく刻んで叩き、水に浸す。

一つ一つの行程を慎重に行い、決められた量、決められた順番で混ぜ合わせていく。最後に出来上がった薄緑の液体を小瓶に詰めて

懐に閉まった。
ルードウィヒのピアスに触れた時、解毒剤の作り方も思い出していた。本当になんでこんなこと知識を持っているのか不思議だったが、魔法使いと知り合いならば、解毒剤の一つや二つ知っていてもおかしくないかもしれないと、変な納得をしていたティアナだった。
中庭で出会った黒髪の美女から手渡された銀輪草。解毒作用があることは知っていても解毒剤の作り方は分からず、摘み取ったまま部屋に放置していたが、解毒剤の作り方を思い出したティアナは、散歩と行って中庭に出た時に監視としてついてくるフィネの目を盗んで銀輪草以外に必要な薬草や木の実を集め、解毒剤を作るついでに中庭で採れる薬草から作れるいくつかの薬も作ってみた。
毒を盛られた事を言いそびれて以来、ティアナはそのことをマティルデやダリオに言いづらくなってしまい、解毒剤を作るということも黙っていた。

※

ティアナがハセキと公言されてから数日。護衛付きだが部屋から出ることを許可されたティアナは、ハレムの花園や書庫に出歩くようになった。
今まで部屋を出ることがなかったティアナは、外に出ることで他のハレムの女性からの鋭い視線にさらされる機会が増えたが、ティアナを敵視するのではなく媚を売るように声をかけてくる女性も増えていた。
その証拠に、ティアナの部屋には毎日ハレムの女性や王宮貴族からたくさんの贈り物が届けられる。
ハレム嫌いのスルタンの寵愛を受けるハセキに贈り物を送ることで、スルタンの信頼を得ようとしてのことだろう。本心からティア

ナがハセキになったことを喜び、贈り物をする人間はどれくらいいるだろうか……

ティアナは昼食後の日課となった贈り物を開ける作業を行うために、サロンから楕円机のある部屋へと向かう。

本日の贈り物は、大臣から異国より取り寄せた反物、王都の商人から花束、ウクスから香炉、エトセトラ……

すべてを開け終えて、フィネがいくつもの花瓶を持ってやって来る。

「アデライーデ様、花束はどの花瓶に飾りましょうか？」

「そうね……これにしましょう。私が飾るわ」

細長い花瓶、平たい花瓶、丸い壺のような花瓶。その中から丸い花瓶を選び机に置かれた花束を包む紙を剥がして茎を持った時、ちくんと指に小さな痛みが走る。

ティアナの白く小さな指の先から鮮血がにじみ出る。

「まあ、アデライーデ様！？　棘が……」

血を見て慌てるフィネに、ティアナは気にすることもなく微笑む。

「大丈夫よ、フィネ。これくらい舐めておけば治るわ」

言うと同時に指先を舐めたティアナは急激な吐き気と目眩に咳き込んでその場にしゃがみ込む。

「うっ……ケホッケホッ……」

「アデライーデ様……！？」

フィネとマティルデの悲鳴が室内に響き、ティアナは口に当てた

手のひらが赤く染まるのを見て、翠の瞳を険しく細める。

「アデライーデ様、大丈夫でございますか！？　もしや、毒が……っ」

ティアナの側に駆けつけたマティルデはティアナが吐血したのを見て、眉根を寄せる。

「フィネ、今すぐ医務官をお連れしなさいっ」

「待って……」

切迫した状況に素早く指示を出したマティルデを、ティアナは掠れる声で止める。

「騒がないで……、サロンの棚にある緑色の小瓶を水差しを持て来て……」

翠の瞳は涙で霞み意識が朦朧とする中、ティアナはフィネが持ってきた水差しをコップに注ぎ、その中に小瓶の液体を入れ、一気に飲み干し――そこで意識を失った。

第２３話　修惑の赤い棘（後書き）

ランキングに参加しています。
「小説家になろう　勝手にランキング」ぽちっと押して頂くだけです。

第２４話　悲愴のカナリア

「棘と茎部分に毒が塗られていたと報告を受けた――」

ティアナが横になるベッドの側に置いた椅子に座ったダリオは言って、ティアナから入り口付近に立つマティルデとフィネとエマに視線を向ける。

視線で退室を促された三人は無言で会釈をしてティアナの寝室を出ていく。

それを確認したダリオは、氷の瞳をティアナに向ける。

「塗られていたのは即効性の毒だったが、女官の対処が早かったため大事には至らなかった。医師が驚いていた、どんな方法を使ったのか――」

問いかける言葉ながらも、対処したフィネとマティルデからすでに聞いているのだろう。ティアナがなぜ毒から助かったかを――

正面から見据えるように向けられる氷の瞳に覚悟を決め、ティアナは上体を少し起こして、倒れる前から手に握ったままだった小瓶を差し出す。

受け取ったダリオは親指と人差し指で小瓶を掴み、天井に掲げてわずかに残る緑色の液体を眺める。

「これ――か？」

※

棘に触れ出血した血を舐めたティアナは急激に襲い来る目眩と吐き気の中、毒が花束に塗られていたのだと冷静に状況を把握していた。

医師を呼びに行こうとしたフィネを咄嗟に止め、自分で調合しサロンの棚に置いていた解毒剤を持って来させてそれを飲んだ。

毒を口にしてすぐの吐血――即効性のある毒ならば、医師を呼びに行く間に毒が体に廻り取り返しがつかなくなる。だからティアナは、医師を呼ぶよりも先に自分の解毒剤を服用した。

それに――騒ぎを大きくしたくなかったというのも本当の理由だった。

誰にも言っていなかったけれど、毒を盛られたのはこれで二度目――犯人は確実にティアナを狙っている。犯人を探すためにも、事を荒立てたくなかった。

ティアナが解毒剤を飲んで倒れた後、騒がないでというティアナの言葉をしっかりと聞いていたマティルデの采配で、内密に医師を呼びダリオに使いを走らせ、ティアナに毒が盛られたことをハレムに漏れないようにしてくれた。

そして目覚めたティアナの元に駆けつけたダリオから、説明を請われていた。

※

「はい、私が中庭で集めた薬草から調合した解毒剤です。たまたま解毒効果のある銀輪草を見つけたので、ちょっと久しぶりに薬でも作って見ようかと思いました――」

ティアナはそこまで言って、喋りすぎてしまったことに気づいて口をつぐむ。
ダリオは氷の瞳をわずかに見開き、ティアナを威圧的に見つめる。
「記憶を――思い出したのか？」
「いえ、その……少しだけです。自分のことは何も思い出せていないのですが、薬を作ったことがあるという記憶を……」
「銀輪草――私も聞いたことがあるが、この辺りには生息していないはずだが……」
ダリオは訝しみ、ティアナは困って首をかしげる。
「そうなのですか？　私は確かに、中庭で見つけたのですが……」
言いながらよくよく思い返してみると見つけたのは初めの時だけで、その後何度か銀木犀を探したが見つけることは出来なかった。
それならば、あれは夢だったのかしら――
中庭に一本佇む銀木犀を思い出して、そこで出会った黒髪の美女を思い出す。
「花束に付着していた毒は銀霜（ぎんしょう）だと医師が言っていたが、銀霜に有効な解毒剤は限られている……にもかかわらずお前の調合薬は見事に毒消しの作用を働いた……なぜ、このような解毒剤の調合法を知っている――？　なぜ、調合することができる――？　お前は何者だ――？」
蜂蜜色の瞳に鋭い光を宿し、射抜くような視線を向けられたティアナは、背筋に冷たい物が伝う。金縛りにあったように微動だに出来ず、冷や汗だけが頬を伝って落ちていく。

「分かりません――っとしか、お答えできませんっ……」

閉じた瞼と唇に力を込め、握った両手を震わせる。

ティアナ自身も、なぜ自分が普通の人が知らない様な薬草の知識を持ち、解毒剤の調合が出来るのか分からないのだ。一番思い出したい記憶を何一つ思い出せず、焦燥に駆られているのは――誰よりもティアナだった。

痛ましげに瞳を揺らし悲愴に顔を曇らせるティアナを見て、ダリオはちっと舌打ちをする。

嘘や罠があちこちに潜む王宮で、ダリオはティアナの事さえも疑わしく思い詰問してしまったことを悔いる。

震える小さくティアナの手に、ダリオは自分の手を重ねる。

「すまなかった、アデライーデ。一番辛いのはお前なのに……きつく言いすぎた、許してくれ」

顔を上げたティアナは、目の前にいつもの威圧的な氷の瞳ではなく、自分を気遣って揺れる蜂蜜色の瞳にドキンッと胸が跳ねる。

至近距離に悩ましげに輝く瞳があって不意をつかれ、鼓動がどんどん早くなっていく。慌てて視線をそらす。握られた手から熱が伝わり、安心感が胸に広がっていく。

「はい、ダリオ様……」

ティアナはダ自分の手に重ねられるダリオの大きな手を見つめ、それからダリオの瞳を正面から見据える。

「ダリオ様に――お話しなければいけないことがあります」

そう言ったティアナの瞳には先程までの悲愴さはなく、いつもの

芯の強い輝きが満ちていて、ダリオは、きゅっと痛む胸の内を隠して、顔を引き締めた。

「なんだ、アデライーデ？」

「事を荒立てたくなくて黙っておりましたが、以前にも毒を盛られたことがあります」

その言葉にダリオは片眉を上げ、氷の瞳に険呑な光が漂う。

「そのような報告は受けていないぞ――」

威圧的な物言いにティアナは肩を震わせ、ぎゅっと唇をかみしめて続きを言う決意を固める。

「口にする直前に毒の混入に気づき、私の一存で報告致しませんでした。マティルデさんもフィネも知りません。毒は私の手に付着していました。私が触れる身の回りの物に塗布させておいたか、もしくはなんらかの方法で直接私の手に……」

黙っていたことを怒られると思っていたティアナは恐る恐るダリオに視線を向ける。しかし予想外に、ダリオは怒りではなく苦渋に顔を顰めていて首をかしげる。

「あの、ダリオ様……？」

「すまない――」

「えっ――？」

「アデライーデをハセキにすると公言した時に、なんらかの反発は予想していた。しかしこうも早くお前を直接狙うとは予想もしていなかった私の愚かさが――お前を危険な目に合わせてしまった。すまない……すべて私のせいだ」

痛ましげに顔を歪めたダリオの手が小刻みに震えていることに気づいたティアナは、先ほどとは反対にダリオの手を優しく握りしめる。

「花束を送ってきた商人は警備兵が捕らえる前に姿を消していた。一介の商人に銀霜を用意できるわけがない、黒幕はまだいるはずだ――またお前を狙ってくると分かっていて、私はお前を守ることも出来ない……」

毒を盛られ一時こん睡状態になったティアナを心配し、心を痛めているダリオを見て胸が熱くなる――護ってあげたいと、ティアナは思った。

「ダリオ様」

そう言ったティアナの顔はだれよりも美しく、そして挑戦的に輝いていて、ダリオは不覚にも見とれてしまう。

「私のことは心配いりません。それよりも、この好機を逃す手はありませんわ――」

第２５話　禁じられた場所

ハレム、庭園の一角。池に面した東屋に、ここ数日スルタンの寵愛を受けるハセキが毎日通っていた。
東屋まで供をしてきた女官数名も、東屋につくとどこかへと下がっていき、半時ほどハセキは一人きりで池を眺め、庭園の花を愛でる。
それを遠巻きに見つめている複数の視線と黒い人影があった。

※

東屋の中に備え付けられた長椅子に腰かけたティアナは、時折吹く風に腰まで伸びた銀髪を揺らし、太陽の光をうけて反射する水面を眺めていた。背筋を伸ばし座る姿は、どこから見ても美しく気品に満ちあふれている。
ゆらりと――視界の端に黒い人影に気づいていたティアナは僅かに震える拳を握りしめ、視線と影には全く気づいていない、憂いごとなどないような和やかな瞳で池を眺めた。
じりじりと間を詰めてくる黒い影の刺客に、ティアナはただ池に視線を向けて待った。そう――待っていた。
黒い影とティアナまでの距離はまだ遠いが――確実に近づいていることが分かり、肌が粟立つ。
大丈夫、だいじょうぶ――
おまじないのように何度も心の中で呟いて、怯える心を叱咤する。
危険も承知で言いだしたこと、やると決めたのはティアナ自身で―

―ダリオを守ると決めた強い意志を宿した翠の瞳にきりりと見開く。

※

「それよりも、この好機を逃す手はありませんわ――」

ベッドの上、上体を起こして横たわるティアナは、決意の籠った瞳でダリオを見つめて言った。

「ハセキを狙う誰か、それはスルタンに仇なす者――あなたの敵は私の敵です。あなたの敵を減らす手伝いをさせて下さい。犯人はまた私を狙ってきます、その状況をこちらから作り犯人をおびき出しましょう」

どうせまた命を狙われるのならば、それを逆手に沿って自分が囮になることをティアナは提案した。

はじめは渋っていたダリオだが、どっちみち危険にさらされるのならば犯人を確実にとらえる方法をとると言った。

つまり――ティアナが庭園で一人きりになる時間を作りそれを毎日続け、犯人側に狙う機会を与える。一人きりというのは見せかけで、実際には犯人側に気づかれないように護衛を配備し、襲ってきたところを現行犯で捕まえようという作戦だ。

「分かった――お前がそこまで言うのならば協力してもらう。ただし、無茶なことはするな。犯人を捕まえることよりも、アデライーデ、お前が傷つくことの方が私は怖い――」

ダリオはベッドの方へと身を乗り出し、ティアナの体を強くかき

抱く。
大切な宝物をあつかうように優しくそっと抱き、その腕には愛おしさをこめて体を強く引き寄せた。
「隠れた場所に護衛を配置する。もしもの時は――必ず私が守るっ」

※

護衛の姿はティアナからも見えないが、必ず守ると言ったダリオの言葉を思い出して不安に揺れていた胸に温かいものがじわりと広がる。
確実に近づく刺客に怯える心を追いだして、意志の強い瞳を見開く。
ゆっくりと間合いを詰めてくる刺客。近くまで来ているけどまだ距離はあると安心していた時、突如、一人の刺客が目の前に現れてティアナは翠の瞳を大きく見開く。
瞬時に移動してきた刺客は、大ぶりの刀をティアナ目がけて振り下ろす。
護衛が待機していると言っても、異常な速さで近づいてきた刺客に護衛は間に合いそうもなかった。
振り下ろされる刀に、絶体絶命の状況で、ティアナは固く目をつぶって襲いかかる衝撃に身を強張らせた。次の瞬間。
ガッキーン……ッ――
金属と金属のぶつかる激しい音が響き、ブスっという鈍い音が続く。
受けるはずの衝撃がいつまで待っても来なくて、ティアナは恐る恐る片方の瞳を開き、目の前に立ちはだかる大きな背中に、ぱっともう片方の瞳を開く。

「ダリオ……様……っ」

いつかのように、ティアナに振り下ろされた刀を防いだのはダリオで。

港とは違って鞘から抜いた剣で刺客の刀を弾き飛ばし、刺客に深手を負わせている。

後ろ姿のダリオの足元で刺客が横たわっているのを見て、ティアナの鼓動が小さく跳ねる。

振り返ったダリオは、氷の瞳を赤く染め言い知れぬ表情でティアナを見下ろす。

「アデライーデ――無事でよかった……」

言いながら剣を握らない左手でティアナの頬に触れ、その手が以上の程冷たくて、ティアナはその手に手を重ねる。

必ず守る――そうは言ってもスルタンとして王宮で執務に追われ夜の数時間だけしかハレムに来られないダリオが助けに来てくれるとは思っていなかったのに。血相を変えて、自分の為に駆けつけてくれたダリオの優しさが胸に沁みて、なぜだか泣いてしまいそうだった。

「どうした、アデライーデ……？」

怪訝なダリオの声に顔を上げるとダリオの氷の瞳が大きく揺れ、くっと眉をしかめて心配そうに耳元で囁く。

「恐ろしかったのか？　泣くな、もう大丈夫だ」

剣を閉まったダリオが両腕の中にティアナを抱きしめ、優しく頭

を撫でて銀髪を愛おしげに梳く。
ティアナはダリオに言われて、自分が泣いていることに気づく。
「もうお前を狙う者はいない――」
東屋の周りで他の刺客も護衛によって無事に捕えられていた。首謀者を聞き出すために、殺さずに。
ダリオは腕の中にいる愛おしい存在に瞳を細め、無事に守ることが出来たことに安堵した。
自分の為に囮を申し出てくれたティアナを愛おしく思い、腕にすっぽり収まるこの小さな体のどこにこれほどまでにまっすぐで強い志を宿しているのかと、ティアナのことをもっと知りたいと胸が焦がれる。
涙を流して震える体が次第に力を失くし、ティアナが気を失ってしまったことに気づいたダリオは、膝の裏に手を回し両手でティアナを抱き上げる。周りで刺客をとらえる護衛に指示を出し、ティアナの部屋へと踵を返した。

※

「――謀反の罪としてフィンク家は家名断絶の上、以後はウィルコポス地方の領地より出ることを禁ずる」
紙面をめくりながら冷ややかな声で告げたエマの横、大広間の壇上に設けられた豪奢な椅子に腰かけたダリオが、見た者を凍りつかせるような鋭く威圧的な雰囲気をまとって集まったハレムの女性を見据える。
女性達は蛇ににらまれた蛙のごとく身動き一つ取れず、喉を震わ

せて壇上のスルタンを見上げた。

「私のハセキを害する者は私に反逆を示したも同じ――このような軽い処罰を与えたこと、肝に銘じておくのだな」

背筋が凍りつくような声音に、氷で心臓を貫かれたように女性の数人の顔色が青ざめる。

ダリオが座る椅子は二人掛けの長椅子の様なもので、横にはもたれかかるようにティアナが座り、ダリオが肩に片腕を回し愛おしげに胸の中に包み込む。

打ち合わせで、仲のいいところを見せ付けるとダリオに言われていたティアナは、ダリオに抱かれてドキバクと張り裂けそうに鳴る鼓動の音を隠すように微笑を顔に張り付かせる。その頬がわずかに引きつる……

軽い処罰――ダリオ様ったら、なんて恐ろしい事を言うのかしら。家名断絶なんて全然軽い処罰ではない。命を取られないだけましかもしれないが、領地や財産を取り上げられて、大貴族フィンク家はお家取り壊し。今までの地位もなにもかもなくなる――たしかにそれだけのことをしたのだから仕方ないとは思うが、それを軽い処罰と言い、もしもハセキに危害を加えるようなことがあれば、次はこの程度の処罰ではすまないと暗に威嚇している。

口元に笑みを浮かべていても瞳がぜんぜん笑っていなくて、いつもより冴え凍る氷の瞳を間近で見上げてしまったティアナは、背筋をぶるりと震わせた。

第２６話　魔女の系譜

ダリオと護衛兵が捕まえた刺客から雇い主がフィンク家であると分かり、毒を付着させた花束を贈った証拠も出てきて、謀反として処罰されることとなった。ウクスであるパルラもハレムを追われウィルコポスへと行くことになった。

集会にはパルラは早々にハレムから追い出されていなかったが、ダリオの強い希望で大広間に女性達を集め、張本人がいないにも関わらず釘をさすために処罰の報告をした。

ティアナが正真正銘、スルタンの寵愛を受けたハセキであることを見せつけ、今後の謀反を未然に防ぐために――

集会後、各自部屋に戻るように言われ、ダリオに部屋まで送ってもらったティアナは少し時間を開けてから一人でハレムの通路を進んでいた。

一緒に行くと言ったフィネを残し向かう先はウクスの部屋――ニコラ・ロベルティーニ・シュターデンの部屋。

ウクスは通常十人部屋だが、現在のハレムにはティアナ以外に個室を使っている者はおらず部屋が余っているために、六人いるウクスは三人で一部屋を使用している。

目的のニコラのいる部屋の前に着き、扉を叩こうとした手を止める。

ニコラとは――先日のハセキと言われた集会で挨拶した後も、時々中庭で会って話をした。そのどれもが偶然出会いその流れで話すだけだったから、こうして誰かの部屋に訪れるのは初めてのことで、緊張する。

ハセキになってからは他の女性からティアナに話しかけることは出来なくて、中庭に出るとティアナと話したい女性がたくさん群がってきた。ティアナはマティルデから、ハレムの他の女性に対して好印象を保つことを言われていたために、他の女性にまんべんなく声をかけ、他愛ない話を二言三言話し次の人に声をかける――というようなことを繰り返していた。

ハセキであるティアナを認めないというように、ティアナに近づいてこない女性もいたが――その筆頭がパルラだった――に対してほとんどの女性が友好的で、それでも心の内ではスルタンの寵妃には取り入っておく方がいいとか打算的なことを考える者ばかりで、ティアナは中庭に出て女性と話す作業が憂鬱だった。

それでも、唯一ニコラだけは裏などなくティアナに接してくれる人物で、ティアナはニコラと話したくて庭に出たことも何度もあった。

初めて会った時――邪険にされるティアナに優しい言葉をかけてくれたニコラの心は本物だったと思うから、向けてくれる笑顔も、媚を売らない話し方もとても好きだった。

だから、ティアナは確かめたくてニコラの部屋を訪れたのだった。ニコラが今回の件とは何も関わっていないということを――

覚悟を決め、再び扉を叩こうとあげた拳が扉に触れる前に、扉がゆっくりと開かれて、ティアナは空ぶった手をあわてて引っこめる。

「あら、アデライーデ様？」

扉を開けたのは、ニコラだった。

「なにかこの部屋にご用ですか？」

美しい笑みを浮かべたニコラは首を傾げて、ティアナを見つめる。
まさか本人が出てくるとは思わなくて動揺していたティアナは、扉を叩き損ねた拳をぎゅっと握りしめて、翠の瞳をニコラに向ける。
「ええ……ニコラ様にお話がありました。今よろしいでしょうか……？」

※

しばらく中庭を進み、先を歩いていたティアナは開けた野原で立ち止まる。
ずっと胸に引っ掛かりがあった――
いくつもの欠片が一つ繋がって、疑惑に変わったのは解毒薬を作った時。それでも、違うと信じたくて、違う証拠を必死に模索した。それでも――パルラがすべての犯人だと分かった時に確証を掴んでしまった。
「最初の毒――あれを仕込んだのはニコラ様ですか？」
ティアナは振り返らずに、静かな口調で尋ねた。
「二度目の花束に付着していた銀霜は有効な解毒薬はあまり知られていませんが、毒自体は有名な物、誰にでも手に入れようと思えばできる代物です。ですが――最初の毒は成分を調べたところ、ごく限られた人しか知らない……パルラ様には作ることも手に入れることもできない物です。そうでしょう、ニコラ様？」
振り返ったティアナは瞳を悲しみに揺れ、切なく顔を歪ませる。

優しく接してくれるニコラの心が嘘だとは思えなかった。ニコラだけは他の女性とは違い、自分に親しく接してくれていると思っていた。だから、毒を仕込んだ犯人がニコラではないかと思った時――どうしても信じたくなかったのだが。

部屋から黙ってついてきていたニコラは、揺れるティアナの瞳を見つめくすりと不敵な笑いを漏らす。

「どうして私だと思われるのです？　その特殊だという毒薬――私では手に入れることはできないわ」

からかうような言い方をしたニコラを、ティアナは真剣な瞳で見据える。

「いいえ、ニコラ・ロベルティーニ・シュターデン様――偉大なる魔女ルート・ロザリント・シュターデンの系譜に連なるあなただから作ることのできる毒なのです」

ルート・ロザリント・シュターデン――数百年前に存在した偉大なる南の魔女。

その名を聞いて、それまで笑みを浮かべていたニコラの表情に緊張が走る。

「どうしてその名を……」

「代々魔女の家系のシュターデン家――最初は名前が同じだけで、魔女がハレムに入るとは思いもしませんでした。だけどあの日――私の手に触れたのはニコラ様、あなた以外にはいませんでした。最初の毒の混入方法として私の手に直接付着させたか、私が触れる身の回りの物に塗布させたか――方法は二つですけど後者は確率が低いです、間違えば無用な被害者を出します。その段階で考えられる犯人はニコラ様だけでした」

「そんな早い段階で気づいていたの……？」

ニコラが呆れたように片眉を上げ、観念したように肩を落としてその場に座り込む。

「ええ――でも、あなたでなければいいと思いました。ハレムでは誰もが本心を隠して上辺だけで接してくる、笑顔の仮面の裏では何を考えているか分からない。そんな中、ニコラ様の言葉には嘘偽りはない――そう感じた自分の心を信じたかった。だからあなたでないことを確かめるために歴史書でシュターデン家の系譜をたどり、毒薬の分析をしました。そのどれもがあなたが犯人だと裏付ける結果になるとは思わずに――」

声を落とし、ティアナはニコラの横に座る。

「寵愛に興味がないと言っていたのは嘘？　あなたも私が憎い――？」

悲しみに満ちた声で尋ねられ、ニコラはきゅっと唇をかみしめる。

「嘘ではないわ――昔こそシュターデン家は名をはせた一族だったけれど、年々一族の魔力は弱まり、魔法はおとぎ話の中だけの存在になっていく――魔女の力を持つのはもう私が最後」

ニコラは大きなため息をついて、両手を空に伸ばして背伸びする。そのまま後ろで手をつき空を見上げる。

「寵愛なんか興味ないけれど、ハレムに入れば援助金が出ると聞いてハレムに入ったのよ。うちは分家だけどロ国ではそれなりに歴史のある貴族でね、まあ親は重役にもついていないし財力もないけど、

数少ないウクスにもなって、美味しいものは食べられるし綺麗な衣装を身につけてそれなりに不自由のない生活が出来る。家族もお金に困ることはない。このまま魔女の家系だなんて忘れてひっそり暮らすのもいいかと思っていたわ」

ニコラは空から横に座るティアナに視線を向けて、肩をすくめる。

「でもね――どこから聞いたのか魔女の薬がほしいという依頼が来たのよ……依頼主は多額の代金を払うっていうし、親が勝手に引き受けちゃって。薬を作れるのは私だけだから頼まれて、詳しい話を聞いたらアジェミのアデライーデ様を狙うっていうじゃない？　あなたに私怨はないけれど、お金のためなら仕方ないかと思ってね」

「それで挨拶を装って手に毒を……？」

「ええ、ロ国ではうちが魔女の系譜とは知られていないし、魔女しか知らない毒ならば犯人を特定されることもない。まあ正直なところ、知識はあっても薬なんて作るのは初めてでちゃんと効くのか確かめたかったのよ」

「私が生きていて……驚いた？」

「そうね――あなたが生きていて良かったと思ったわ。私に魔女は向かないってはっきり分かったから」

「それで二度目の毒は有名な銀霜にしたの？」

「毒が効かなかったのが毒味をしていたからなのか、毒自体が失敗したのか判断がつかなかった。だから無難に銀霜にしたのにやっぱりダメで――フィンク家は毒なんてまわりくどい方法は諦めて刺客にしたのね。でも、刺客なんて一番足がつきやすいのに……」

何度目になるか、大きなため息をついたニコラは、ティアナの前に膝で移動し真摯な瞳を向ける。

「私怨はなくてもあなたの命を狙ったことに代わりはないわ……私

も処罰されるのね？」
「……」
無言のティアナを肯定の返事と受け取って、ニコラは瞳を瞑る。
「処罰されることに異論はないわ、でもどうか家族は見逃して……うちには幼い妹や弟がいて、あの子達にまで罪に問われるなんて……」
瞳を潤ませて懇願するニコラを見据えたティアナは、意志の強い翠の瞳を煌かせる。
「いいわ、取引をいたしましょう――」

第27話　記憶のメロディ

「取引――？」

思いもよらない言葉に、涙を拭ったニコラが首をかしげる。

「ええ。ニコラ様、あなたにスルタンを害そうという気がなかったことは分かりました。でも、あなたが犯したことは許しがたいこと――でも、あなたがやったことや魔女のことは私しか知りません」

「え……っ」

「スルタンにはまだ何もお話ししていません。ちゃんとニコラ様の口から真相をお聞きしてからと思っていました。あなたの話を聞いて、スルタンにはこのまま何も知らせない――それでいいと思うのです。犯人はフィンク家、解決した事件に魔女の話など持ちだして混乱させるのは本意ではありません。あなたのしたことは私の胸にしまっておきます――その代わりに、あなたからは魔女の情報を頂きたいと思います」

「魔女の情報……ですか？」

「ええ、なにも難しい事ではありません。失った記憶を取り戻す薬――そういう物が存在するかどうか、存在するのならば作り方を教えて頂きたいのです」

「失った記憶……ですか？　なにやら物騒な話ですね」

ニコラ様は首を傾げて考え込む。

「事情は説明できませんが、必要な物なのです。どうかしら、取引して頂けるかしら――？」

真剣な光を宿したティアナの瞳を見つめ、ニコラは困ったように笑う。

「家族の命を助けて下さるというのなら、私にお断りする理由はありません。わかりました――毒や魔女の件を内密にしていただく代わりに、失った記憶を取り戻す薬というのを探してみましょう。少しお時間を頂きますが、よろしいですか？」

「ええ、構わないわ……ありがとう、ニコラ様」

そう言って涙でぬれたニコラの手を掴んで微笑んだティアナに、ニコラは複雑な笑みを返す。

一度はティアナの命を狙った人間――それにも関わらず自分の言葉を信じ、今もこうして優しく触れてくるティアナに、言葉では言い表せない感情が込み上げてくる。

「アデライーデ様にも……なにか事情がおありなのですね？」

ニコラの言葉に、ティアナは儚い笑みを浮かべて頷いた。

「いつか……ニコラ様にもお話できたらいいと思います」

「私に出来ることなら――アデライーデ様のお力になりますわ」

数日後、ティアナは自室にニコラを招いてサロンでティータイムにしていた。

二人が囲む円卓の側の窓からは、すっかり秋に色づいた中庭にそよ風が吹き、さやさやと木の葉を揺らして落としていく。温かな日差しが窓から差し込んで気持ちいいが、ひやりとした風に窓を開けておくのは少し涼しい。

カチャリとワゴンから持ちあげたティーポットを持ってフィネがティアナ、ニコラのカップにこぽこぽと香り豊かなお茶を注いでいく。

円卓の中央には、ダリオがティアナへと持ってきてくれた色とりどりのお菓子が並べられている。

お茶を注ぎ終わったポットをワゴンに置いたフィネに、ティアナは穏やかな笑みを浮かべて言う。

「ありがとう、フィネ。ニコラ様と少しお話がしたいから、あなたは隣の部屋にいてちょうだい」

席をはずしてほしいと言われ、フィネは頭を下げてからワゴンを押して女官部屋へと下がって行った。

ティーカップに手を伸ばしたティアナは、お茶を一口含んでからニコラに視線を向ける。

「私の部屋に誰かを招いたのはニコラ様が初めてですわ。ハレムの方たちには新入りのくせにスルタンを一人占めしていると嫌われ、今は怯えられてしまって」

遠巻きにされているのは以前と変わらないが怯えられるのは――正確にはティアナに怯えているのではなく、後ろにいるダリオになのだが――少し悲しくて、ティアナは苦笑する。

「ここでは、そういう人間関係しか築けないのは仕方がありませんわ」

ニコラも苦笑する。

「ええ、ですから、こうしてニコラ様をお呼びで来て、ハセキとか

ウクスとか関係なく親しくなれた気がして――嬉しいです」

頬を染めてカップに視線を落としたティアナを見て、ニコラは複雑な笑みを浮かべる。

きっかけは毒を仕込むためだった――そのために声をかけたのだが、何度も話し、ティアナの優しさに触れるたび、惹かれていったのは本当だった。

アデライーデ様と親しい関係になりたい――

毒を仕込むためではなく純粋な気持ちで思い、その反面で罪悪感に囚われて友人になることはできないと諦めていた。だから、すべてを受け入れてもらえて嬉しくて泣きそうだった。

ニコラは込み上げてくる熱いものを押しとどめるように一度目を瞑り、ゆっくりと開いた瞳をティアナに向けた。

「アデライーデ様がお探ししていたもの――見つかったのでお知らせに参りました」

※

夜着に着替えたティアナは寝室の椅子に座り、足をぶらぶら揺らす。側で片づけをしているフィネに声をかける。

「ねえ、フィネは砂漠には行ったことがある？　私は行ったことがなくて、どんな所なのかしら？　乾燥地帯なのよね、街はないのかしら？」

服を畳んでいたフィネは手を止めて振り返り、柔らかい笑みを浮かべる。

「はい、アデライーデ様。砂漠は一面砂ばかりの場所で、街はありませんがオアシスがありますわ」
「オアシス？」

聞いたことのない単語にティアナは首を傾げ、フィネに側の椅子に座るように促す。フィネは躊躇いながら女官部屋を振り返り、笑顔のティアナを見て、椅子に腰かけて話し始めた。

「オアシスは砂漠の中でも水が湧き樹木が生えている場所のことです。もともとは砂漠を横断する商人達が一時的に休む場所だったのですが、今ではちょっとした観光スポットになっているんですよ」

くすりと可愛らしい笑みを漏らすフィネに、ティアナはきょとんと聞き返す。

「観光スポット……？」
「イヴァー・オアーゼといって、オアシスの周りの砂だけはなぜか星の形をしているのです。なぜそんな形をしているのか理由は分かっていないのですが、星降る丘、星砂漠と呼ばれ、イヴァー・オアーゼで流れ星を見ると願い事が叶うという言い伝えもございます。そのせいか、珍しい星型の砂を見るためかイヴァー・オアーゼに行く人は多いそうです」

イヴァー・オアーゼ――その言葉を聞いて、ティアナの背中が疼く。なぜだかそこに自分の記憶の秘密が隠されているようで、好奇心が湧いてくる。

「フィネも行ったことがあるのね？　星型の砂はさぞ綺麗なのでしょうね」

顔を輝かせて尋ねるティアナに、フィネは肩をすくめて苦笑する。

「いいえ、実は私も行ったことはないのです。星砂漠には砂賊も出ますし、イヴァー・オアーゼ行くのはとても大変だと聞きます。一度は行ってみたいとは思っているのですが……私達は後宮から出ることが許されていません、生涯行くことは出来ないでしょうね」

フィネが残念そうに眉尻を下げる。つられてティアナも切なく顔を歪める。

「そう……」

星砂漠に行くことが出来ないと知って憂いを帯びたティアナを見て、フィネは元気づけるように明るく言う。

「ですが、アデライーデ様なら大丈夫ですよ。スルタンにお願いなされば、きっとイヴァー・オアーゼに連れていっていただけますわ」

消沈している自分を慰めてくれたのが分かって、ティアナはフィネに切ない瞳で笑いかける。

「そうね、もしスルタンがお許しくださった時には、フィネにも一緒について来てもらうわ」

「本当ですか……！？」

ぱっと顔を輝かせて胸の前で両手を握りしめたフィネを見て、ティアナは頬が自然にほころんだ。

「ええ、約束するわ」

ふふっと二人で笑い合った時、マティルデが女官部屋から出てくる。ティアナの側に座っているフィネを見て眉間の皺を深くし、フィネは無言の威圧に慌てて立ち上がり姿勢を正す。ティアナは苦笑して、フィネに座るように言ったのだと弁護する。

コホンっとわざとらしい咳払いをしたマティルデは、フィネが座っていたことについては何も言わずに、来客が来たことを告げる。

「アデライーデ様、ダリオ様がおいでになりました」

第２８話　月光の少女

「月下星珠（げっかせいしゅ）というサボテンの花の蜜を食べると忘れた記憶を思い出すことができるという言い伝えを聞いたことがあります」

「月下星珠……？」

サロンで円卓を挟んで座るティアナとニコラはお茶やお菓子にはほとんど手をつけずに話す。

「はい。調べてみたところ、ロ国の星砂漠にのみ生育する珍しいサボテンのようです。ただ、繁殖力は低く広い砂漠を探すのは困難かと……おまけにただの花の蜜では駄目で、満月の夜に咲く珠の花の蜜だけに効果があるようです」

取引として、記憶を取り戻す方法を調べて貰ったティアナはニコラから報告を受けていた。

「満月――今は上弦の月だから八日後には満月ね……」

翠の瞳に強い決意がみなぎり、ニコラは不安げに尋ねる。

「探しに行かれるのですか？」

その問いに、ティアナはただ儚い笑みを浮かべて答えた。

※

月下星珠の蜜――それを飲めば記憶を取り戻すことが出来る。記憶を取り戻す方法があると知ったティアナは、それがどんなに困難だろうと探しに行きたいと思った。
砂漠に生育すると言っても漠然としすぎていて、少しでも場所を特定できればと思ってフィネに砂漠について聞いたのだが、思いもよらない情報を得てティアナの胸は不思議に高鳴っていた。
願い事が叶う星降りの丘――イヴァー・オアーゼ。そこに自分の記憶の手がかりがあるように感じてしかたがなかった。
ダリオが尋ねてきたと聞いたティアナは、早速、星砂漠に行ってみたいとお願いしようと思ってサロンに意気揚々と出たのだが、真っ青な顔でソファーに座りこみ額に手を当てて荒い呼吸を繰り返すダリオを見て、星砂漠のことなど頭の片隅から吹き飛ぶ。

「ダリオ様――っ！？」

ティアナは急いでダリオの側に駆けより、ソファーの前に膝をついて、ダリオの顔を覗きこむ。

「大丈夫ですか……？」

ティアナの声に瞑っていた瞳を開け、上目使いに見る。その瞳には明らかに疲労の色が濃く、ティアナは不安げに顔を顰める。

「ああ、大丈夫だ。なんでもない……」

とても大丈夫そうには見えない疲れたダリオの表情を見てティアナは戸惑う。その様子に気づいた壁際に立っていたエマがすっと前に進み出る。

「恐れながら――ダリオ様はここ数日、お食事はおろか睡眠もほとんどとらずに執務室に籠っておいでで」
「エマ――っ」
体調不良の原因を喋るエマを止めるようにダリオが威圧的に名を呼んだが、エマは視線をダリオに一瞬映し、涼しい顔で続ける。
「今もアデライーデ様のお部屋に着くまでは平気な振りをしていましたが、部屋に入られた途端、目頭を押さえて倒れ込まれたのです」
「まあ……お疲れでしたらハレムになどおいでにならずに、お部屋でお休み下さい」
澄ました顔で言うエマをダリオは渋面で睨みつけ、心配そうに瞳を揺らして自分を見上げるティアナを見て、諦めたようにため息をつく。
「アデライーデ、心配するな。少し目眩がしただけだ……お前の顔を見ればすぐに元気になる」
大きな手をティアナの頬に当て艶っぽい声で言ったダリオを見て、ティアナは頬に当てられた手に自分の手を重ねる。
「ダリオ様……」
うるっと瞳に涙を溜め見上げるティアナの表情に、ダリオはきゅっと胸が締め付けられて動揺する。だが。
ダリオの手を握ったティアナは、きっと瞳を鋭く咎める口調になる。

「いけませんっ！　お食事と睡眠はしっかりとらなければ――体が資本なのですから！　お仕事が大切なのはわかります、ですが倒れては仕事すら出来ないのですよ、そんな事になって困るのはダリオ様だけではなく、臣下達です。上に立つ者として、自分の体調管理もお仕事の一つですよっ！」

いつも穏やかなティアナが声を荒げ、ダリオだけでなく側に控えるエマもマティルデもフィネも瞳を見開き唖然とする。

「マティルデさん」
「はっ、はい」

毅然とした声音で声をかけたティアナに、声をかけられるとは思っていなかったマティルデはどもってしまう。

「ダリオ様の夜着の用意はありますか？」
「はい、ございますが……」
「では、用意を」
「はい、畏まりました」

ダリオを見つめたまま言ったティアナを、マティルデは一瞬濃い視線で見つめ、深々と頭を下げて女官部屋へと行った。

「ダリオ様、今日はもうここでお休みください。部屋まで戻るのも疲れてしまいますわ。さあ――マティルデさん、お願いします」

夜着を持って出てきたマティルデとフィネにダリオを託し、寝室に入っていく後ろ姿を見送る。
パタン――と扉の閉まる音に、背中に感じる視線にティアナははっと振り返る。

苦笑いを浮かべて、無表情でこっちを見ているエマを見つめる。

「あの……すみませんっ」

言うと同時に勢いよく頭を下げたティアナを見て、エマは瞳を細め眉根に深い皺を刻む。

「私ったら勝手にダリオ様にこちらでお休みになるように言ってしまって……あの……勝手な事をして、本当に申し訳ありませんっ」

恐縮して体を小さくするティアナを見て、エマは涼しい顔にふわりと薄い笑みを浮かべる。

「いえ、誤ることはありません。むしろお礼を言わせて下さい、ありがとうございます」

そう言ったエマは姿勢よく立ち、深々と頭を下げるから、ティアナの動揺はさらに激しくなる。

「えっ……あのっ」

「私も、今日はなにがなんでもダリオ様には睡眠をとって頂くつもりでした。まあ、もちろんここではなくダリオ様のお部屋でと思っておりましたが――私が言っても素直に聞いて下さったかどうか……ですからアデライーデ様、ダリオ様を心配して下さりありがとうございます」

エマの言葉に、ティアナはなぜだか胸がちくりと痛む。複雑な表情でエマを見つめるティアナに微笑んだエマは外に続く扉に近づく。

「私は一度王宮に戻りますが、明日の朝お迎えにあがりますとダリ

オ様にお伝え下さい。ではアデライーデ様、ダリオ様のことをよろしくお願い致します」

深々と頭を下げて出ていったエマを見送り、ティアナはふっと細いため息をついて寝室に向かった。

※

大勢の民を抱え、臣下の上に立つスルタン――見下されないようにいつでも気を張って過ごしている。臣下に不安を与えないように、つけ入るすきを与えないように、自分の弱みを他人には見せないように幼い頃から教育されてきたダリオをずっと側で見守ってきたエマ――エマニエル・ライヒ、二十一歳は、半分だけ輝く夜月に照らされたハレムの通路を一人歩いていた。

すれ違う衛兵はエマを見て会釈し通り過ぎていく。

冴え凍る瞳のスルタンの若き側近のエマは、スルタンに負けず劣らず常に涼しい表情を崩すことがない。どこかとっつきにくい雰囲気に敬遠されていた。

すれ違った衛兵を涼しげな瞳で見送ったエマは、その口元に薄い笑みを浮かべる。

冷酷非情、常に弱みを見せない威圧的なダリオがアデライーデに見せた弱さ――

はじめは身元も分からず、ハレムに入れることもハセキにすることも反対していた。何事にも執着することのなかったダリオが唯一執着心を見せたアデライーデに対して、ダリオの政権の邪魔になるのなら排除するべきだとすら考えていたが。

倒れたダリオを気遣い、心から心配するアデライーデの表情を思い出して、エマはくすりと笑みを深くする。

孤高のスルタンを心配するハセキ――
癒しの場になるハレム――
そうであればいいと思った。
ダリオを心配する人が、自分の他にもう一人くらいいてもいいと思った。

第２８話　月光の少女（後書き）

今まででてきませんでしたが、エマさんの本名はエマニエル・ライヒといいます。
ダリオの側近としてティアナをあまり快く思っていなかったエマが、ティアナをハセキとして認めまてくれました。
ダリオの恋はどうなるでしょうか。
次話、あまめの予定です！

第２９話　安らぎの窓下

エマを見送り寝室に入ったティアナは、マティルデとフィネに支えられるようにベッドに腰掛けたダリオに近寄る。

「ダリオ様、エマさんが明日の朝お迎えにあがりますと言っていました」

ベッドから離れ、寝室から続く女官部屋の扉の近くに立ったマティルデとフィネは二人に視線を向け、行儀よく控えている。

「ですから今日はゆっくりとお休みになって下さい。どうせ、今夜もこの後王宮に戻ってお仕事をするつもりだったのでしょう？　今日だけは私のベッドでお休みください、私が側におりますから」

ティアナの言葉に僅かに頬を染めたフィネに対して、マティルデは一瞬眉間の皺を深くした。

ダリオは深いため息をついて自分の前に立つティアナを見上げ、疲労の色の濃い瞳に艶めいた光を宿す。

「わかった、アデライーデ。お前の言う通りにする。だから……」

頬に手を伸ばしたダリオが口元に不敵な笑みを浮かべるから、ティアナはダリオがそう言いながら自分を出し抜いて寝ないのではないかと感じて、きっと眉を吊り上げる。

「お休みくださるなら、もう横になって下さい」

言ってダリオの肩を強くベッドの方に押しやったティアナは、その勢いのまま自分もベッドに倒れ込んでしまう――

ティアナは何が起きたのか一瞬分からなくて、きつく瞑っていた瞳をゆっくり開けて悲鳴を上げる。

「きゃ……っ」

目の前にある逞しい胸に――ダリオの上に倒れ込んでしまったことに気づいて、鼓動がいっきに早くなる。ダリオの胸に手をついて上体を起こし、あたふたとする。

ベッドに押し倒される形になったダリオは、さらりと蜂蜜色の髪をかき上げて、動揺して頬を染めるティアナに甘やかな視線を向ける。

「アデライーデ――……」

あまりにも愛おしげに名を呼ばれて、ティアナはぴくりと肩を揺らす。体の中心から広がる痺れに、ドクドクと心臓の音が鳴り響く。

「ダリオ様、あの――」

氷の瞳に甘い輝きが濃くなって、ティアナはどうしていいのか分からなくて掠れる声でダリオの名を呼ぶ。

ダリオは仰向けの姿勢のままティアナを見上げ、流れる銀髪の一房を指に絡めて口元に近づける。

その一つ一つの動作があまりにも美しくて、ティアナはつい見とれてしまう。

毛先に口づけたダリオは長い睫毛を伏せ、煌く光を帯びた妖艶な瞳をティアナに向ける。胸の上に置かれた雪よりも白い小さなティ

アナの手をとり、指先に指先を絡めて力を込め、その仕草にティアナの心臓が大きく跳ねる。

「あ――っ」

「アデライーデ、あい――」

ダリオが指に口づけたまま喋り、指にあたる吐息の甘さにティアナはがばっとベッドから体を起こして立ち上がる。

「ダリオ様っ！」

何か言おうとしたところをティアナに遮られて、ダリオは一瞬むっと不機嫌そうに眉根を寄せる。

ティアナはその表情に気づかず、唇の感触の残る指先を意味もなく動かしあたふたと喋る。

「あっ、そうですわ、枕が一つしかありませんでした……マティルデさん、枕を……あれっ？」

言いながら振り返ったティアナは、さっきまで側に控えていた二人が姿を消していて目を瞬き、助けを求めることが出来なくて、動揺が激しくなる。

「あら、マティルデさん、どこに行っちゃったのかしら、私、ちょっと呼んできますね……」

きょろきょろとあたりを見回してベッドから離れようとした時、ティアナは腕を強く引かれて再び倒れ込むようにベッドの中に転がる。

衝撃に備えて目を瞑ったティアナは目の前に端正なダリオの顔が

あって、一度は引いた顔の赤みが増してくる。

「よい、行くな、アデライーデ」

「で、ですが、枕が……」

抱きかかえられるような体勢に身じろいだティアナを、抱く腕に力を込めてダリオは引き寄せる。

「枕などよい。こうすれば問題ない」

そう言ってダリオは自分の腕にティアナの頭を乗せる。横向きに寝がえり、腕の中で身を固くするティアナを見て不敵な笑みを漏らす。

さっきまでは顔色も悪く気力もなさそうだったダリオの瞳に精気が宿っていて、ドキンとする。至近距離に甘やかな煌きのダリオの瞳があって、ティアナの心臓はどうにかなってしまいそうに早鐘を打っていた。

「あっ、あの……」

どうにかダリオとの距離を開けようと言葉を紡いだ時。

ぼてっと鈍い音が響いてティアナは首だけを音のした方へ向けると、女官部屋から出てきたフィネが真っ赤な顔をして立っていて、足元には筒状の枕が落ちていた。

ティアナはぱっとダリオを振り返り、自分の体勢を見下ろしてかぁーっと顔に熱がこもる。

ダリオの腕の中に包まれ仲よさげにベッドに寝転がる体勢に、今更ながら自分が言葉の大胆さを思い知り頭から湯気が出そうだった。

私のベッドでお休みください、私が側におりますから――

艶っぽい意味で言った訳ではないが、偽のハセキだという事情を

知らないフィネからしてみれば、ダリオとティアナが仲睦まじくじゃれ合っているように見えたのだろう。

「あっ、申し訳ありません……っ、失礼しました……っ」

顔を真っ赤にし、落とした枕のことも忘れてフィネは慌てて侍女部屋に入っていってしまった。

「待って、フィネ――っ」

誤解を解こうとして伸ばしたティアナの手は虚しく宙をかく。その後には、ばたんと勢いよく閉まった扉の音だけが響いた。

静まりかえる室内に、ダリオは小さくため息をつきティアナを自分の方を向かせる。

「女官のことは気にするな」

「ですが、なにか誤解をして……」

「よい、私とハセキが共に一つの褥で寝るのになんの問題がある？」

そんな風に問題と言われるとティアナは困ってしまって、言葉に詰まる。

「もうよい、寝るぞ」

言うと同時にダリオはティアナを腕の中に閉じ込め、瞼を閉じる。

なんだか納得がいかないながらも、ティアナは目の前で目を閉じるダリオの端正な顔を見つめる。けぶる長い睫毛、通った鼻筋、形の良い唇、艶やかな蜂蜜色の髪を眺め、こんなに近くでダリオの顔を眺めたのが初めてだと気づく。

しばらくして規則正しい寝息が聞こえてきて、ダリオがやっぱり

疲れていたんだと実感し、起こしては悪いとティアナも瞳を閉じた。

※

半分満ちた月が天中を過ぎた頃――

ふっと意識を覚醒させたダリオは、腕の中ですやすやと安らかに眠るアデライーデを愛おしげに見つめる。

こんなふうに安心して眠ったのはいつぶりだろうか――

アデライーデに体が資本だと叱責され、アデライーデが安心するのならと数時間だけ眠るつもりだった。それがアデライーデよりも先に寝てしまい、数時間どころかたっぷり寝てしまったことに苦笑する。

スルタンになってから、ハレムで睡眠をとるのは初めてのことだった。ウクス達の元に通った時は、することだけをしてすぐハレムを後にした。

まさか、こんなふうにハレムで時を過ごす日がくるとは、ダリオは予想もしていなかった。

穏やかながらも強い意志を宿す翠の瞳が気に入っていた――

冷酷非情のスルタンと恐れられる自分がまさかスルタンとしての資質を疑われるとは思わなかったが、アデライーデの叱責に対して不愉快に感じることはなかった。

体が資本――その通りだと思った。むしろ、王族としての責務を理解したうえでの発言のように感じて、ダリオの心にアデライーデの言葉は強く響いていた。

腕の中で眠るアデライーデを見つめ、額にかかる銀の髪を優しく掻きあげる。何度も梳き、柔らかい手触りを確かめる。

ポラリスと交易の多いロ国は赤毛や栗毛が断然多い。もちろんダリオのように蜂蜜色や他の毛色もいるが、銀髪はいなかった。大陸

全土で銀髪自体が珍しい。その中でも、ロ国と隣接する北の大国と南の小国にはわずかだが存在し、特に王族には多いという情報を得ている。
隣国の出身ならば、海での遭難中にアスワドに拾われたという事情に納得がいく。
記憶を失くし身元が分からないと言ったアデライーデの出身は、隣国の――しかも王家の血を引く可能性が高い。そう分かったのは数日前で、北と南の国に密偵を放った。
アデライーデが自分の記憶を取り戻したがっていること、国に帰りたがっている事を知っているから、ダリオはアデライーデの身元調査にも時間を割いていた。
だがその一方で、このまま分からなければいいという思いが強くなっていた。
帰したくない――次第に強くなる想いに、アデライーデを強く抱き寄せ耳元で囁く。
今は閉じられた瞼のむこう、見えない翠の瞳に恋焦がれ、ダリオはアデライーデの額の髪をかきあげると、そっと口づけを落とす。
「アデライーデ――愛している、ずっと私の側にいてくれ――……」

第２９話　安らぎの窓下（後書き）

ランキングに参加しています。
「小説家になろう　勝手にランキング」ぽちっと押して頂けると嬉しいです（＾＾）

第３０話　太陽と月と星と

ここ数日、アデライーデが物思いにふけりぼーっとしていることが多い事に、フィネは気づいていた。
一緒に始めた編み物もここ数日やっていないし、暇があれば部屋に一人で籠るか、中庭を沈んだ面持ちで歩くか、サロンの窓際でため息ばかりついているアデライーデの姿を見て、フィネは心配でならなかった。
きっと、スルタンのことでお悩みなんだわ。最近スルタンがアデライーデ様のお部屋で過ごす時間が短くなったことに心細く感じているに違いない――
フィネはアデライーデの様子の変化を、ダリオからの愛情が薄らいだと感じての気鬱だと思っていた。
実際は解毒剤作りに熱中し、毒を持った犯人がニコラではないかという疑いに悩んでいたのだが、そんなことなど知らないフィネは見当違いをしていた。

アデライーデがハレムに来てから一日と欠けることなく毎夜通ってくるスルタン、初めて間近で見たスルタンは冷酷非情と言われるだけあって威圧的で、目を合わせるのも怖くて自然とひれ伏してしまう。ただ、毎日たった数時間でも側で仕えて、フィネは知ってしまった。冷酷非情のスルタンがアデライーデに見せる愛おしい眼差しを――
時折アデライーデだけに向けられる笑顔や優しい仕草に、心からアデライーデを愛しているのだということが分かった。アデライーデがハセキになった時も当たり前だと思ったし、自分の仕える主人

がハセキになって誇らしくもあった。
それでも――毎夜訪れながらも、決して寝室には踏み込まず、数時間サロンで話すだけで王宮に戻ってしまうスルタンに多少のじれったさを感じていた。
アデライーデを大切にしていることは分かっても、いつスルタンの愛情が他の女性に移るか分からない。そのことをアデライーデも不安に思っているだろうと感じていた。
だから星砂漠のことを聞かれた夜、部屋に尋ねてきたダリオに言ったアデライーデの言葉にフィネは内心の驚きを隠すのが大変だった。

『今日だけは私のベッドでお休みください、私が側におりますから』

その言葉は誘いの言葉。大胆なアデライーデの言葉に側に控えていたフィネは顔を赤らめずにはいられなかった。
望んでいたこととはいえ、アデライーデの大胆な言動に平静を保てずにあたふたしていたのをマティルデに無言で引っ張られて女官部屋へと下がる。

「あの、マティルデさん。いいのですか？　下がれとも言われていないのに出てきてしまって……」

上目使いに見上げたフィネに、マティルデはこほんっとわざとらしい咳払いをして、女官部屋の奥の棚に向かう。

「あのまま居続けるのは野暮というもの。女官ならば主人の意を汲んで退席するのも一つの心得です。それよりも、この枕を届けてきなさい。いいですね、音を立てず、二人の邪魔をしないようにですよ――」
「はいっ」

マティルデに鋭い視線で言われたフィネは勢いよく返事をして、静かに寝室に続く扉を開けたのだが……

マティルデに注意されたばかりにも関わらず、ベッドの上で重なり合うダリオとアデライーデを見て衝動的に枕を落としてしまい、ぼてっと鈍い音が室内に響く。ベッドの中の二人の視線がフィネに突き刺さり、ぼぼっと顔に火がつく。

「あっ、申し訳ありません……っ、失礼しました……っ」

床に着きそうな勢いで頭を下げると、フィネはアデライーデの制止も聞こえず女官部屋へと駆けこんだ。

空いた扉の隙間から事の次第を見てしまったマティルデは、悩ましげに額に手を当てて深いため息を漏らす。

平常心が足りない……再教育が必要なようね――

真っ赤になって突っ立っているフィネを見て、マティルデは肩を落とした。

※

ハレムで働いて二十二年――これまでの月日を思い出すと長かったようで短かったようにも感じていた。

マティルデは十四歳でハレムの女官として働き始めた。美しく着飾った女性達が、その裏で醜い争いを繰り広げられていることを知り、ただ何も感じず何も考えずに働くことに集中した。

家も親も失くし、ハレム以外に行き場を失くした自分は、ここで働けるだけで幸せだと思っていた。ある日、掃除に入った部屋にいた女性に声をかけられるまでは――

女官として一人の女性に仕えてからもう数年が経ち、今ではハレムの女官長としてスルタンの信頼を受け、他の女官やハレムの警備兵をまとめる立場になった。あの当時は、こんな日が来るなど想像もしていなかった。

先日、ダリオから一人の女性のお付き女官になってほしいと頼まれた時――マティルデには断る理由が思い当らなかった。女官長になった自分に初めて私事の頼みごとをしてきたことが嬉しかったから。

それでも、その女性がダリオの特別にはなりえないことを、幼少よりダリオを見守ってきたマティルデは知っていた。

昨年スルタンになり、幾人もの女性の元に通ったダリオ。女の元に通おうと事を済ませれば女性には目もくれずに王宮へ戻っていく。心は誰にも開かないという様に、振り返りもしない――

だから、自分を部屋付きの女官にしたのは何か考えがあってのことだろうと思った。

待機するように言われた場所は、懐かし彼の人が使っていた部屋――彼の人が亡くなってから、定期的に手入れをさせつつずっと未使用だった部屋で、マティルデは胸に渦巻く小さな動揺を平静な表情で無視する。

自分の他に女官として経験の少ない若いフィネも呼ばれていることに首を傾げながら、ただ姿勢を正して、仕えることになる女性を待った。

側近のエマに従われて来た女性は――あまりにもみすぼらしい身なりに内心で訝しみながらも、汚れてもなお輝きを放つ銀の髪にどこか懐かしい人の面影を思い出させられて、胸が締め付けられた。その上――エマが呼ぶ名に大きく胸が跳ねる。

アデライーデ様――唯一マティルデが心を許し、仕えたハセキだった女性。

あの子は本当は誰よりも優しい子だから――そう言って儚い笑みを浮かべた彼の人を思い出して、マティルデはきゅっと奥歯を噛みしめる。

ただアデライーデと名乗る女性に仕えるようにとだけ言われたマティルデは、渦巻く疑問を飲みこむ、詮索せずにアデライーデに仕えた。

彼の人の面影を思い出させたのは最初だけで、寄る辺なくそよぐ風に吹かれてしまいそうな彼の人とはまるで違いすぎた。違う人間なのだから当たり前だろうが、因果のある関係に、どうしても面影を重ねてしまう時がある。

しかしアデライーデは彼の人と決定的に違う部分があった。

意志の宿る眼差し――彼の人にはなかった強さ。

冷酷非情と言われるダリオがアデライーデにだけ向ける優しさに――マティルデは気づいてしまった。

ただ、それに対して自分が口出しをする事ではないと思っていた――あの話を聞くまでは。

いつだったか、人払いをしてダリオとアデライーデが二人きりで話をしている時、女官部屋に控えていたマティルデは二人の会話を聞いてしまったのだ。

アデライーデが記憶を失くしダリオに拾われたこと、アデライーデが本当の名ではないことを。

記憶を失くした少女にアデライーデという特別な名を付けたダリオの気持ちを考えると複雑な気持ちだった。

ダリオがアデライーデに向ける気持ちが、他のハレムの女性とは違うこと――一人の女性として惹かれ始めていることに気づいていた。誰にも心を許そうとしないダリオが、初めて見つけた愛しい人。愛する人を見つけられたことが嬉しく、出来ることならば二人をずっと側で見守りたい。だが、いつかはアデライーデが記憶を取り戻しハレムを出ていくことも知っている。不器用な恋にダリオが傷つくことが心配だった。

それでも、マティルデが口出すことは出来ず、口出しすることだとも思っていなかった。

いつものようにアデライーデの部屋に訪ねてきたダリオ。しかしいつもと違い青ざめた顔にアデライーデが心配して側に駆けよるのを、側に控えて見つめていた。

何も見ない、何も聞かない――女官の鉄則のルール。見たことも聞いたことも口外しないし、それに対して自分の感情に流されることはいけない。

見ていたけど見ていない、アデライーデがダリオを本気で心配している様子に安堵する自分の心を隠し、精一杯平静を装っていたマティルデは、突然自分に声をかけられて、どもってしまう。

冷静沈着な女官長として恐れられているマティルデには珍しい失態だった。

ダリオの夜着を用意するようにと言ったアデライーデに、無表情の顔で答え――一瞬だけ、アデライーデを見つめる瞳を濃くする。

記憶を取り戻したらハレムを出ていってしまうアデライーデ。記憶を取り戻したがっているアデライーデのことを考えると一日も早く記憶が戻るように願うが、その反面――記憶を取り戻しても、ずっとダリオの側にいてくれればいいと願った。

初めて愛した女性――彼女を失った時のダリオの痛みを考えると辛くて仕方がない。

アデライーデをハレムに迎えてから毎夜足を運びながら、一度も寝室には足を踏み入れることのなかったダリオ。

今までの女性とは違い、アデライーデが特別で大切に思っていること。アデライーデの気持ちを待っているのではないかと――マティルデは思っていた。

だから、アデライーデから寝室へと誘う言葉に、マティルデは心のうちに広がる歓喜を噛みしめる。そういうつもりで言った言葉で

はないことは分かっていても、二人の距離が縮まればいいと切に願った。

第３０話　太陽と月と星と（後書き）

女官のフィネとマティルデ視点のお話です。

第３１話　願い事ひとつ

チュンチュンチュン――

ハレム、アデライーデの寝室。天蓋付きの大きなベッドの中にはダリオとアデライーデ。

夜中目覚めたダリオはベッドから抜け出して王宮で執務をしようかとも考えたが、結局諦め――もとい誘惑に負け、そのまま朝まで寝てしまった。

久しぶりに熟睡し、清々しい気持ちで目覚めたダリオは、自分に寄り添うように右隣で眠るアデライーデの寝顔を見つめ、その瞳を和ませた。

※

鳥のさえずりと窓から差し込む光に、重たい瞼をこすりながら寝がえりを打とうとしたティアナは、布団ではない重量感に違和感を覚える。

「ん――っ」

足先を伸ばし、わずかに身じろいで瞼を開けると、甘やかな輝きのダリオの瞳と視線があい、大きく鼓動が跳ねる。

えっ、ダリオ様――！？　どうしてダリオ様が……

寝起きで自分の置かれている状況を理解できずにあたふたとするティアナを見つめて、ダリオは口元にふっと魅惑的な笑みを浮かべ

る。

「目が覚めたか、アデライーデ」

「えっと……おはようございます、ダリオ様……」

昨晩、執務のしすぎで顔色の悪いダリオを自分でベッドに引っ張ってきたことを思い出して、ぼんやりとだが状況を理解する。動揺したところを見られたのが恥ずかしくて、頬を染めたティアナは伏し目がちに挨拶をし、訝しげに翠の瞳をダリオに向ける。

「あの、ダリオ様はいつから起きておられたのですか……？」

「二、三十分くらい経つか？」

ダリオはなぜそんなことを聞かれたのか分からず首を傾げながら返答し、その答えを聞いたティアナは一気に顔を青ざめさせる。

「そんなに前ですか！？　どうして起こして下さらなかったのですか！？　今すぐ起きますから……っ」

ティアナは慌てて起き上がろうとしたが、その動きを遮られる。ダリオはいますぐにでも自分から離れて行こうとするティアナを不服そうに眉目を寄せて見つめ、体に回していた腕に力を込めて抱き寄せる。

「まだ、よい。私はこうしてアデライーデの熱を肌に感じていたいのだ」

言葉の通り、ダリオのはだけた胸元に頬が当たっているティアナは、一気に鼓動が速くなる。ティアナが顔を真っ赤にしてあたふたする様子を見て、ダリオはほくそ笑んだ。

「お前の寝顔は可愛い――いつまででも見ていられる」
耳元で甘く囁いたダリオだったが、それに対してティアナは予想外の反応を示す。きっと瞳を吊り上げて怒りだしてしまったのだ。
「なっ、ねがっ……！？　もう、ダリオ様、信じられません！　人の寝顔を見て笑うだなんてっ」
ダリオを睨む瞳には涙が浮かび、ティアナはばしばしと腕で力一杯胸を叩いて抱きしめるダリオの腕の中から抜け出す。
寝顔を見て笑ったのではなく、可愛いと思ったのだが――
訂正しようと思ったが、訂正する間もなくベッドから勢いで転げ落ちたティアナが「マティルデさーん」と泣きながら女官部屋に駆けこんで行ってしまったので、呆然とする。
まだしばらくは寝転がっていたい気分だったが、すぐにでも女官達が来ることを予想して、体を起こす。ベッドの上で片膝を立てて座り、額にこぼれ落ちた蜂蜜色の髪をかきあげたダリオは大きなため息を漏らす。その瞳は切なく揺れ、儚い笑みを浮かべていた。

※

ティアナの部屋の一室。以前も一緒に食事をした大きな楕円テーブルの置かれた部屋でティアナとダリオは向かいあう様に座っている。
テーブルの上にはすでに朝食が用意され、壁際にはエマとマティルデ、紅茶を注ぎ終えたフィネがカートを寄せて立っている。
ダリオはお茶の注がれたカップを優雅な手つきで持ち上げて一口

含み、カップ越しに眉間に皺を寄せた顔でティアナを見つめた。
向かいに座るティアナは、ナイルブルーの異国風のドレスを着ている。胸元には同色のリボンが巻かれ背中で結われ、髪にもリボンや真珠の飾りが施されているのだが……その表情は泣きそうに歪んでいる。
寝顔を見られてしまった衝撃から立ち直れず、それでも持ち合わせている矜持でなんとかダリオを共に朝食の席に着いたのだが、非難の眼差しをダリオに向けずにはいられなかった。

「悪趣味です、人の寝顔を見て笑うだなんて……」

ぽつりと小さな声で漏らしたティアナの言葉に、壁際に立つ三人が気の毒そうな視線をダリオに向ける。
その視線を受けて、ダリオはこめかみを引きつらせる。
明らかに同情とみてとれる視線に、大きなため息をついてティアナに視線を向ける。

「アデライーデ、本当にすまなかった。その……悪気はなかったのだ」

からかうために見ていたのではないが、何を言っても誤解しているティアナには通じないと諦めたダリオは、どうにかティアナからの非難の視線を和らげようと思考を巡らせる。

「もう二度と寝顔を見たりはしない……」
「本当ですか……？」

ダリオの言葉に、俯いていたティアナはわずかに顔を上げて掠れる声で尋ねる。
聞き返えされるとは思っていなかったダリオはどもりながらも、

笑顔を浮かべる努力をする。
もしまた今回のように緊急事態でティアナと寝ることがあったとして、自分が先に起きてしまえば、寝顔を見つめずにはいられず――見ないといえば嘘になるが。
ぐっと本心を飲みこんで頷く。

「あっ、ああ……本当だ。愚かな私を許してくれるのならば、お前の願いを一つ叶えよう」
「願い……ですか？」
「ああ、私に出来ることならばなんでもよい」
「では、星砂漠に行くことを許して下さいますか？」

ぱっと上げた顔を無邪気に輝かせて自分を見つめるティアナに、ダリオは胸をきゅーっと鷲掴みにされる。だが、ティアナの口から出た思わぬ言葉にダリオは眉間のしわを濃くした。

「星砂漠、か――？」
「はい、ロ国は国土の六割を砂漠が占めていると聞きました。ハレムの女性はハレムを出ることを禁止されているのは知っていますが、砂漠には行ったことがないのでずっと興味があったのです」
「お前が勉強熱心なのは知っているが、砂漠には砂賊も出るし危険だ。一人で行かすわけには行かない」

厳しい口調で言われ、ティアナは目に見えてしゅんと落ち込む。
ダリオが一緒ならば、砂漠に行くことも可能だと思っていたティアナはふてくされたようにもらす。
「ダリオ様は一緒に行って頂けないのですか……？」
その言葉に、ダリオはぴくりと眉を動かす。

「――すまないが、しばらくは執務が忙しくて王宮を離れることが出来ない。他の願いか、一月以上先ならば連れて行ってやることも出来るかもしれないが」
「一月以上……そんなに待てません、七日後には満月です。その日までにイヴァー・オアーゼにどうしても行きたいのです。その、女官から星砂漠の伝説を聞いて……是非行ってみたいと思ったのです。駄目ですか――？」

潤んだ瞳を揺らし見つめてくるティアナに、ダリオはわずかに目を見開き、ぎゅっと奥歯を噛みしめる。ダリオの瞳がギラッと光を反射して鋭く光り、静かな声で告げる。

「分かった――満月の夜に必ずイヴァー・オアーゼに連れていくと約束しよう」

言うと同時に、壁際のエマを見る。その瞳が威圧的なスルタンの表情になっていたことに、ティアナは気づかなかった。

※

女官部屋で朝の支度をしているところに泣きながら駆けこんできたアデライーデから話を聞いたマティルデとフィネは、ダリオが寝顔を見ていたのはからかうためではなく好きだからだとすぐに理解した。

しかしなぜか、アデライーデはダリオの行動と甘い思考に結び付かないようで、そのことを内心で不思議に思いながらも、落ち着かせるために「そうですね、酷いですね」と同意し、気分を紛らわせ

るために異国風のドレスを出したのだった。

※

朝食前に部屋を訪れたエマは食事室に入り、一人、テーブルに肘をつき暗い雰囲気のダリオを見て首をかしげる。

「ダリオ様、どうかなさいましたか？」

愛するハセキと一夜を過ごしたとは思えない落ち込み具合になんとはなしに尋ねたのだが、ダリオはエマに渋面を向ける。

「寝顔を見ていたら、アデライーデを怒らせてしまったようだ……」

わずかなトーンの違いだがダリオが落ち込んでいることに気づいて、エマは片眉を上げる。滅多に見ることのない気落ちしたダリオに目を瞬く。

ダリオの言葉からだいたいの予想がついたエマが口を開こうとした時、マティルデとフィネに促されて食事室に入ってきたティアナがダリオよりもさらにひどい表情をしていて――ダリオの愛情表現が全く伝わっていない事を気の毒に思い、エマは誰にも気づかれないような小さなため息を漏らした。

第３１話　願い事ひとつ（後書き）

更新遅くなってしまってすみません＞ｍ（＿）ｍ＜

第３２話　伝説はいつまでも語り継がれて

『満月の夜に必ずイヴァー・オアーゼに連れていくと約束しよう』

そう言ってダリオがティアナの部屋を出て行ってから二日が経つ。

王宮のあるロ国首都ワール・パラストから砂漠の手前にある街リヴァブまでは馬車で二日、さらにイヴァー・オアーゼまでは二日かかる。遅くても明日には出発しなければ、満月の夜に間に合わず、ティアナはじれったい思いでひたすらダリオからの連絡を待っていた。

連れて行ってくれると約束したダリオの言葉は信じているが、ティアナには気がかりなことがあって――

サロンのソファーに腰掛けて本を読んでいたティアナは手元の本から視線を上げ、テーブルに置かれた揺れる灯火を見つめて、細いため息を漏らした。

※

時は遡って二日前――

ダリオが約束を残して食事室を去った後、マティルデとフィネも片付けに出て行き一人残ったティアナは、最近の日課になってしまった薬作りをしていた。

中庭で採ってきた薬草を乾燥させたり、常備薬を作ったりしていると、机の上に置かれた灯火がゆらりと揺れ、パチパチと火のはぜる音と共に室内に見知った人物が現れる。

「ごきげんよう、私の姫君――」

すらりと背が高く時代錯誤の黒いマントを羽織り、長い黒髪を無造作に後ろに流し腰のあたりで束ね、不敵な笑みを口元に浮かべたルードウィヒを、ティアナは片眉を上げて迎える。

「ごきげんよう、ルードウィヒ」

以前はルードと呼んでいたが、ルードウィヒが森の魔法使いだと思い出した今はあえてルードウィヒと呼ぶ。未だに彼と自分との関係を思い出すことは出来なかったが、ティアナは以前よりも警戒心を持ってルードウィヒを迎え入れた。

『いいか、――？　魔法使いに会った時決してしてはいけないことは取引だ。魔法使いと取引する時はそれ相当か、それ以上の代価を支払わなければならない。魔法使いは巧みな言葉で誘導し、必ず取引を持ちかけてくる。だから気をつけろ。決して、魔法使いの言葉に惑わされるな』

自分にそう言って聞かせたのは誰だったか――

だが、ルードウィヒのことを思い出した時、警告の様にこの言葉を思い出した。

ルードウィヒが話したことすべてが嘘だとは思わないが、隠されたわずかな真実を正確に読みとらなければならないと感じた。用心をするにこしたことはないと――

彼の話では、は戦の最中、恋人と離れ離れにならなくてはならなかったと言っていたが、彼が住むドルデスハンテ国ではここ数十年間戦は起こっていない。彼が話した“過去”とティアナの知る“現

実”のズレに疑問が渦巻く。
もしも彼がドルデスハンテ国の出身でなければ――？
彼が恋人と別れたのが最近ではなく、もっと昔ならば――？
自分はピアスなんて身につけないし、ルードウィヒの恋人のピアスを持っているなんて考えられないが――関わりがあるのだとしたら？
ルードウィヒと自分の間には何らかのつながりがある――？
そんな疑念を抱いて、ルードウィヒの言葉を思い出す。

『君のことは――ずっとずーっと昔から知っているよ』

『つくづく悪運なのは血筋なのかい？』

昔から。血筋――
鋭利な瞳に宿す慕情の炎、恋人の話をした時の切なく揺れる瞳――その中に真実は隠されているように感じてならなかった。
仮に――自分がルードウィヒ……いや、彼の恋人の血縁ならばピアスを持っている可能性は高いかもしれない。
そんな考えに思い至って、胸にじくじくとした熱い痛みが広がる。ルードウィヒに会ってからたびたび痛む胸に首を傾げながら、ティアナは決意を固くする。
とにかく、ルードウィヒの言葉の中に真実が隠されているのなら、それを正確に読みとるように会話には細心の注意を払うように心がけよう。
そう決意したのに、ルードウィヒはティアナを混乱させる言葉ばかりを言う――

「今日もまた解毒剤作りかい？　飽きないのかねぇ」
「ええ、楽しいわよ。余計なこと考えないで済むし……あなただっ

て魔法使いなのだから、薬の調合はお手の物でしょ？」

調合の手を止めたティアナは、気だるげに壁にもたれるルードウィヒに注意深く視線を向ける。

「あいにくだが、私にはそんな陰気くさい趣味はないのでね。いちいち調合などせずとも魔力でどうとでもなる」

肩をすくめて馬鹿にするように言ったルードウィヒがぱちりと指を鳴らした瞬間、ティアナの手元の薬が合わさってじゅーじゅー音を立ててオレンジ色の煙を上げたから、ティアナはぎゅっと唇をかみしめる。

いちいち嫌味な言い方でかんに触る。ティアナはルードウィヒを睨みつけたのだが、彼は気にした様子もなく口元に意地悪な笑みを浮かべる。

「そんなことよりも、まさか君があの男ではなくてあいつと恋を成就させようと思っているとは――驚きだね」

「えっ……？」

もったいぶって言ったルードウィヒの言葉の意味が分からなくて、訝しげに顔を顰める。

あちこち意味不明なところはあるが、一つだけ、ルードウィヒが言うあいつというのがダリオを指している事だけは分かって尋ね返す。

「ダリオ様が……なに？」

「あいつと星砂漠に行きたいと言ったのだろう？　しかも満月の夜に――」

正確にはダリオと一緒に行きたいとは言っていないが、ダリオと一緒に行くことにはなっていて、ティアナはどう訂正するべきか迷う。

下手に訂正して、話を誤魔化されたら困ると思って口をつぐんでいると。

「確実に誤解しているだろうなぁ」

そんな意味深なことを言って、目元を細めて怪しい光を反射するルードウィヒに、ティアナは瞬いて視線を向ける。

「なぜ、そんな訝しんだ顔をしている。星砂漠の伝説を知っているのだろう？　聡明な君ならば、あいつが君に何を期待しているか分かるだろう――？」

ダリオに星砂漠に行きたいと言った時に伝説を聞いてとは言ったが、ティアナはそれがどう誤解を招くのかいまいち理解できない。

「伝説って、イヴァー・オアーゼで流れ星を見ると願い事が叶うという言い伝えのことでしょう？　それがなに？　ダリオ様が誤解するって……？」

キョトンと首をかしげるティアナを見て、ルードウィヒは片眉を上げ瞠目する。

「なんだい、君はもう一つの伝説を知らないのかい？」

「もう一つ――？」

「星の砂の降る丘、満月の夜、恋人同士で流れ星を見ると恋が成就する――という伝説だ」

くすりと口元に意地悪な笑みを浮かべてルードウィヒは額にかかる黒髪を大きくかきあげて、それからゆっくりと壁際からティアナは座る椅子に近寄る。

「星降る丘……満月……恋、人……！？」

一致する符号にティアナはすとんきょうな声を上げる。

「そう、君が行きたいと言った星降る丘、満月の夜を指定して――あいつは君が自分のことを好きだと勘違いしているぞ」

「なに、それ……私は知らないわ、そんな伝説。星砂漠に行きたいのはただ、満月の夜に月下星珠の蜜を採りに行きたいからで……」

伝説の話を聞いてと言ったのはただの口実なのに、自分が知る伝説以外にもう一つ恋の伝説があるとは思わなくてティアナは気が動転して手に持っていた試薬瓶を落としてしまう。

小瓶の落ちた床からは異臭を放つ青い煙がもくもくとあがり、皮肉げな笑みを浮かべたルードウィヒの姿がぼやける。その中に、くつくつと陰湿な笑い声がこだまする。

「まあ、せいぜい頑張りたまえ、私の姫君――」

ルードウィヒが消えると同時に食事室の扉が慌ただしく叩かれ、マティルデの声が響く。

「アデライーデ様、なにやらこちらのお部屋からただならぬ匂いがいたしますが――」

ティアナはマティルデの声を遠くで聞きながら、ルードウィヒの言葉が頭から離れなかった。

第３２話　伝説はいつまでも語り継がれて（後書き）

今日からまた更新再開します。
毎日更新出来るように頑張ります！

ランキングに参加しています。
「小説家になろう　勝手にランキング」ぽちっと押して頂けると嬉しいです（＾＾）

第３３話　星のまたたき

飲めば記憶を取り戻すことが出来るという月下星珠の蜜を採りに行きたいがために星砂漠に行きたいと言ったのだが、まさかそのことで、ダリオがあらぬ誤解をしているとは思いもしなかったティアナは揺れる馬車の中、一人沈痛な面持ちで拳を握りしめていた。

ティアナが知らなかったもう一つの伝説――星の砂の降る丘、満月の夜、恋人同士で流れ星を見ると恋が成就するという言い伝え。

ルードウィヒがいつものように突然姿を消した後、ティアナはもう一つの伝説をフィネに確かめたところ本当に恋の言い伝えもあると言われ――むしろこっちの方が有名だと知って余計に戸惑っていた。

確かに思い返してみれば、星砂漠に行くことを渋っていたダリオが急に行くと言ったのは『伝説』『満月』の単語を言った後で、まさかという思いとやっぱりという不安がせめぎ合い、頭の中が混乱していた。

ティアナがそんな苦悩に悩ませている時、ダリオの侍従がやってきて星砂漠への出立を告げた。ダリオはどうしても終わらせなければならない執務があり、ティアナは先に馬車で星砂漠に向かうことになる。

『執務が終わり次第、馬で後を追いかける。一緒に行くことは出来ないが、かならず満月の夜までには追いつく』

ダリオからの伝言を聞いて、ティアナは胸の戸惑いは更に大きくなる。

ダリオ様はやはり誤解を――？

満月の夜は五日後、イヴァー・オアーゼまで馬車では四日かかるが、単騎で馬を飛ばせば二日ほどで行くことができる。ティアナが先に出ても、ダリオが追いつくことは可能だった。

『満月の夜に必ずイヴァー・オアーゼに連れていくと約束しよう』

そう約束はしたが、ティアナは記憶を取り戻すために月下星珠を探さなければならなくて、満月の夜はその蜜を採取する目的がある。ダリオには悪いが、恋愛成就とかそういうことにかまけている余裕はなかった。

街道を駆け抜ける馬車の中、ティアナはただただ月下星珠を無事に見つけられることを祈っていた。

※

馬車に揺られて二日、首都ワール・パラストから砂漠の手前にある街リヴァブに到着し、馬を替えてさらに星砂漠を進む。

星砂漠と言っても、このあたりはまだ丸い粒の砂で星形をしていない。ただ、街よりも気温が高く乾燥している。

マティルデは女官長としてハレムを離れるわけにはいかず、今回は待機組。馬車の中、ティアナの向かいには、約束通りフィネが座っている。

四頭立ての馬車は砂煙を上げながら星砂漠を突っ切り、馬車の先頭、その周りを囲むように六頭の騎馬の護衛兵が付きそう。

ティアナは普段ハレムで身につけているものよりも露出の少ない衣装を身にまとい、更にその上から灰色のマントをまとっている。お忍びとは言え、スルタンの唯一のハセキであるティアナは、華美な装飾を身につけ、つけ慣れていない宝石類に、ティアナは重いた

め息をつく。
美しい宝石類も、実際につけている身としてはその輝きは見えないし、重いだけでティアナにとっては窮屈以外の何物でもなかった。おまけに、砂漠で街よりも暑いというのに、普段よりも多く衣装を身につけられ、辟易していた。
首都からリヴァブまでの道中、楽しくフィネとお喋りをして過ごし快適だったが、砂漠に入ってから、整備された道ではなくでこぼこの砂漠を進み、馬車は激しく揺れて、喋ろうとするものならば、突然の揺れで舌を噛みそうになる。その上、砂が馬車の中まで吹きこんで、顔や髪だけならず、口の中まで入ってきてしまって困惑していた。
フィネも同様、想像以上の砂漠の気候の厳しさと砂の脅威に、さっきから口を閉じて眉根を寄せている。
イヴァー・オアーゼに行くのは楽しみだが、その道中を楽しもうという気は失せてしまっていた。
沈黙を守る馬車の中、ティアナはどんどんと近づくイヴァー・オアーゼに着いてから先のことを考えていた。
どうやって月下星珠を探すか。フィネや護衛を上手く誤魔化して、探しに行けるかどうか――
ロ国の星砂漠にのみ生息する珍しいサボテンだという少ない情報だけで、見つけられるかどうか、ティアナは自信がなかった。
それとなく、フィネやマティルデに月下星珠のことを尋ねてみたが、このサボテンの存在すら知らないようだった。
ただ、ニコラの言葉の中から手がかりは掴んでいた。ニコラはロ国の星砂漠にのみ生息すると言っていた。
総称してロ国の砂漠のことを星砂漠と言うらしいが、実際、その名の由来となった星の形をした砂があるのはイヴァー・オアーゼを囲む一部の地域だけだという。もし、ニコラの言う星砂漠が、ロ国の砂漠全土のことではなく、イヴァー・オアーゼの周辺のことを指しているのなら――？

探す範囲はごく限られてくる。それこそ、イヴァー・オアーゼの人に聞けば、簡単に情報を得られるかもしれないと期待していた。

その夜。イヴァー・オアーゼの手前で野営することとなり、安全な場所に護衛兵が馬を止め、薪を燃やして夕食をご馳走してくれた。

砂漠の中、夕食を食べながら見上げた夜空は、四方を砂漠に囲まれ街の明かりは届かず、吸い込まれるようなダークブルーの星空が広がっていて、ティアナは息を飲む。

「綺麗……」

思わずもらした言葉に、一人の護衛兵が親切に教えてくれる。

「ハセキ様、イヴァー・オアーゼの星空は、もっと綺麗ですよ」

話を聞くと、オスヴァルという若い護衛兵は、以前にもイヴァー・オアーゼに行ったことがあるという。

「おそらくその経験を買って、スルタンは私をハセキ様の護衛の任をお任せくださったのだと思います」

礼儀正しく話す青年に、ティアナもフィネも微笑んで、夕食のおかゆをすくった。

昨日まではすぐ側で護衛してもらっているにも関わらずほとんど話すこと機会がなかったが、砂漠の中では食堂もなく、野営の経験を生かして護衛兵が調理をしてくれ、すぐ横に並んで食事をしている。

はじめは、私達は後で食べますと言った護衛兵をまとめる少佐に、ティアナはご飯は大勢で食べた方が美味しいからと、一緒に食べる

ように誘った。その気さくな雰囲気に、オスヴァルは思わずティアナに声をかけてしまい、今頃になって、ハセキに話しかけてしまって恐れ多いと、体を緊張で固くした。そんなオスヴァルに。

「そんなに畏まらないですください。私はお忍びです、ハセキではなく一人の我がままな娘だと思って下さい」

ふっくらとしたさくらんぼ色の唇に人差し指を当てて微笑んだティアナ。

「それよりも、イヴァー・オアーゼには行ったことがあるとおっしゃっていましたよね？　そのあたりで、白い大きな花を咲かせるサボテンを知りませんか？」

さりげなく月下星珠の情報を探りだそうとしたが、艶っぽく微笑んだティアナに見とれていたオスヴァルは、呆けたようにティアナを見つめ、それから、はっとする。

「白い大きな花を咲かせるサボテンですか……？　イヴァー・オアーゼの周りにサボテンはたくさん生えていましたが、花を咲かせているのは見たことがないですね」

「そうですか」

そんなに簡単に見つかるとは思っていなかったティアナは、残念がる内心を隠して気にしていない風を装って答える。

それから他愛もない話をしながら夕食を済ませ、睡眠をとるためにフィネとティアナは馬車に戻った。

しばらくしてフィネの規則正しい寝息が聞こえてきて、ティアナは静かに馬車を抜け出した。馬車の側で片膝を立てて毛布にくるまっている護衛兵に気づかれないように馬車から離れ、砂漠を進む。

夜の砂漠は昼間と違い、吐く息が白くなるほど気温が下がっていた。
ティアナはマントの前を掻き合わせ、砂に足を取られないように注意して歩いた。馬車の側に焚いた炎からだいぶ離れたところまで行き、ゆっくりと砂の上に腰を下ろす。そのまま寝転がるように背をつけて、天を仰ぎ、視界いっぱいに広がる星空にため息をもらす。
歌うような星の瞬きはあまりに美しくて、いつまでもこうして見ていたい気分にさせられる。
星空を見上げたことがないわけではないが、こんなにもあざやかな星の輝きを見るのは初めてのように感じて、夕食の時に見た星空をもう一度見たくて、ティアナは馬車を抜け出し、明かりの届かない場所までやってきたのだった。

「綺麗……」

心からそう思って感嘆し、吸い込まれるように天に両手を伸ばす。
まるで降ってくるように強く輝く星に手が届きそうで手を伸ばして、やっぱり届かないことにティアナは苦笑する。
ここでもこんなに綺麗に星が見えるのに、イヴァー・オアーゼの星空はもっと綺麗だと言ったオスヴァルの言葉を思い出して、ティアナは焦がれるような思いに胸を熱くした。
願い事が叶う星降りの丘――イヴァー・オアーゼ。そこに自分の記憶の手がかりがあるような予感がしていたティアナは、強くあざやかな輝きを放つ星空を見て、予感が期待に変わる。
明日はいよいよイヴァー・オアーゼ――
はやる思いにティアナはなかなか寝つけそうになくて、ぎゅっと強く瞼を閉じ、胸元で拳を握りしめた。

第３４話　砂漠の華

「ハセキ様っ！　このようなところで何をされているんですか！？」

切羽詰まったオスヴァルの声に、ティアナはうとうとしていた目をはっと開けて、砂の上に横たえていた身をわずかに起こす。

「夜の砂漠は冷えますから、どうか馬車の中でお休みくださいっ」

星空を見ながらうたた寝をしてしまったことに気づいたティアナは頬を染め、促されるまま大人しく馬車へと戻った。

翌日。太陽が中天を過ぎた頃、ティアナを乗せた馬車はイヴァー・オアーゼに辿り着いた。

もうすぐだというオスヴァルの声に、馬車の窓を開け放ったティアナは、ある境界から地面を覆う砂がキラキラと眩しいほど太陽の光を反射して輝いているのを見て、驚きの声を上げる。

「まあ、まるで海の中に入っていくみたい……」

颯爽と駆ける馬車が水面のように輝く砂地に入っていく。輝く砂漠をしばらく進み、馬のいななきと共に止まった馬車から降りたティアナは、すぐに足元の砂を手にとり、その形が星であることを見て、翠の瞳をふわりと細めて微笑む。

「アデライーデ様、本当に星の形をしていますわっ！」

同じく地面にしゃがみ込んで砂を手にしたフィネが、興奮気味に言って、ティアナを見上げた。

「すごいですね……」

うっとりと星の砂に見とれたフィネに、ティアナは頷き返し、手のひら大の小瓶に星の砂をさらさらと流し入れ、コルクの蓋をしてから胸元に大事にしまった。

馬車が止まった場所のすぐ先には、青々とした葉をつけた木が生い茂り、その近くには傘のような屋根の丸い建物がいくつか立っていた。

建物の方へと近づいていくと、オアシスの全体が見渡せた。

中央には不思議な形の池があり、それを囲むように円状に建物と木々が生え、その向こうに高くそびえる砂丘が見えた。砂丘を見て、なぜだか急に胸が高鳴りだしたティアナだったが、フィネに声をかけられてなんでもない風を装う。

宿に荷物を運びいれるまでの間、イヴァー・オアーゼの中をぐるりと一周して見ることになり、フィネと護衛としてオスヴァルが同行することになった。

イヴァー・オアーゼは昼間だというのに、通ってきた砂漠と違い、さぁーっと涼やかな風が吹き抜けて暑さをあまり感じなかった。

池を囲むように立てられた建物の一部はイヴァー・オアーゼの住宅で、ほとんどが星砂漠を横断する商人や旅団、観光客の宿だった。中にはお店もあり、ロ国よりさらに南に位置する連合国の特産品や、イヴァー・オアーゼの辺りでとれるサボテンの砂糖漬けなどが売られていた。

ティアナは観光しながら、イヴァー・オアーゼの住人や商人にそれとなく月下星珠のことを聞いてみたが。

「サボテンは近くにたくさん生えてるが、大きな花を咲かせるサボテンは見たことないなぁ～」
「ここ数年、ずっとサボテンは花をつけんよ」
「星なら、明晩あたりからたくさん流れるがなぁ」

そんなかんじで、収穫はゼロだった。
しかし、ティアナが何度もサボテンの花のことを尋ねているのを側で聞いていたオスヴァルは、ティアナがその花を探していることに気づき、昨夜、自分も同じことを尋ねられてことを思い出す。池のほとりに腰かけたティアナに尋ねる。

「ハセキ様、あっ、アデライーデ様……」

慌てて言い直したオスヴァルをくすりと仰ぎ見たティアナの翠の瞳は憂いを帯びていた。

「白い大きな花を咲かせるサボテン……をお探しなんですか？」

尋ねられたティアナは、わずかに目を見開き、それから眉尻を下げて困ったように首をかしげる。
ティアナはどう説明しようか迷って、それから差し支えのない部分だけを説明する。

「つまり、アデライーデ様はそのサボテンを見つけるためにイヴァー・オアーゼにいらっしゃったのですか？」

顎に手をあてて黙りこんだオスヴァルの横で、フィネが大げさな身振りで口元に手を当てる。

「まあ、私はてっきり、スルタンとの恋の成就を願うためだとばか

り思っていました。あんなにスルタンに愛されていますのに、星に願いをかけるなんて可愛らしい方――と密かに思っていましたわ」

まさか、フィネにまで誤解されているとは思わなかったティアナは脱力して肩を落とし、ここはちゃんと誤解はといておかなくてはと、コホンと咳払いする。

だが、ティアナが口を開こうとした時、それまでずっと黙っていたオスヴァルがゆっくりと口を開いた。

「砂漠の華……」

オスヴァルは悩ましげに眉を寄せて、澄んだ瞳で空を見据える。

「イヴァー・オアーゼには古くからの言い伝えがあります、それが確か白い花を咲かせるサボテンがどうとか……」

「本当ですかっ！？」

思いがけない手がかりに、ぱっと顔を輝かせたティアナを、困ったようにオスヴァルは見下ろした。

「ええ。ですが、内容が思い出せなくて……」

「そうですか……」

分かるほど気落ちした様子のティアナに、オスヴァルは慌てて付け加える。

「でもっ、この話はイヴァー・オアーゼの長老様にお聞きしたので、長老様に尋ねれば分かるかと……」

オスヴァルが元気づけるように勢い込んで言った時、三人のもと

に少佐と護衛兵の一人が近づいてきた。がっしりとした体格で礼儀正しく頭を下げた少佐をティアナは振り仰ぐ。

「アデライーデ様、宿の準備が整いました。それから……長老様がぜひご挨拶をしたいと申されておりますが」

タイミング良く長老に会えることになり、ティアナはごくんと喉を鳴らし、優雅に立ち上がる。

「長老様にお会いしますわ」

「おお、砂漠の華の言い伝えを聞きたいと？」

挨拶をおえたティアナは、さっそく長老に尋ねてみる。

小柄な体系に白くふさふさの口髭を揺らし、白くたれた眉毛がかかった奥で栗色の瞳がまばゆい光を宿す。

「昔、まだこの辺りのサボテンが花をたくさんつけていた頃、一組夫婦が住んでいた。仲睦まじい夫婦だったが、ある日、女が謎の病に倒れた。男は近くに咲いていたサボテンの花を摘んでは池に投げ込み、月に願掛けをした『どうか妻の病気を治してほしい』と――一日と空けず願い続け九十九日が経った夜、ついにあたりのサボテンの花はすべて摘み取ってしまって願いをかける花がなくなってしまった。みかねた月の精霊が、池に映った月から姿を現した。『私の力で花を咲かせましょう。この蕾は白き月が満ちる頃、満開の華を咲かせる。その花の蜜を飲ませなさい。さすれば、万の病は治るでしょう』男は言われた通りに、サボテンに付いた一つの蕾を大切に育て、花開いた白い花からとった蜜を飲ませた。するとどうだ、女の病はたちまち治ってしまった。しかし――その噂を聞いた者が

またも砂漠の華をすべて摘み取ってしまい、怒った月の精霊はこの辺り一帯のサボテンに花を咲かせないようにしてしまった――という話じゃ」

「それで、この辺りのサボテンは花を咲かせないのですね」

長老の話を聞き終えたティアナは納得して俯く。

おそらくこの砂漠の華の言い伝えが脚色されてサボテンの花の蜜を食べると忘れた記憶を思い出すことができるという言い伝えが魔女の間に伝わっていたのだろう。

予想どおり、月下星珠がイヴァー・オアーゼの近くに生えていることは分かったが、花をつけることはないと聞いて、絶望的な気分だった。

やっと確かな手掛かりをつかめたと思ったら、花が咲かないだなんて――

今度こそ記憶を取り戻せると思って希望に胸を膨らませていただけに、動揺を隠せなかった。

黙りこんでしまったティアナを眉毛の下の栗色の瞳を細めて見つめた長老は、髭をさすりながら、ほっほっほっと陽気な声で笑う。

「じゃがな、ときたま、精霊の気まぐれで大きな白い花を咲かせるサボテンがある。本当に砂漠の華を必要としている者が現れる時、月の精霊が花を咲かせるという。そのサボテンがどこにあるのか場所は誰も知らん――というがな、わしは知っておる。手がかりは星の砂の降る丘、満月の夜、流れ星――じゃ」

ほくほくと好々爺ふうに微笑んだ長老の瞳が一瞬強い輝きを放ったのをティアナは見逃さなかった。

まるで見透かされたような瞳で見つめられて、ティアナはぎゅっと拳を握りしめる。それからお礼を言って、用意された宿へと向かった。

長老が言った手がかりがなにを示しているのか――
ティアナは分かっていて、尋ねずに長老の部屋を出てきた。

『星の砂の降る丘、満月の夜、恋人同士で流れ星を見ると恋が成就する』

その言い伝えがもともとは、長老が語って聞かせた砂漠の華の言い伝えだったなら――そう考えればなにもかもの辻褄が合う。
言い伝えの中で月の精霊が言った白き月が満ちる頃――というのは満月のこと、星の降る夜――流れ星。
さっき、商人が明日の夜からしばらく星が流れると言っていたのを思い出す。
流れ星の時期と重なったのはたまたまだが、月下星珠の花開く条件がすべて整っている偶然の一致に、ティアナの胸がいっきに高鳴りだす。
明日の夜――星降る満月の夜に、月下星珠の花は咲く――
その場所は星降りの丘――イヴァー・オアーゼの向こうに見えた砂丘、その先だとティアナは確信した。
確かめに行こう――そう思ったら、考えるよりも先に体が動き出していた。
少し離れた場所で眠るフィネを起こさないように布団から抜け出し、護衛兵がいる表の入り口ではなく、裏からこっそりと忍び出る。
空には、ふっくらと太った月がもう少しで満ちようとしていた。

第３４話　砂漠の華（後書き）

次話、ついにあの人が……！

第35話　月のキセキ

向こう側が見えないほど高くそびえ立つ砂丘をティアナはゆっくりと登り始めた。
流れ星が見えるのは明晩からということで、この時間、砂丘を登っているのはティアナただ一人だけだった。
イヴァー・オアーゼから出るわずかな光と月明かりの中、ティアナは黙々と砂の丘を登り続けた。途中、靴の中にどんどん砂が入ってきてしまい、ティアナは靴を脱ぎ手に持ち、手を地面につく。バランスを失えば、転げ落ちてしまいそうな急斜面をどうにか登ってきり、振り返ったティアナは、きらめくイヴァー・オアーゼを見て息をのむ。
月の雫がこぼれたように星の砂が輝き、あたりを幻想的に包み込んでいた。まるで星が降ってきたようで、ティアナは思わず天を仰ぎみて、砂に足を取られてバランスを失って。

「きゃあ――……」

ざざっと砂のこすれる音がして、バランスを失ったティアナは砂の坂を転げ落ちてしまった。
ドサドサドサ……
砂埃がおさまり、ティアナは嘆息をもらす。
せっかく星降りの丘の頂上まで登ったのに、また登りなおさなければならない――そう思ったティアナは、あたりを見回して様子がおかしい事に気づく。
イヴァー・オアーゼに生い茂っているはずの木々も建物もなく、ただ時折月の光を反射する砂漠が続くだけだった。

横たわるティアナのすぐ側に背の高いサボテンが生え、大きな白い蕾が一つ、今にも咲きそうに膨らんでいた。
イヴァー・オアーゼ側ではなく、丘の反対側に落ちてしまった――？
ティアナはすぐに自分の状況を把握して、それからゆっくり身を起こそうとして、砂を触ったはずの手の感触が温かくて、自分がなにかの上に乗っていることに気づいて慌てて飛び起きる。

「あっ……」

そこには、星空を切り取ったようなダークブルーのマントを羽織った男が横たわっていた。
砂丘を転げ落ちたティアナは、丘の下にいた男の上に落ちてしまったのだった。
少し癖のある銀髪を風に揺らし、澄んだ空のような瞳は切れ長で、通った鼻筋、高い頬、気品に満ちた美しい顔立ちに、ティアナは思わず見とれてしまう。
男は乱れて顔にかかった髪を無造作に掻き上げ、前髪の奥の群青色の瞳をティアナに向け、瞠目する――

「ティ……アナ、様……」

その瞬間、ズキンっと激しい痛みがティアナの頭を襲い、眉間に皺を寄せて額に手を当てた。
耳鳴りがし、頭が割れそうに痛み、ティアナはその場にくずおれるようにしゃがみ込む。

「ティアナ様――っ」

そう呼んだ男は、ティアナに駆けよると、大きな手でティアナを

包み込むように、強く抱きしめた。
ズキズキと痛む頭を押さえて、ティアナは、かすむ視界を銀髪の男に向ける。
ずっと胸の中にいた愛しい面影にかかっていた靄がぱっと晴れて、ティアナは切ない声でつぶやく。
「レ、オン……ハルト……様……」
パチンと何かがはじけた音がして、ものすごい量の記憶がティアナの脳裏を襲う。そして、すべてのことを思い出したのだった――

※

時を遡って、十五日前――
ドルデスハンテ国の執務室でソファーに腰掛け、アウトゥルが持ってきた手紙に目を通していたレオンハルトは、その端正な顔立ちを青ざめさせた。
レオンハルトが手にしているのはイーザ国に戻ったジークベルトからの手紙で内容は次の様なものだった。
連日続く大雨でぬかるんだ道で馬車が傾き、侍女イザベルが落ちそうになったところをティアナが助け、その反動で氾濫した川に落ちてしまったこと。
すぐ側にいながらティアナを守れなかったことを悔やんだジークベルトの謝罪と、その後の捜索状況。
天候は回復し捜索の手を広げたが、オーテル川沿いは一通り探しつくし、未だに見つからない。おそらくオーテル川の下流――海の方へ流されたのではないか、というものだった。
ティアナの行方の手がかりが書かれているのではないかと期待し

ていたレオンハルトは、目に見えて落胆し、静かに脇の小卓に手紙を置いた。
ソファーの背もたれに体を預け、仰向いてぎゅっとつぶった目頭を押さえる。
カチャリという食器の音に仰向いたまま目を開けたレオンハルトは、小卓にティア―カップを置いたアウトゥルと視線があう。

「レオンハルト様、紅茶でも飲みながらお読みになられてはいかがですか？」
「ああ……」

鼻先に甘酸っぱい香りが漂い、身を起こしてティーカップに手を伸ばし紅茶を一口含んだレオンハルトは、眉根を寄せてティーカップを置いた。
それから、小卓の上に置かれた手紙の中から、エリクの手紙を引きぬいて開封した。そこには思いもかけないことが書かれていた――
手紙に目を通したレオンハルトは、急くように執務室を出て行ってしまう。
残されたアウトゥルは、ソファーの側に散らばった手紙をかき集めた時、その内容を見てしまって目をみはった。
エリクの手紙には、ドレデスハンテ国以外でも起っている異常気象について詳細に書かれていた。何か起りつつあることを察して、アウトゥルは背筋を震わせた。
それから、各国が協力し合って異常気象に対策をたてることが提案され、まず、ロ国の星砂漠に行くことを勧める旨が書かれていた。
ロ国――それはドルデスハンテ国の東に位置する水路と砂漠の国。ドルデスハンテ国とは海を隔てて隣接するため、ほとんど国交が行われていないが、北のドルデスハンテ国、西のエリダヌス国に次いだ大国で、貿易の盛んな国だった。
なぜ、あまり国交が行われていないロ国に行くことを勧めるのか

は定かではないが、ティアナが流されたオーテル川の河口、海の向こうにロ国はある。
ティアナがロ国にいる可能性は高かった――
だからレオンハルトは、各地の異常気象の調査と国交のために、ロ国に行くことを王に願い出た。
もともと、異常気象について調べていたレオンハルトは、すぐにロ国行きの任を任され、素早く王宮に残る侍従に指示を出し、アウトゥルとフェルディナントを供につれて王宮を飛び出したのだった。

ロ国に向う途中、各地に送った武官から情報を受け取り指示を出しながら南下し、海路からロ国へ入らずに、レオンハルトはまずイーザ国へと向かった。ジークベルトから直接聞きたいことがあったからで、イーザ国で異常気象が起こっていないかを確認した。
それから小国フルスへ入り、オーテル川を越えて陸路からロ国に入る。首都ワールパラストを素通りして星砂漠に向かい、イヴァー・オアーゼにレオンハルト一行が着いたのは二日前のことだった。
そこで、イヴァー・オアーゼの目の前にある砂丘の上で流れ星を見ると願い事が叶うという言い伝えを聞いたレオンハルトは、流れ星が見られるのは三日後だと言われたが、その前でも空を見上げていればもしかしたら見られるかもしれないと冗談で言った住人の言葉を真に受けて、昨晩も、その前の夜も、こうして星降りの丘へと登ってきていた。
願掛けでティアナが見つかるとは思わなかったが、そんなものにでもすがらなければならないほどレオンハルトは切羽詰まった状態で、ティアナの行方を掴めない情けない自分に辟易していた。
二日間、目を凝らして空を見上げたが流れ星を見ることは出来ず、それでもこりずに、アウトゥルとフェルディナントを宿屋に残し、今夜も一人星降りの丘に登ってきていたレオンハルトは、ふっと見下ろしたイヴァー・オアーゼの反対側に白い大きな蕾をつけたサボ

テンを見つけ、丘を降りてきていた。
イヴァー・オアーゼに来る途中の砂漠で、サボテンは何度も見かけたが、そのどれにも花はおろか蕾をつけているのすら見かけなかったレオンハルトは、惹かれるようにそのサボテンの側へと、丘を下った。
そのサボテンは、長身のレオンハルトが見上げるほど高く、太かった。その中間に月の光を受けて輝く大きな白い蕾があった。あまりに美しく、神秘的な輝きに触れてはいけないと本能的に悟ったレオンハルトは、ためらい、サボテンの側に腰をおろして星空を見つめていた。
なぜだか、もう少し待てば花が咲きそうな予感がして、どうしようもなく胸が高鳴って、その場を離れられなかった。
しばらく星空を見上げていたレオンハルトがそろそろ宿に戻ろうとした時。
ざざっと砂のこすれる音がして、目の前に砂の塊が落ちてきた。レオンハルトは咄嗟に身を庇いながらその場に伏せ、ドサドサドサっと砂が体の上に降り注ぎ、さらに重たい衝撃を感じて、小さなうめき声を上げた。
身動きが取れなくなったレオンハルトは、体の上から重量感がなくなったことに気づいて身を起こす。
乱れて顔にかかった髪を大きく後ろに掻き上げたレオンハルトは、自分の目の前にグレーのマントを羽織った少女が経っているのみ気づいて、目を大きく見開いた。
ずっと会いたいと願っていたティアナが、突然、目の前に現れて、レオンハルトは幻かと思う。
もう一月ほど消息の掴めなかったティアナが目の前に、別れた時と変わらない容姿で立っていて、レオンハルトは掠れた声で愛おしい名前を呼んだ。
「ティ……アナ、様……」

ティアナが、苦しそうに眉根を寄せてしゃがみ込むのを見て、レオンハルトは慌てて体を起こし駆けよる。

「ティアナ様――っ」

目の前にいるのが幻ではないことを確かめるように、強く腕の中に抱きしめる。

瞬間、辺りをほの白い光が包む。訝しげに光の方を見上げたレオンハルトは、さっきまで蕾だった白い花が開き、まばゆい花を咲かせていた。その花びらの一つから雫が滴って、レオンハルトの腕の中のティアナの元に降り注ぐ。

額に汗を浮かべ、苦しそうに目を細めてレオンハルトを見上げたティアナが切ない声をしぼりだす。

「レ、オン……ハルト……様……」

瞬間、それまで辛そうに頭を抱えていたティアナがふっと安らいだ息を吐き、儚い微笑みを浮かべる。

その胸元に、ネックレスの先についた涙型のスカイブルーが揺れて、レオンハルトは息をのむ。再会の約束の証に送ったネックレスをティアナがしていてくれたことに、目元をくしゃりと細め、愛しげに頬を染めた。

第３５話　月のキセキ（後書き）

３話以来の登場のレオンハルトです。
ここから頑張ってもらいます！

ランキングに参加しています。
「小説家になろう　勝手にランキング」ぽちっと押して頂けると嬉しいです（＾＾）

第３６話　走り星

すべてを思い出した――
私の本当の名前は――
ぼんやりとする思考の中で、確かに忘れていた記憶を取り戻したティアナは、群青色の瞳に甘やかなきらめきを浮かべて優しく自分を抱きしめてくれるレオンハルトを見上げ、自分の名を口にしようとした、その時。

「アデライーデっ！」

大地を切り裂くような叫びに、ティアナはぴくりとその肩を震わせる。声のした方を振り仰ぐと、砂丘の上、月明かりを背に浴びた人影がすごい勢いでこちらに向かって駆けてくるところだった。

「アデライーデ――っ」

ダリオは威圧的に呼ぶと同時に、ティアナの二の腕を掴んで強く引き寄せる。その腕の中に隠すように抱きしめると、砂の上に座ったレオンハルトを鋭い視線をキラッとひるがえした。

「お前は誰だ？　アデライーデに何をしていた――？」

突き刺すようなその眼差しの激しさに、ティアナは息を飲む。刃物をつきつけるような威圧感に、慌ててダリオに話しかける。

「ダリオ様、あの、違うんです。この方は……」

なにをどうやって説明しようか迷って、ティアナは開いた口を止める。
記憶を取り戻したものの、なぜ取り戻したのか理由は分からなくて、どう説明したらいいのか分からなかった。
口をつぐんだティアナを見て、ダリオは氷の瞳の鋭さをわずかに和らげる。
「執務を済ませ、急いで馬を駆ってイヴァー・オアーゼに来てみれば、寝所にお前の姿が見えなくて心配した」
ティアナの髪の中に顔をうずめたダリオは愛おしげにささやく。
「オスヴァルがもしかしたら砂丘にいるのではないかというから来てみれば――」
そこで言葉を切ったダリオはギラッと瞳に光を反射させて、一瞬、鋭くレオンハルトを睨み据える。
「こんなところで何をしていた、アデライーデ――？」
氷の瞳を鋭く光らせたダリオに、ティアナは背筋の凍るような威圧感を感じた。咄嗟に口を開こうとした時、レオンハルトが戸惑いがちな声がかけられる。
「アデライーデ……？　あなたはティアナ様では、ないのですか……？」
その言葉に、ダリオは氷の瞳を底からキラリと光らせた。

「アデライーデ……どういうことだ――？」

ダリオにまっすぐに見すえられたティアナは、ぎゅっと唇をかみしめ、意を決して口を開く。

「すべてを、思い出しました……」

ひどく掠れた声で言ったティアナは、自分を見つめるダリオは瞳の中に、一筋の憂いの影を見つけて、胸をつかれる。

『お前の事情は分かった。こちらでも何かお前の記憶の手がかりを見つけられるよう協力しよう。それまでここで自由に過ごすがよい。アデライーデ、お前はハレムの女ではない、私の客人としてここハレムに向かえよう』

記憶喪失だと話した時、そう言って微笑んだダリオを思い出して、切なく胸が締め付けられる。

そう、記憶を取り戻した今――自分がやらなければならないことを思い出した今、ティアナは国に戻らなければならなかった。

偽りの花嫁のティアナに対してダリオはとても親切にしてくれた。毎日必ず様子を見にきてくれて、時々、愛おしくその胸の中に抱きしめられて――

熱くなる胸を押さえ、震える喉を押さえた。

もう、ダリオの側に、いることは出来ない――

ティアナが口にしなくても、そのことに気づいているダリオは、ぎりっと奥歯を噛みしめて、斜め下を向く。その顔を苦渋に曇らせる。

誰もが口を閉ざし、その場に沈黙が落ちる。しばらくして、その沈黙を破ったのは、ザザァーっという砂が大量に落ちる音で、その音と一緒に男の悲鳴が聞こえる。

「うおっ、わぁ――……っ」

三人が立つ場所に砂と一緒に降ってきたのは――グレーのマントを羽織ったエマだった。

砂の上に転がり落ちたエマは、砂埃がおさまると同時にがばっと身を起こし、ダリオの元に詰め寄る。

「ダリオ様っ、いくら急いでいらっしゃるからと言って、私を置いていくなんて酷いじゃないですか！　だいたい一人で行ってしまわれては、護衛として供に来た私の立場がないんですよっ」

すごい剣幕でダリオに噛みつくエマを呆然と見つめていたティアナは、その視線と会ってしまって、エマはくっと片眉を大きく跳ねあげる。

「アデライーデ様っ！　あなた様がどうしてこのような場所に……。あー、もう、ダリオ様もアデライーデ様もご自分のお立場をよくお考えください。このような土地で夜中に供も連れずにふらふら歩きまわるなど、都と違って砂漠の夜は……」

まだまだ続きそうなエマの小言に、ダリオはうんざりしたようなため息をつき、片手を上げて制する。

「分かった、宿に戻る……。小言はそれから聞く」

不満顔でまだ何かぶつぶつと言っているエマを先頭に、ダリオ、ティアナ、そしてレオンハルトと続いて、砂丘を登り始めた。

※

未だに、一人、事態を飲みこめずに混乱する頭を抱えていたレオンハルトは、前を歩くティアナに思い切って声をかけたのだが。

振り返ったティアナの横顔に長い銀髪がふりかかって、繊細で儚く微笑んだその深い輝きを浮かべた瞳に一筋の憂いを見て、レオンハルトはわずかに喉をならして、あえぐように息を飲んだ。

何も聞いてはいけないような儚さに、レオンハルトはそれ以上言葉を続けられなくて。

目の前にいるのが、ティアナなのか、そうじゃないのか――不安を胸にかかえながら、黙って後に続いた。

※

突然、すべての記憶を思い出したティアナは自分のわずかな戸惑いに気を配っている場合ではなかった。

目の前には、なぜか星砂漠にいるドルデスハンテ国第一王子のレオンハルトと、ロ国スルタンのダリオ――

アデライーデと呼ばれたティアナを見て戸惑いの色を濃くしたレオンハルトに事情を説明したかったが、強く抱き寄せるダリオの不安が伝わってきて、ダリオを放ってレオンハルトの元に行くことは出来なかった。

記憶を失くしていた間、素性も分からないティアナに親切にしてくれたダリオに、何をおいてもまず事情を説明しなければならないと思った。

ダリオに置いていかれたらしく、不満をぶつけるエマに八つ当たりされつつも、ティアナは重たい空気を打ち破るように現れたエマ

に、感謝していた。

「さあ、宿にお戻りを――」

すごい剣幕のエマに促されて目の前にそびえるような砂丘を登り始めようとした時。

「ティアナ様……？」

戸惑いがちに後ろから声をかけられて振り返ると、レオンハルトの澄んだ美しい瞳があって、切なくて――

どうしてレオンハルトが星砂漠にいるのかは分からないが、まるで――

『今度は私があなたに会いに行きます』

その約束を果たすためにティアナの目の前に現れたように感じて、愛おしい気持ちが込み上げてくる。

ずっと忘れていた気持ちが、心の底から揺さぶられて、突き動かされて、勢いよく飛び出してきて、止めようもなく胸にあふれた。

レオンハルト様が好き――

それと同時に、刃物のような鋭い瞳の中に一瞬垣間見た、ダリオの寂しさを思い出して、ティアナはレオンハルトに浅く微笑んだ。

その時、レオンハルトの横、さっきまでティアナ達がいた場所に、あざやかに輝く白い花を見つけて動きを止める。

さっきまでは蕾だったのに、今はまばゆい大輪の白い花を咲かせていた。

まさか花の蜜を飲んだ――？

確信はないが、そう考えれば記憶を取り戻したことへの説明がつく。

だけど、流れ星は？　確か、明晩からと聞いていたはずだが――
そう思って空を見上げようとした時。
キラッ――……
一筋の輝きが空を走り抜ける。美しく、どこか儚い輝きを放って、空に溶けていった。
「流れ星……」
そう囁いたのは、レオンハルトとダリオとが同時だった。

第３６話　走り星（後書き）

ついにレオンハルトとダリオの対面……次章、必見です！

感想いただけると嬉しいです。

第37話　君を愛す

アデライーデが王宮を発ってから二日後。執務を済ませたダリオは、護衛を連れていくようにと引き留める臣下を氷の瞳で一蹴し、エマのみを連れて足早に厩へと向かった。

執務室を出る直前、南と北の国に放っていた密偵からの報告を受け取ったダリオは、一刻も早くイヴァー・オアーゼに向かい、アデライーデに確かめたいことがあった。

そのためには物々しい護衛などつけず、単騎、馬を駆っていますぐに王都を飛び出したかったが、護衛をつけろとうるさく言う臣下たちの手前、口実にエマを護衛として連れていくと言ったのだが――

考え深く、聡明だと自負していたダリオは、とんでもないミスをしていた。

それは王宮を出てすぐのこと。疾走する馬から後ろを振り返って見れば、後に続いているはずのエマの姿が見えない……

若きスルタンの優秀な側近であるエマニエルは、文官でありながら馬の扱いにも慣れ、すごい速さで馬を駆るダリオにもついていける数少ない人間だが――

「私は星砂漠に赴くのは初めてなんですよ、分かっていますかっ」

厩で眉根を寄せて呟いたエマの言葉を思いだして、慌ててたずなを引く。

エマは方向音痴だと知る者は少ない。何度か通った場所ならば大丈夫らしいが、初めての場所では必ずと言っていいほど迷う。普段なら、ダリオのたずな裁きにもついて来れるエマの姿が見えないのは迷っているからだった。

引き返したダリオは無事にエマを見つけ、エマから自分が見えるようにつかず離れずの距離を保ち、急く気持ちを押さえて馬を走らせた。
本当ならば、もっと速く走らせ、今頃は――
そんなじれんまを押さえていたダリオも、馬を走らせ二日。前方にイヴァー・オアーゼの木々が見えると一気に馬の速度を上げ、必死にダリオの後を追うエマを置いて行ってしまった。
ただひたすらに、アデライーデに早く会いたいと募る思いのまま駆け、見えない姿を探し、足を砂にとられながらも砂丘を全速力で登りきった。そこでダリオは、砂丘の反対側で、見知らぬ男に抱きしめられたアデライーデを見つけ、針のようにギリッと瞳を光らせた。

「アデライーデっ！」

考えるよりも先に、ダリオは鋭く叫ぶと、砂丘をすごい勢いで滑り降りた。

「アデライーデ――っ」

ダリオはもう一度、威圧的に呼ぶと同時にアデライーデの二の腕を掴んで強く自分の方へ引き寄せた。その腕の中に隠すように抱きしめると、砂の上に座り、先程までアデライーデを抱きしめていた銀髪の男に鋭い視線を向けた。
そして違和感に気づく。男が、アデライーデのことを知らぬ名で呼んでいる事に――
ダリオはズキンと胸の奥から鈍い痛みが広がるのを感じながら、アデライーデを見つめ。

「すべてを、思い出しました……」

アデライーデのひどく掠れた声に、ダリオは瞳の中に憂いの影を落とす。
ずっとアデライーデが記憶を取り戻したがっていたことは知っている。国に帰りたがっていることも知っている。ハレムにいるのは、ダリオのハセキとして側にいてくれるのは、記憶を思い出すまでの間だということも――
初めから美しい銀髪が気に入っていた。強い意思を宿す翠の瞳、誰もが恐れてまっすぐに見ようとしない自分の瞳を初めからまっすぐに見つめてきたあの瞳が気に入っていた。アデライーデに会うためにいつもは馬鹿にしているハレム通いも毎日欠かさず足を向けた。彼女の顔を見るだけでその日の疲れが吹き飛ぶ。彼女の柔らかい肌に触れれば、もっと触れたいと思ってしまう。
自分の気持ちを自覚した時から、何度となく心が愛しく締め付けられた。
密偵からの報告で、アデライーデが南の国の王女かもしれないと情報を得てからは、そのことで頭が一杯だった。
一刻も早く確かめたくて。そして、記憶が戻っても、ずっと側にいてほしいと願った。だけど。
あざやかな光を浮かび上がらせて自分を見つめるアデライーデの瞳が、郷愁に切なく彩られていて、ダリオはぎりっと奥歯を噛みしめて斜め下を向いた。
愛しているからこそ――アデライーデの幸せを願わずにはいられなくて、何も言えなくて、悲痛に顔を歪めた。
ただ、時間が早く過ぎてしまえばいいと思っていた時、エマの乱入にダリオは内心ほっと溜息をもらした。
すごい剣幕でダリオに噛みつくエマを、ダリオは内心を隠して適当にあしらい、宿屋に戻るべく砂丘を登り始めた。
砂丘を半分ほど登った時、ふっと仰ぎ見た空に、星が奇跡を描きながら空を走り抜けた。

「流れ星……」

そう囁いたダリオの声に重なって男もつぶやいたことに気づいたダリオは振り向く。

アデライーデは男の方を見て、二人で見上げるように空を見ていた。ダリオの脳裏に星降りの丘の言い伝えがよぎり、その瞳をギリッと光らせて、いまいましそうに舌打ちした。

宿屋の自分の部屋に戻ったダリオは、ティアナの身を案じたフィネとオスヴァルに無事を伝えると、人払いをした。

室内には、中央に置かれた応接セットのソファーにダリオとアデライーデが向かいあって座り、その側の壁際にエマが、入り口に近い場所に男が立っていた。

ダリオを見つけた時は、男の存在に気づいていなかったエマは、いつのまにか一緒にいる男を横目でちらりと見つめ、ダリオが追い出さないのなら、なにか関係がある人物なのだろうと察して、視線をソファーに座る二人に戻した。

ソファーに座ってから、緊迫した空気のまま一言も話さずに時が過ぎ、ふっと視線を上げたアデライーデがゆっくりと口を開いた。

「私の名は、ティアナ・ローゼマリー・イーザと申します。ここロ国より南に位置する小国イーザの第一王女です。北のドルデスハンテ国からの帰り道、連日の大雨でぬかるんだオーテル川沿いの街道で馬車が転倒し、川に投げ出されて――……」

その時のことを鮮明に思い出したアデライーデ――ティアナは眉間に皺を刻む。

「海でアスワドに拾われたというわけか……」

途切れさせた言葉を引きとったダリオは、広げた足の上で組んだ両手をぎゅっとにぎりしめる。

予想どおりの身元に、それほど心が動揺することはなかった。

確かにここ最近、西の国境辺りで大雨が続いているという報告を受けている。その影響か、都を無数にめぐる水路の水が増していることも報告を受け、その対策をとっているところだった。

それよりも、ダリオが気になるのは入り口の側に立つ男。おそらくティアナの素性を知る者――

少し癖のある、ティアナよりも暗めだが銀の輝きを放つ髪は肩よりも少し長く、澄んだ切れ長の瞳は空を思わせる、精悍な顔つきの男は、上品なダークブルーのマントを羽織っていた。

ロ国に銀髪はいない。そもそも大陸全土で銀髪が珍しく、その中でもロ国と隣接する北のドルデスハンテ国と南のイーザ国にはわずかだが存在する――特に王族には多い。

ドルデスハンテ国の王族がなぜ星砂漠に――？

アデライーデとは一体どういう関係なのか――？

懸念と胸騒ぎに眉根をよせたダリオは、向かいに座るティアナがその瞳を不安に揺らしてこっちを見ていることに気づく。

ダリオは氷の瞳に複雑な光を宿し、その中に一筋の憂いを浮かべる。ゆっくりと目を閉じると、強い輝きを浮かべたその瞳をまっすぐティアナに向けた。

「――っ、アデライーデ、それでお前はこれからどうしたい？」

自分の知らない名で呼ぶのはなんだか知らない存在に感じそう食に障るから、口を開けたダリオは一度閉じ、あえてアデライーデと呼ぶことにした。

ティアナがどうしたいか――

そんなことは聞くまでもなく分かっていたが、本人の口から聞くまでは――とわずかな希望を胸に抱きしめた。

第３７話　君を愛す（後書き）

ランキングに参加しています。
「小説家になろう　勝手にランキング」ぽちっと押して頂けると嬉しいです（＾＾）

第３８話　再会の約束

まさか、どうしたいかと自分の意見を聞かれると思っていなかったティアナはしばし考え込み、それから、強い意志を宿した翠の瞳をキラリと輝かせる。

すっと顔を上げたティアナは凛として、あでやかさの中に気品が満ちていた。

「どうしても――会わなければならない人がいるのです。私は……国に帰ります」

皮肉気で非情な笑みを浮かべ、耳をくすぐるような甘く切ない声を私の姫君――そう自分を呼ぶ黒衣のマントを羽織った青年を思いだす。

記憶を失っている間も、幾度となくティアナの前に現れた森の魔法使いルードウィヒ。

彼に会わなければならなかった――

黙りこんだティアナを見たダリオは、氷の瞳に一瞬、苦しげな色を浮かべ、すぐに鋭い輝きを戻す。

「分かった――ハレムにいるのは記憶を取り戻すまでの約束だった。その後、アデライーデがどうするかは、お前の自由だ。だが、国に戻る前に一度王宮に戻ろう、一緒に……」

ティアナはダリオの申し出に、二つ返事で頷いた。

記憶を失った時に見につけていた自分の持ち物はラピスラズリのブレスレットとネックレスのみだが、ハレムに住んでいる間、わずかだが持ち物も増えていた。それを取りに戻り、お世話になったマティルデやニコラにも挨拶したかった。

「お前たちも今日着いたばかりだと聞いた、明日はゆっくり休んで、明後日の早朝に王宮に向けて出発する」

これで話は終わりと、自室に戻ろうとソファーを立ち上がったティアナの後ろで、それまでずっと忘れ去られたように会話に加わることもなかったレオンハルトがすっとダリオに近づく。

「レオンハルト様……？」

咄嗟のことにエマは反応しきれず、ティアナは瞠目し、ダリオは自分に近づいてきたレオンハルトを冴え凍る氷の瞳で睨み据えた。

ダリオの側で、床に片膝をついたレオンハルトは群青色の瞳に真剣な光を宿す。

「ロ国のスルタンとお見受け致します。お初にお目にかかります、私はドルデスハンテ国の第一王子、レオンハルト・エルヴィン・ドルデスハンテと申す者。どうしても、スルタンに申し上げたいことがあり、無礼を承知でまかり越しました」

まっすぐに自分の瞳を見据えるレオンハルトに、ダリオは無言で威圧的な視線を向ける。レオンハルトはそれを無言の了承だと解釈し、話を続けた。

「すでに各地で起る異常気象についてはご存じだと思いますが。集中豪雨、地震、風害、そして、時空の裂け目の出現――我が国だけ

にとどまらず、被害は各国に広がりつつある、もはや国内だけの問題ではなくなってきています。そこでドルデスハンテ国の代表として、ロ国のスルタンに条約のお願いに参りました」

レオンハルトの精悍な顔つき、強い志を秘めた群青色の瞳で見つめられたダリオは、ゆっくりと口を開く。

「断る――」

その言葉は冷たく、吐き捨てるように素っ気ない。

まさか即答で断られるとは思っていなかったレオンハルトは、瞳を大きく見張り、それから我に返って、食い下がる。

「どうかご検討下さい。各地で起こる異常気象はロ国の問題でも――」

しかし、ダリオはレオンハルトに氷の瞳で威圧に睨みつけるとソファーから立ち上がり、奥の寝室へと入って行ってしまった。

エマは一礼するとダリオの後を追って奥の部屋へと行ってしまい、その場にティアナとレオンハルトの二人が残された。

床に片膝をついていたレオンハルトはふっと視線を上げて、ティアナに苦渋の顔を向ける。

「どうやら、スルタンには嫌われてしまったようですね……」

どういう意味なのか分からずティアナはキョトンと首を傾げる。

それからソファーに座りなおして、先程までダリオが座っていた場所に座るようにレオンハルトに勧めた。

「レオンハルト様は、ダリオ様にお会いするためにロ国においでになられたのですか？」

翠の瞳にあざやかな光を浮かべたティアナがまっすぐにレオンハルトを見つめる。

「ええ、それが用件のような、口実のような……」

そう言って言葉を濁したレオンハルトは、きまり悪そうに苦笑する。それから空色の瞳に長い睫毛を伏せ、ため息のように続ける。

「ずっと――……ティアナ様が行方不明となられてからずっと身を案じておりました。まさかこのような異国の地でお会いすることが出来るとは思わず……だけど、ご無事な様子で安心いたしました」

レオンハルトの澄んだ空色の瞳に甘やかな光をきらめかせて見つめられ、ティアナはきゅっと締め付けられる胸を押さえながら、行方不明になっていた間の出来事を話して聞かせた――

「――そうでしたか、記憶喪失になったところをスルタンに助けられてハレムに……」

事情を聞いて納得したレオンハルトはふっと、それまでの緊張の色を解きほぐす。

「ええ、港でお会いした時はまさかスルタンだとは思わず、頼る者もいなかったのでお世話になることになったのです。記憶がない間も――」

そこで言葉を切ったティアナはわずかに頬をそめて。

「このラピスラズリのネックレスを見るたびに、とても愛おしくて大切な気持ちでいっぱいになって、早く記憶を取り戻して国に戻らなければと思いました。覚えていなくても、心のどこかで、レオンハルト様との約束を心のよりどころでした」

ふわりとはにかみ、けぶる睫毛を落としたティアナの表情に、レオンハルトはぎゅっと胸を締め付けられる。

ふっと視線を上げたティアナとレオンハルトの視線が絡み合い、甘やかな空気が流れる。

ティアナが再会の約束を覚えていてくれたことに、会えたことを喜んでくれることに、どうしようもなく愛おしい気持ちが溢れてくる。

レオンハルトも、どれほどティアナに会いたいと思ったことか――焦がれる思いのまま、群青色の瞳に甘やかな輝きを宿したレオンハルトが、ティアナの方へと腕を伸ばした時。

ガタンッ――

隣室からの物音に、あとわずかでティアナに触れそうだった手を慌てて引っこめる。

ここがスルタンの寝室に隣接するサロンだったことを思い出したレオンハルトは、すっとティアナから視線を斜めにそらし、わざとらしい咳払いをする。

「あー……、イーザ国の王宮に早馬で知らせを送りますか？　国王もジークベルト殿も、ティアナ様のからの安否を知らせを待ちわびているでしょう」

「えっ……、ええ、はい。お願いいたします」

ティアナはつられるようにぎこちなく答える。
ソファーから立ち上がったレオンハルトは、ゆっくりとティアナの横に周り、優雅に腰をおる。
「それでは私は部屋に戻り、イーザ国への使者を立てます。ティアナ様は一度、ロ国の王宮に行かれてから、国に戻られるのですよね」
確かめるように尋ねられて、ティアナはこくんと首を縦に振る。
「はい」
「私は明日、一足先にイヴァー・オアーゼを発ちますが、また、すぐにお会いすることになるでしょうね」
そう言って、ふわりと薫るような甘い微笑みを浮かべたレオンハルトは、ソファーに座ったティアナの膝の上に並べられている手をすっと引き寄せ、指先に指先を絡め、そこに口づけを落とした。
ティアナは頬をさくら色に染め、レオンハルトは優雅な足取りで部屋を後にした。

※

パタンッ――とサロンから寝室に入り扉を閉めたダリオは、ぎらぎらと氷の瞳に苛立ちを滲ませて、窓辺に置かれた椅子に乱暴に腰かける。
星降りの丘でアデライーデと一緒にいた男の髪色が銀髪なのを見た時から、胸騒ぎに頭がどうにかなりそうだった。
王宮を出る前に北の密偵より、ドルデスハンテ国の第一王子とイーザ国の姫との婚約が内々に勧めている――という情報を聞かされ

ていたダリオは、ただ銀髪の男が北の国の者でなければいいと願った。それと同時に、確信に近いものを感じてもいた。
婚約が国同士の政略的なものかもしれない。そう思いながらも、星降りの丘で流れ星を見上げた二人の後ろ姿を見て、胸が切なく、張り裂けそうな心地だった。
その上、アデライーデは記憶を取り戻し、国に帰りたいと言った――
ずっと側にいてほしいと願いながらも、アデライーデ自身の幸せを願わずにはいられなかったダリオは、引き止める言葉を言うことが出来なかった。
だから、男が声をかけてきた時、予想通りとはいえドルデスハンテ国の王子――しかも第一王子と聞いて、ダリオは持ち合わせていた矜持で平静を装いながら、苛立ちと焦りに見えないところで、爪が手のひらに食い込むほど強く拳を握りしめた。
自分が愛おしく呼んでいたアデライーデがイーザ国のティアナ姫で、その婚約者が目の前に現れて――敵意をぶつけずにはいられなかった。

まっすぐに自分を見つめる澄んだ空色の瞳を思い出して、ダリオはぎりっと奥歯を噛みしめ、側に置いてあった小卓を蹴りとばした。
自分を見つめたあの瞳が、愛おしいアデライーデの強い意志を宿した瞳と重なって、行き場のない苛立ちに、余計いらいらとした。
レオンハルトの言う通り、西に隣接するフルス国との国境沿いで大雨が続き、その影響がロ国にも出ている。都を無数にめぐる水路の水が増して水害の報告が後を絶たない。そうかと思えば、砂漠に近い場所では干ばつの被害が出ていた。その対策のため、ここしばらくは忙しく執務に追われ、星砂漠へとアデライーデを先に行かせなければならなかったのだ。

『ドルデスハンテ国の代表として、ロ国のスルタンに条約のお願いに参りました』

その提案を、私情で一蹴してしまったが、ダリオは今更ながら後悔していた。

アデライーデと婚約者であるレオンハルトのことは気に入らない。だが、八方手を尽くしても被害報告の減らない異常気象に、ダリオはもう打つ手がなくなっていた。

自分一人の力で出来ることの限界に立たされて、これまで他国との国交をほとんど行っていなかったロ国のスルタンとして、他国の協力が必要だった。

そう考えて、自分が冷酷非情のスルタンの仮面をかぶりながら、私情をはさみ国益を考えもせず、国同士の話し合いに応じなかった。幼稚で、アデライーデを愛するただ一人の男としてレオンハルトに接していたことに気づいてしまう。それに対して、レオンハルトが国の代表として自分に接していたことも――

大きな敗北感を味わい、ダリオはぎりりと奥歯を噛みしめた。その瞳には、嫉妬の炎がめらめらと燃えていた。

第３９話　奪われる心

部屋に戻ったティアナは、ドキドキと高鳴る胸元を両手で押され、ふぅーっと小さなため息を漏らした。
記憶を取り戻し、レオンハルトにも会うことが出来て嬉しいはずなのに、なぜだか素直に喜んでいてはいけないような複雑な気持ちだった。
なにか恐ろしいことでも起きそうな嫌な予感が胸に渦巻き、落ち着かなかった。そう、国境で雨雲を見た時に感じた胸騒ぎに似たものを感じて、ティアナはきゅっと唇をかみしめた。

翌朝、一足先にイヴァー・オアーゼを発つと言っていたレオンハルトとその侍従が挨拶にみえ、ティアナは手短に別れをのべる。
すでに昨夜、イーザ国に使いの者を出したと聞いて、レオンハルトの気遣いにティアナは胸に温かな気持ちが満たされた。
それから、朝食をダリオと一緒にとるためにダリオのサロンに向かったティアナは、部屋のソファーにどかりと腰掛け、不機嫌そうに眉根に深い皺を刻み、氷の瞳をギラギラと鋭く光らせているダリオを見て目を見張る。
昨夜、ダリオに記憶を取り戻したと話した時は物腰やわらかく優しげに瞳を細めていたが、最後に見たのはレオンハルトに威圧的な瞳を向けて去っていくダリオだった。
ダリオがまとう、触れた者を見境なく切り裂いていくような尋常じゃない威圧的な雰囲気に、ティアナは一瞬気圧し、それから、ダリオが威圧的なのはいつものことかと思い直す。だが。
ティアナに気づいたダリオが、斜めに見すえた瞳をふっと和ませ、

直後、ギラギラとたぎる熱を帯びたのを見てしまい、胸をつかれる。
胸に抱えた激情を、押さえようとして押さえられず――その苦悩に必死に抗おうとしているように見えて、ティアナは不安に瞳を揺らしエマに視線を向けた。
その視線を受けたエマは、困ったように眉根をよせ、こくんと頷き返す。
次々と朝食の運ばれるダイニングテーブルについたティアナに近寄ったエマは、その耳元に小声で囁く。

「ダリオ様は昨夜一睡もしておりません……何かずっと、考え深げに窓辺に座っていました」

エマ自身、レオンハルトとの対面を見ていて、ダリオの心情は理解できた。だがそれだけが原因で、睨むように夜空を見上げていたとは思えなかった。

「そうですか……」

ダリオの様子がやはりおかしい事にティアナは眉根を寄せ、だけどその理由に全く思い当たらずに肩を落とす。
短い間とはいえ、ダリオの側にいて自分はずっと助けられていたのに、ダリオが悩んでいる時に何も出来ない自分が歯がゆかった。
何を悩んでいるか問うことも憚られるような鋭い雰囲気に、ティアナは一言も口を開けないまま、朝食が終わってしまった。
ちらりと向かいに座るダリオに視線を向け、長い睫毛の落とす影の中に憂いを見つけて、心が痛んだ。
だけど、何と声をかけていいのか分からず、仕方なく席を立とうとしたティアナは、ぐいっと力強く腕を引かれて、目を瞬く。
見上げると、そこには無表情のダリオが腕を掴んでいた。
戸惑いに瞳を揺らすティアナの腕を無言で引き、二人掛けのソフ

ァーへと足を向けたダリオは、自分のすぐ横、ぴたりと体がくっつく距離にティアナを座らせ、長く逞しい腕の中に隠すように抱き寄せた。

突然の出来事に事態を掴めないティアナは目をぱちぱちと瞬きさせる。

時々、ダリオは無性にティアナを側に起きたがり、髪や頬に触れることは多かったが、こんなふうに大胆に体を寄り添わせるのは初めての出来事で、ティアナはどうしてらいいのか分からなくて戸惑ってしまう。

もし、こんな至近距離で、ダリオの魅惑的な瞳で見つめられでもしたら心臓が持ちそうもないと思ったティアナだったが、ダリオはティアナに視線を向けずに、壁際に立つエマへと視線を向ける。

「エマ、もうじき王宮からの使者が来るはずだ。着き次第すぐにここに通せ」

エマはわずかに眉根を寄せる。

「すぐに……ですか。よろしいのですか？」

てっきりティアナとの別れを惜しみ、二人きりで時間を過ごすのかと思っていたエマは、仕事をする気満々のダリオを訝しむ。だが、ダリオの表情が冷酷非情のスルタンの顔であることに気がついたエマは、それ以上食い下がらずに、一礼して部屋を出た。

気をきかせて部屋の外に出たエマは、間も空けず現れた使者に内心で舌打ちし、何事もないような無表情でサロンへと通した。

太陽が中天に登り、そして西の空に沈むまで、ダリオは結局、ティアナとの別れを惜しんで時を過ごすことはなかった。

使者から報告を受け、持って来させた執務にとりかかり、あちこちへと指令を出し、日が沈む直前に使者を王宮へと帰した。ただ――その間、ティアナをずっと側に置いたまま、一時も側から離そうとはしなかった。昼食もソファーに二人並んで座ったままとり、ティアナの腰へと回した腕を解くことはなかった。

さすがに夕食時はそれぞれの椅子へと座ったが、食べ終わるとすぐにティアナの腕を引き――当然のように自分の寝室へと連れ込んでしまった。

ちゃんとティアナの食事が終わるタイミングを待ってから腕を引かれては、ティアナも拒否することもできず、華麗な仕草で腰を引き寄せられる。

側で成り行きを見守っていたフィネは頬を染めて口元に手を当て息を飲みこみ、エマは瞬き一つせず、きらめく瞳で二人の後ろ姿を見送った。

※

パタン――と、閉じた扉の音だけが静かな室内に響き、ダリオに抱き寄せられるように寝室に連れて来られてしまったティアナは動揺を隠せずに瞬いた。

「あの、ダリオ様……」

戸惑いがちに名を呼んでダリオを振り仰いだティアナは、氷の瞳の中に言い知れぬ熱を宿した眼差しで強く見つめられ、心臓が跳ねる。

「アデライーデ――」

愛おしげに名を呼ばれ、見つめ合ったまま沈黙が流れる。
ふっとダリオの蜂蜜色の瞳の中にうっとりするほど甘い光がきらめいて、ティアナは息が止まるかと思う。その瞳があまりに美しくて、吸い込まれそうで――
ふわりと薫るような甘い微笑みを浮かべたダリオは、ティアナの腰にまわした腕にきゅっと力を込めて引き寄せると同時に、ティアナをその腕の中に抱き上げた。瞬間、ダリオのたくましい体をすぐ側に感じたティアナはときめかずにいられなかった。
記憶を取り戻し、レオンハルトによせていた恋心が胸をしめていても――
記憶のない間、不安に押しつぶされそうになった夜、側にいて支えてくれたのはダリオだった。身元も分からない自分に優しく接してくれ、いつも気遣ってくれた。冷酷非情と恐れられているダリオが心優しい人だということも、薫るような華やかな笑みを浮かべることも知っている。
魅惑的な微笑みに見つめられて、何度もときめいて、これが恋なのかと考えた。
ただ、自分は偽りの花嫁であり、ダリオが向ける甘やかな瞳は周囲を誤魔化すための偽りの愛情だと思っていた。だけど――
今、ティアナを見つめるダリオの瞳が切なさを帯びて深い輝きを放つ。その焦がれるような熱が、強く求めるような光が――偽りとは思えなくて、ティアナの心を奪った。
ティアナは身じろぐことも、声を出すことも出来ずに抱きあげられたままベッドまで連れていかれてしまう。
ぎしっとベッドの軋む音と共に、仰向けに転がされたティアナの上にダリオがおおいかぶさるように近づいてくる。ゆったりとした服からよく日焼けしたダリオのたくましい肌が見え、色っぽくてドキンとする。息が触れるほどの距離に男らしさを強く感じて、息をつめる。

振り仰ぐと、ダリオの美しい瞳が強く輝き、息が止まるほど見つめられて目眩がした。
その瞳の中に、嵐のように激しい情熱が立ち上がり、あでやかに煌いている。

「アデライーデ、目を、とじて……」

言いながらダリオはティアナの耳の両脇に肘をつき、片手で手を握り、もう片方の手の甲でティアナの頬にゆっくりと触れる。
ティアナはわずかに赤くなった目元を揺らす。
ダリオはティアナの返事を待たずに、顔を傾けてティアナの額にキスを落とすと、ふっと極上に甘やかな微笑みを浮かべる。腕をティアナの背中にまわしてそっと抱きしめ、ティアナの髪の中に顔をうずめ、甘い囁きをもらす。そのまま――静かな吐息が寝息に代わった……

体を緊張に強張らせていたティアナは、わずかに頭を持ち上げて、ダリオの顔を覗きこむ。
その寝顔が安らぎに満ちているのを見て、きゅっと胸が締め付けられる。
ドキドキと早鐘のように打ち付ける心臓の音を耳の奥に聞いて、ティアナは泣きそうに顔を歪めた。
レオンハルトへの気持ちをさらっていくような大きな波が押し寄せ、ダリオに強く惹かれてしまったことに、どうしようもない不安が胸を押しつぶす。
私はダリオ様のことを――？
自分の気持ちが分からなくて、自分の意志とは関係なく心が奪われそうで……怖かった。

第３９話　奪われる心（後書き）

あまあま展開でございます。
ダリオ派のみなさん！
いいとこで寝不足で寝ちゃったダリオを……応援してあげて！！

第４０話　月影の波紋

揺れ動く気持ちに戸惑いを隠せず、不安から身を守るように強く瞳を閉じていたティアナは、静まっていく鼓動にゆっくりと呼吸を整える。それからダリオの下から体をずらし、横で寝ているダリオに視線を向ける。

けぶる睫毛、通った鼻筋、何度見てもため息がこぼれるような端正な顔立ちを見て、その頬にかかる蜂蜜色の髪に指をからませ、かきあげる。

ダリオが昨夜は一睡もしていないというエマの言葉を思い出し、きっとその前日も王都からほとんど休まずに馬を駆ってきたのだろうと想像する。

意識が飛ぶように寝てしまったのは疲れが溜まっているからだろうと思い、そうしてしまった要因に、星砂漠に行きたいと言った自分の我が儘があることに気づいて、ティアナは切なく瞳を細め、何度もダリオの髪を優しくすいた。

しばらく髪を撫でた後、自室に戻って休もうと思ったが、ダリオがティアナの左手を強く握っていて解くことが出来なかった。無理に解いて、ダリオを起こしてしまうのも申し訳ないと思い、ティアナは天井を仰ぎ、それから思い切ってそのまま寝てしまうことにした。ダリオの隣に横で。

翌朝。目が覚めたティアナは、左手に温もりを感じないことに気がついて、がばっと身を起こす。横を見て、ベッドにダリオの姿がないことを確認すると、ゆっくりとベッドからすり抜ける。

焦がれるような激しい熱を帯びた瞳で自分を射るように見つめる

ダリオの瞳を思い出してしまったティアナは、ほてる頬に手を当て、サロンへと続く扉を押しあけた。
サロンにはダリオの姿はなく、フィネとオスヴァルの姿があった。

「おはようございます、アデライーデ様」
「おはようございます」

わずかに頬を染めたフィネと、ぴしっと姿勢を正して言ったオスヴァルに挨拶を返したティアナは、一度自室に戻り着替えを済ませてから、ダリオのサロンに用意された朝食の席に着く。
ティアナが座ってしばらくして、ようやくダリオが姿を現した。
護衛になにやら指示を出しながらサロンに入ってきたダリオは、席についていたティアナに視線を向け、氷の瞳をわずかに細め、席についた。

「ダリオ様、おはようございます」

そう言ったティアナに、ダリオは言葉少なに答え、手にフォークとナイフを持ち、朝食を食べ始めた。
ティアナはわずかに首を傾げながらも、尋常ではない威圧感をまとった昨日のダリオの様子に比べれば、気にする程の事もないと思った。
不機嫌そうに眉間に深い皺を刻み、氷の瞳をギラギラと鋭く光らせているかと思えば、うっとりするほど甘やかなきらめきを浮かべて見つめたり、抱くようにティアナを側に置いて執務をした昨日のダリオは明らかに様子がおかしかった。だが、そんなことがなかったようにあまりにいつも通りに接する方がおかしいとは、ティアナは気づいていなかった。
ダリオが氷の瞳の中にやりきれないほど切なげな一筋の光を帯びてティアナを見つめている事も。

ダリオの中に静かなる波紋が広がりつつあることも――

※

イヴァー・オアーゼから馬車で四日かけて戻ってきたティアナは、ハレムで与えられた自室で荷物を整理する。自国に持ち帰る荷物はほとんどなく、川に流された時に身につけていた侍女服、ハレムにいる間にダリオからの贈り物の一部――本や珍しい金飾りなど、本を書き写した手記、銀木蓮の下で出会った黒髪紫瞳の女性から手渡された銀細工の華飾りが入った小箱、帰国の途中での着替えとして数着。それだけだった。

行李一つに荷物をしまい終えたティアナは、渋るフィネから箒や雑巾を奪い取り部屋を掃除し、使っていたベッドのシーツやテーブルクロスを洗濯して、サロンから続く庭園に干した。

ティアナがイーザ国の姫だったという事実は公にはせず、国に帰ることだけを周りに告げる。

だがティアナは、今までお世話になったマティルデとフィネには、自分が記憶喪失だったこと、イーザ国の姫で国に帰ることを打ち明けた。

薄々事情を察していたマティルデはとくに表情を変えることなく。

「そうですか、よろしゅうございましたね」

と言い。フィネは驚きを露わにし、それから涙ぐんでしまった。

「国に戻られてしまうのですね……、もうアデライーデ様のお世話を出来ないのかと思うと寂しいです」

言いながらティアナに抱きついてすすり泣いた。
普段ならば、行儀がなっていないと小言を言いそうなマティルデも、この時ばかりは横でわずかに眉根を寄せながら、困ったように苦笑しただけだった。
それから、部屋の掃除の合間にニコラに会いに行った。すべての事情を聞いたニコラは。

「そういうことでしたか――」

目を瞬いてため息をつき、好奇心を宿した漆黒の瞳をティアナにまっすぐと向けて尋ねる。

「それで、月下星珠の花の蜜を食べると忘れた記憶を思い出すことができる――という言い伝えは正しかったのですか？」

私は視線を半ば伏せ、複雑な笑みを向ける。

「分からないわ――、蜜を飲んだのかどうか、定かではないから」

曖昧な私の答えに対して、予想外にニコラは満足げに微笑んだ。

「そうですか。砂漠の華の言い伝え、月の精霊の気まぐれ――研究する価値はありそうですね」

そう言って、月下星珠について調べてみると瞳にまぶしいほどの情熱を輝かせ、ニコラは意気揚々と席を立った。

「それではティアナ様、いずれお会いすることもあるでしょう。それまで、ごきげんよう」

優雅に一礼したニコラは、その背に豊かな黒髪をなびかせて行ってしまった。

ティアナはハレムの庭園の一角に設けられた椅子の背もたれに体重を預け、ぐーっと両手を空に向けて伸ばし、視界いっぱいに青空を映す。

白い猫足の円卓を挟んだ反対側には、先程までニコラが座っていた同じく猫足の白い椅子が置かれている。

ティアナは円卓に片肘をつくと、うっとりと目を細める。

この一月の間にあった出来事を思い出して、色々な事があったと感慨にひたる。

ドルデスハンテ国からの帰途、氾濫した川に流され、気が付いたら見知らぬ土地、おまけに記憶を失っていて。拾われた先はハレムで、スルタンに偽りの花嫁として協力し、命を狙われ、魔女の友人も出来た。初めての砂漠、伝説の土地、そして――

レオンハルトとの再会――

胸をかきたてるような甘い疼きの中に、激しい炎が時折ちらつく。

星砂漠でダリオに抱きしめられた夜、ティアナの胸を荒波のようにかき乱し、支配していた嵐は凪いでいた。

このままもっと長い時間をダリオを共に過ごせば、今はまだ小さな気持ちが――愛に代わる予感はした。だけど、ティアナはダリオとこの先、未来を共にすることはない。ティアナにはイーザ国に帰、やらなければならないことがある。ダリオの側にはいられない。

そして――

いつか未来を歩く自分の隣にいてほしいと願うのはダリオではなかったから。

切ない囁きのような吐息をもらしたティアナは、ぎゅっと締め付けられる胸を押さえ、ダリオに最後の挨拶をするための、決意を強く抱きしめた。

自室に戻ったティアナを待っていたのは、ダリオからの使いの者だった。
普段、昼間は執務で忙しいダリオは夜にならなければハレムに来られず、ティアナも夜までダリオを待つつもりだった。
だがタイミング良く呼ばれたことを好機と思い、ティアナは決意を胸に案内役の女官について王宮へと向かった。
王宮に足を踏み入れたのは、ここに来た日以来だったことに気づく。あの時は、十分に王宮を見る余裕がなかったが、白い壁に、高い天井に描かれた絵は趣味が良く、気品にあふれた美しい王宮にため息をもらした。
ドルデスハンテ国の王城も素晴らしかったが、ロ国の王宮は華やかさが際立っていた。
ティアナが案内されたのは、長い通路をいくつも通り、何度も角をまがった先の部屋だった。初めは、あまり人目につかないように遠回りをして案内されたのかと思ったが、足を踏み入れた室内はがらんとし、調度品はほとんどなく、簡素な小卓と椅子とベッドが一つあるだけだった。
てっきりダリオの執務室に案内されると思っていたティアナは首を傾げ、案内してくれた女官を振り返ったのだが。
パタンと目の前で閉ざされた扉の向こうで、金属のカチャカチャという音がやけに耳に響く。ティアナは、すっと背中に冷たい汗を流した。
「あのっ、ダリオ様はどこでしょうか……？」
大きな声で、扉の向こうの女官にティアナは問いかける。
「スルタンは間もなくお見えになりますので、こちらでしばらくお

待ちくださいませ」

女官は落ち着き払った声で静かに告げると、するすると衣擦れの音を立てて遠ざかっていってしまった。

ティアナは呆然と、扉の前に立ちつくす。

ダリオが来るのだとしても、なぜ部屋に鍵をかけるのか腑に落ちない。

しかし、部屋から出ることも出来ず、近くを通りかかる人の気配もなく、この部屋から出ることは出来そうになかった。

女官の言葉が真実ならば、いずれダリオは来るはずだ――そう思い、ティアナは部屋に置かれた椅子に腰かけ、大人しく待つことにした。

それから、どのくらい待っただろうか――

コツン、コツンという足音が近づき、扉の前で止まったのを聞いてティアナはぱっと顔を上げる。

声を聞かなくても、そこにいるのがダリオだと感じたティアナはためらわずに声をかける。

「ダリオ様――。ダリオ、さ、ま……？」

返事がないことに不安を感じ、ダリオの名を呼ぶ声がだんだんと小さくなる。

ぴゅーっと吹き抜ける風が、扉をカタリと揺らす。その向こう側で、ダリオがきゅっと足元を踏みしめる音がする。それから、少しの間を挟んでダリオの声が聞こえた。

「アデライーデ、ハレムにいるのは記憶を取り戻すまでと約束したが――お前にはもう少しの間、ここにいてもらう」

その声は、喉の奥から絞り出したようにかすれ、やりきれないよ

うな苦しさを秘めた、悲痛な叫びのようで、ティアナの胸をついた。

「用事がすみ次第、迎えに来る――」

決意のこもった声で付け加え、ダリオの足音は静かに遠ざかっていく。

ティアナはざわざわと押し寄せる胸騒ぎに、きゅっと自分の体を強く抱きしめる。波紋のように広がっていく不安を落ち着かせるように浅く呼吸を繰り返し、その場にしゃがみこんだ――

第４０話　月影の波紋（後書き）

ランキングに参加しています。
「小説家になろう　勝手にランキング」ぽちっと押して頂けると嬉しいです（＾＾）

第４１話　災厄のつぶて

時は遡り、イヴァー・オアーゼの夜。
ティアナとレオンハルトがダリオのサロンを去り、ダリオがレオンハルトに対して敗北を感じ、嫉妬の炎を燃やしていた時、ふっと上げた視線の先、暗い闇夜を映す窓に黒い怪しげな影が揺らめいた。

『好きならば――奪ってしまえばいい……』

脳に直接響く、甘ったるい優美な声で、誰かがささやいた。

『愛しいのなら――力ずくで自分のものにしてしまえばいいのだ』

誘うような声に、一瞬、自分の胸の中に抱きしめるアデライーデを想像し、うっとりと目元を緩め、それからはっとして頭を振る。
ただ手に入れるだけならば、スルタンの権力を持ってすれば簡単だ。しかし、ダリオが欲しいのは、権力で手に入るようなものではない。
欲しいのは――アデライーデの愛。力ずくで奪えない、愛だ――
そう思う、それなのに。

『そんなのは詭弁だと、分かっているだろう？　他の男にみすみすとられてもいいのか？』

窓辺に映る影が大きく揺らぎ、その中に闇色の双眸があやしく光る。
閉じ込めようとしていた恋の炎がじりじりと心を焼き焦がし、小

さな穴を作ってそこからアデライーデを求める強い気持ちが溢れだす。
心を壊しそうな勢いで欲望が体中に渦巻き、ダリオの心を黒い影が支配し、欲情を駆りたてる。
『そうだ、欲望のまま、女を手に入れろ――』
脳に響く甘美な声に身をゆだねそうになったダリオは、ぎゅっと眉根を寄せて、反射的に、窓に拳を叩きつけた。
ガシャン――という悲痛な音が響き、ガラスがあたりに散らばった。そこにはすでに、怪しい影はなかった。
立ち上がったまま肩で大きく息をついたダリオの、額には汗がにじみ、精悍な頬を伝い落ちた。

切なく心を震わせる、はじめての気持ち。愛しい――という気持ちを教えてくれたアデライーデと、ずっと一緒にいたかった――
アデライーデと過ごす何気ない日常がいつまでも続き、いつか、アデライーデが自分を愛してくれたら嬉しいと思った。
そんなふうに想い描いた小さな夢が――アデライーデが記憶を取り戻し、その婚約者のレオンハルトが現れことで、ガタガタと音を立てて崩れていく。
それでも、アデライーデ自身の自由と幸せを願うダリオは、愛しい気持ちを封じ込め、アデライーデを自国に帰す決意をした。それなのに――
先程の甘美な誘惑の言葉が頭から離れない――
ダリオは忌々しげに舌打ちし、それからぐっと奥歯を噛みしめる。その瞳を底からギラッと光らせた。
苛立たしげに椅子に座り直し、ダリオはそのまま眠れずに夜を明かした。

翌日、胸の中に疼く欲望を押さえることに必死になり、その反動でアデライーデを手の触れる所に置きたいと思った。
その矛盾した行動に、戸惑い、思い切りアデライーデを胸の中に抱くことで――あらぶる欲望を心の奥底に閉じ込めた。アデライーデへの気持ちに完全に蓋をすることで、思いを断ち切ろうとした。
王宮に戻れば、アデライーデは自国に戻る。それまでの間、距離を置いて接すれば、それで自分の気持ちを上手くコントロールすることができると思ったのだ。しかし――

王宮に戻ったダリオを待ち構えていたように、ダリオの元に隣国の使者が面会を申し出ているという知らせが届く。
ダリオはすぐにそれがレオンハルトだと気づき、ぎりっと奥歯を噛みしめる。その瞳には、嫉妬の炎がちらついた。
だが、前回のように一蹴するようなことはしなかった。レオンハルトとの面会を受け入れた。
アデライーデを愛する一人の男として、レオンハルトのことは憎らしいが、一国を治めるスルタンとして、隣国の使者に会う必要があった。
国のため、民のため、他国と協力して異常気象に取り組まなければならない。そのための対策は星砂漠にいる時からすでに打ち、条約を結ぶための準備は整っていた。

※

王宮の一室に案内されたレオンハルトは、星砂漠で見たロ国のスルタンを思い出す。
突き刺すような威圧的な視線は、敵意だった――

なぜ、そのような目でみられるのか理由は分からなかったが、自分に対して向けられた敵意を敏感に感じていたレオンハルトは会ってもらえないかもしれないという不安を抱えながら、それでも王宮へと、スルタンに面会するために向かった。

本当は星砂漠に寄った後、王宮のある首都ワール・パラストでロ国の情報を収集し、西の国に行っていた密偵と合流して情報を確実なものにしてから、面会を願いに王宮に行く予定だった。

だが、星砂漠で偶然にもスルタンに出会い、この機会を逃してはいけない――と頭の片隅で警鐘がなっていた。レオンハルトはそれだけ焦っていたのだ。

各地での異常気象は深刻化し、早くなんとかしなければならないという王族としての責任感が募り、じっとしていられなかった。

全く話を聞いてもらえなくても、レオンハルトは簡単に諦めたりはしない。ワール・パラストに移動し、情報を集め、条約を結ぶための準備を完璧にする。

必ず協定を結び、国に帰る――

涼やかな目元に強い使命感を宿したレオンハルトは、面会を承諾され、通された一室のソファーに深く腰掛け、姿勢を正す。その瞳をくっと上げ、もうすぐ開くであろう扉を見つめた。

※

エマを伴い、レオンハルトの待つ部屋を訪れたダリオは、レオンハルトが一人で来ていることに、わずかに片眉を上げた。

「お待たせした」

素っ気なく言ったダリオは、レオンハルトの向かいのソファーに

どかりと腰を落とし、長い足を大きくくむ。

「こちらも時間が惜しい。単刀直入に、用件をお伺いしよう――」

切り込むように、鋭い視線を投げるダリオに、レオンハルトはごくんと喉を鳴らし、まっすぐ顔を上げ、正面に座るダリオの氷の瞳を見据えた。

「各地で起る異常気象について、協力を願い出ます。ここに細かい条約の内容は明記しました――被害情報の開示提供、被害地にあてる兵の派遣を要求。国境での被害についてはそれぞれの国が対応するよりも協力して行う方が効率的と思われます」

ソファーの間に置かれた小卓の上に差し出された書面を手にとり、さっと目を通したダリオは、その内容の精密さに驚き、それを隠すように眉根をきゅっと寄せる。

「西のエリダヌス国、南のイーザ国とフルス国からは条約に対する賛同を得て、現在は正式な文面を取り交わしているところです」

自国の利害だけを前面に押し出した条約なら蹴飛ばしてしまおうと思っていたが、あまりにもまともな内容に、他国の協力の必要性を感じているダリオに異論はなかった。その上、すでに三国と条約を交わしたというのを聞いて、ダリオはますます断る理由がなくなる。

そして、ほんの一時星砂漠で会っただけのレオンハルトの本質を見抜けなかった、愚かな自分が歯がゆい。レオンハルトは王族としての誇りはもちろん、優秀さも書面から滲みでていた。

ただ、ティアナの婚約者だからと侮っていた自分に後悔する。

静かに書面を小卓に置いたダリオは、額にかかる蜂蜜色の髪を大

きくかきあげて、冴え凍る瞳に挑戦的な光を宿す。
「いいだろう――そちらの条件に不満はない」
その言葉にほっと胸をなでおろしたレオンハルトは、続いて紡がれた言葉に眉根を寄せた。
「ただし、こちらから一つ条件をつけさせてもらいたい」
そこで言葉を切ったダリオは凛としたその瞳の底に、一瞬、思いつめたような光をきらめかせる。
「貴殿と……私の預かっている客人の婚約話が上がっているようだ。こちらの条件は、その婚約の解消――。ティアナ姫は私がいただく」
「なにっ……」
思わぬ話にレオンハルトは澄んだ瞳を動揺に揺らす。
国同士の条約の条件として、一個人の婚約解消が条件に上がるとは思わなかったレオンハルトは驚きの声をもらし、そして、星砂漠で自分に向けられた敵意の眼差しを思い出す。
ちらっとダリオに視線を向けたレオンハルトは、その時と同じ威圧的な眼差しの中に、わずかに、でもはっきりと嫉妬の色が混じっているのを見逃さなかった。
この人もティアナ様を愛している、のか――？
敵意の理由に気づいたレオンハルトは息を飲み、そしてきゅっと唇を握りしめる。
「それは……」
その声はあまりに弱く掠れていて、レオンハルトは自分自身で戸

惑う。
国のためを思うのならば、自分自身の想いなど切り捨てて、頷くべきなのは分かっている。それなのにそれが出来ないのは、レオンハルトがティアナを愛おしく思っているから――
胸の内にたぎる想いをもてあまして、群青色の瞳にかかる長い睫毛を震わせる。
婚約はまだ成立していないと言おうかとも思ったが、言いたくなかった。
ティアナを渡したくない――と、強く、確かにレオンハルトの心が叫んでいた。
レオンハルトはくっと顎を上げると、はっきりした口調で言葉をつむいだ。

「ティアナ様は誰のものでもない。断る――」

ゆるぎない光を宿したレオンハルトに真っ正面から挑むように見つめられ、ダリオはその瞳をギリッと光らせて、いまいましそうに唇をかみしめた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4106x/

ビュ＝レメンの舞踏会　―星砂漠のスルタン―

2011年12月7日06時51分発行